

にししもやた

西下谷田遺跡

—弥生・古墳時代前期編—

平成18年3月

宇都宮市教育委員会

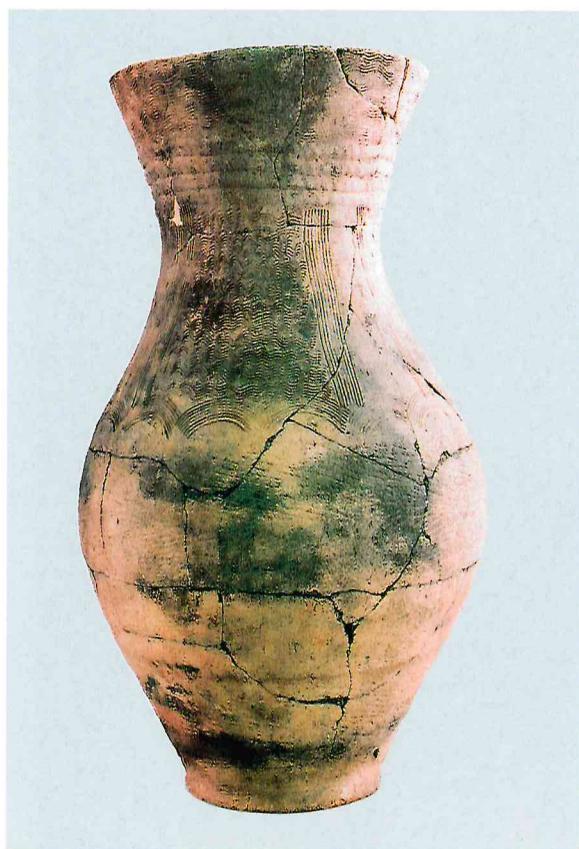
巻頭カラー1

調査区全景

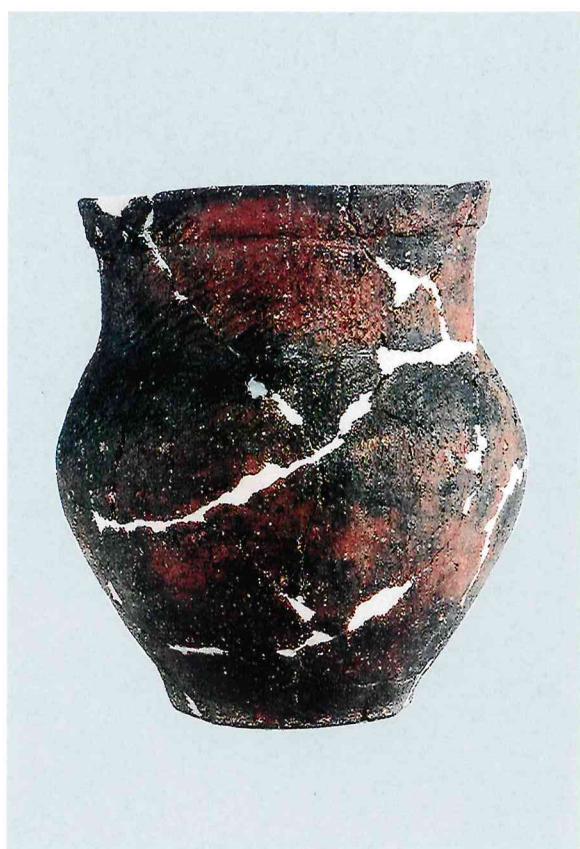




①遺跡とその周辺



②十王台式土器



③吉ヶ谷式（系）土器

序

本遺跡は、宇都宮市南部の茂原町に所在し、清掃工場建設に先立ち発掘調査が行われました。調査の結果、県内ではあまり調査例がない弥生時代中期の竪穴住居跡が確認されたほか、初期大和政権が成立する時期のムラの様子がわかる遺構も確認されました。

今回のこのような調査成果は、本県の古代史を研究する上で極めて貴重なものであり、本報告書が多くの方々により広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査及び報告書の作成にあたり、多大なるご協力とご理解を賜りました関係諸機関及び関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成18年3月30日

宇都宮市教育委員会

教育長 伊藤文雄

例　　言

- 1 本報告書は、栃木県宇都宮市茂原町字西下谷田に所在する西下谷田遺跡のうち、弥生時代と古墳時代前期の遺構に関する発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、宇都宮市清掃工場建設に伴い、宇都宮市環境部より宇都宮市教育委員会に依頼されたものである。
- 3 調査は、4次にわたり実施し、今回の調査分は平成10年4月2日～平成11年3月31日に第3次調査を、平成11年4月2日～平成11年8月18日に第4次調査を実施したものである。
- 4 調査面積は、第3次調査が約23,000m²、第4次調査が2,300m²である。
- 5 発掘調査での測量、写真撮影等は、京極隆利、吉澤宣行がこれにあたった。
- 6 遺構・遺物の整理、実測などは、大澤順子、君島朱美、澤村有紀子、大野節子、大森八重子、鈴木芳子、福田貴久栄、樋口静子、鈴木道子、川津淳子、阿久津とよ子の協力得て、今平利幸がこれにあたった。また、遺物の写真撮影は、今平利幸、大澤順子、君島朱美、澤村有紀子がこれにあたった。
- 7 本書の執筆は今平がこれにあたった。
- 8 本遺跡出土の遺物及び図面・写真は、宇都宮市教育委員会で保管している。
- 9 発掘調査の関係者は次のとおりである。

[指導助言]

宇都宮市文化財保護審議委員会委員　塙静夫

〃　　　　　　大金宣亮
〃　　　　　　橋本澄朗

[事務局]

<発掘調査時>

<報告書作成時>

教育長	大塚一之	教育長	伊藤文雄
教育次長	阿部将樹	教育次長	福田幹雄
文化課長	桜井敬朔	文化課長	渡辺卓
文化課長補佐	西田秀雄	文化課長補佐	小林房夫
文化財保護係長	手塚英男	文化財保護係長	梁木誠
文化財保護係	梁木誠	文化財保護係	大塚雅之
〃	小松俊雄	吉澤宣行	〃
〃	大塚雅之		板倉英伸
〃	神野安伸	〃	神野安伸
〃	富川努	〃	富川努
〃	栗原武夫	〃	増山孝之
〃	増山孝之	〃	今平利幸
〃	京極隆利	〃	須田浩太郎
〃	今平利幸	〃	前原義之
〃	清水正幸	〃	井上俊邦
		〃	大島羊子

〔調査補助員〕

今井トキ、大越ミカ、栗原利江、佐々木績、篠原キヨノ、鈴木二郎、高嶋好子、田村フミ子、寺内ミキ、橋本キク江、橋本尚子、藤田幸子、藤沼チヨ、山崎テル、山崎ミイ、吉成千代子、遠井文子、鈴木雅人、山崎末子、高山礼子、吉田弘、橋本一夫、児玉祐美子、細野誠、寶島幸子、山崎徹、清水豊

10 発掘調査及び報告書作成にあたっては次の諸機関、諸氏の御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略)

栃木県教育委員会文化財課、(財)とちぎ生涯学習文化財団、秋元陽光、石部正志、板橋正幸、大川清、片根義幸、酒井清治、酒寄雅志、篠原浩恵、田熊清彦、田熊信之、田辺征夫、中山晋、永岡正美、日向野昇、深谷昇、藤井恵介、山中敏史

凡　　例

1 挿図の縮尺は、竪穴住居跡などの遺構が1/60とし、遺物は1/3で示した。また、遺物実測図番号は遺構平・断面図の番号及び図版の遺物番号と一致する。

2 断面図基準線は標高であり、平面図の方位は真北を示す。

3 遺構実測図の土層説明においては、次の略号を使用した。

ロームブロック…ロームB 今市パミス…IP 七本桜パミス…SP 鹿沼パミス…KP

4 遺構においては次の略号を使用した。

竪穴住居跡…SI 掘立柱建物跡…SB 溝…SD 土坑…SK

不明…SX

5 遺構平面図において は炉、 は焼土、 は炭化物を示す。

6 土器実測図の は赤彩の範囲を示す。

目 次

I はじめに

1 調査の経過と方法	1
------------------	---

2 遺跡の環境	1
---------------	---

II 調査概要

1 古墳時代前期

(1) 壇穴住居跡	7
-----------------	---

(2) 掘立柱建物跡	35
------------------	----

2 弥生時代

(1) 壇穴住居跡	36
-----------------	----

(2) 土坑	37
--------------	----

3 遺構外出土遺物	39
-----------------	----

III おわりに

1 古墳時代前期の集落について	41
-----------------------	----

2 弥生時代の遺構について

(1) 土器について	45
------------------	----

(2) 住居跡について	46
-------------------	----

挿 図 目 次

第1図 調査前地形図	2
第2図 第3次調査区遺構配置図	4
第3図 弥生～古墳前期周辺遺跡分布図	5
第4図 古墳時代前期遺構配置図	7
第5図 S I 5 9 平・断面図	8
第6図 S I 5 9 出土遺物実測図(1)	9
第7図 S I 5 9 出土遺物実測図(2)	10
第8図 S I 6 1 平・断面図	12
第9図 S I 6 1 出土遺物実測図	13
第10図 S I 6 2 平・断面図	14
第11図 S I 6 3 出土遺物実測図	14
第12図 S I 6 3 平・断面図	15
第13図 S I 6 4 出土遺物実測図	15
第14図 S I 6 4 平・断面図	16
第15図 S I 6 7 出土遺物実測図	16
第16図 S I 6 7 平・断面図	17
第17図 S I 6 8 平・断面図	18
第18図 S I 6 8 出土遺物実測図(1)	19
第19図 S I 6 8 出土遺物実測図(2)	20
第20図 S I 6 8 遺物平面図	20
第21図 S I 6 9 平・断面図	22
第22図 S I 6 9 出土遺物実測図	22
第23図 S I 7 0 平・断面図	23
第24図 S I 7 0 出土遺物実測図	24
第25図 S I 7 1 平・断面図	24
第26図 S I 7 3 平・断面図	25
第27図 S I 7 3 遺物出土状態図	26
第28図 S I 7 3 出土遺物実測図	27
第29図 S I 7 4 平・断面図	28
第30図 S I 7 4 出土遺物実測図	28
第31図 S I 7 5 平・断面図	29
第32図 S I 7 5 出土遺物実測図	30
第33図 S I 7 6 平・断面図	31
第34図 S I 7 6 出土遺物実測図	32
第35図 S I 7 8 平・断面図	33

第36図 S I 7 8 遺物実測図	34
第37図 S B 2 3 平・断面図	35
第38図 第IV次調査区遺構平面図	36
第39図 S I 9 5 平・断面図	37
第40図 S I 9 5 遺物実測図	38
第41図 S X 0 7 平・断面図	38
第42図 遺構外出土遺物実測図	40
第43図 他地域系統の土器	43
第44図 遺構変遷図	44
第45図 本遺跡弥生中期土器分類図	47
第46図 御新田・上山段階の住居跡	48

表 目 次

第1表 調査経過表	1
第2表 弥生～古墳前期周辺遺跡一覧表	6
第3表 S I 5 9 遺物観察表	11
第4表 S I 6 1 遺物観察表	13
第5表 S I 6 3 遺物観察表	14
第6表 S I 6 4 遺物観察表	16
第7表 S I 6 7 遺物観察表	17
第8表 S I 6 8 遺物観察表	21
第9表 S I 6 9 遺物観察表	23
第10表 S I 7 0 遺物観察表	24
第11表 S I 7 3 遺物観察表(1)	26
第12表 S I 7 3 遺物観察表(2)	27
第13表 S I 7 4 遺物観察表	28
第14表 S I 7 5 遺物観察表	30
第15表 S I 7 6 遺物観察表(1)	31
第16表 S I 7 6 遺物観察表(2)	32
第17表 S I 7 8 遺物観察表	33
第18表 宇都宮市内の弥生中期後半の遺跡	49

写 真 図 版 目 次

卷頭カラー1	②SI78完掘状況
調査区全景	P L 11
卷頭カラー2	①SI95完掘状況
①遺跡とその周辺	②発掘作業員
②十王台式土器	P L 12
③吉ヶ谷式（系）土器	①SI59出土遺物（1）
P L 1	②SI59出土遺物（2）
①SI59完掘状況	②SI61出土遺物
②SI59遺物出土状態	P L 13
P L 2	①SI63出土遺物
①SI61完掘状況	②SI64出土遺物
②SI61遺物出土状態	③SI67出土遺物
P L 3	P L 14
①SI62完掘状況	①SI68出土遺物（1）
②SI63完掘状況	P L 15
P L 4	②SI68出土遺物（2）
①SI64完掘状況	②SI69出土遺物
②SI64遺物出土状態	③SI70出土遺物
P L 5	P L 16
①SI67完掘状況	①SI73出土遺物
②SI68完掘状況	P L 17
P L 6	②SI74出土遺物
①SI69完掘状況	②SI75出土遺物
②SI70遺物出土状況	P L 18
P L 7	①SI76出土遺物
①SI71完掘状況	P L 19
②SI73完掘状況	②SI78出土遺物
P L 8	P L 20
①SI73遺物出土状態	①SI76出土遺物
②SI74完掘状況	P L 21
P L 9	②SI95出土遺物
①SI75遺物出土状況	P L 22
②SI76完掘状況	①遺構外出土遺物（1）
P L 10	P L 23
①SI76遺物出土状況	②遺構外出土遺物（2）

I. はじめに

1. 調査の経過

清掃工場建設に先立ち、平成8年3月1日から31日にかけて実施した確認調査の結果、竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡が数棟、溝、土坑が確認できた。このことから、平成8年度～11年度にかけて4次にわたる本調査を実施した。調査は、調査区を4ブロックに分け、工事の進捗状況に合わせて実施した。それぞれの調査期間と調査面積は次のとおりである。

なお、市が調査した部分の南側を、下水道資源化工場建設に先立ち、平成9年10月1日～平成12年3月30日の期間で、(財) とちぎ生涯学習財団が発掘調査を実施し、7～8世紀にかけての遺構などを確認している。その調査の際にも、古墳時代前期の竪穴住居跡2軒と土坑1基が確認されている。

調査次	調査期間	調査面積m ²	調査内容
第1次	平成8年12月10日～9年3月31日	10,800	奈良時代の竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡4棟、平安時代の墓壙1基ほか (北側調査区)
第2次	平成9年5月25日～10年3月31日	23,000	奈良時代の竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟、鍛冶遺構1軒、平安時代の墓壙1基、時期不明の溝跡5条 (南側調査区) 飛鳥時代の掘立柱建物跡3棟・柱穴列、奈良時代の竪穴住居跡32軒、掘立柱建物跡9棟、井戸跡3基、平安時代の墓壙13基、時期不明の溝跡8条
第3次	平成10年4月2日～11年3月31日	23,000	古墳時代前期の竪穴住居跡15軒、掘立柱建物跡1棟、古墳時代後期の円墳5基、奈良時代の竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡2棟
第4次	平成11年4月2日～11年8月18日	2,300	弥生時代の竪穴住居跡1軒、奈良時代の竪穴住居跡4軒ほか

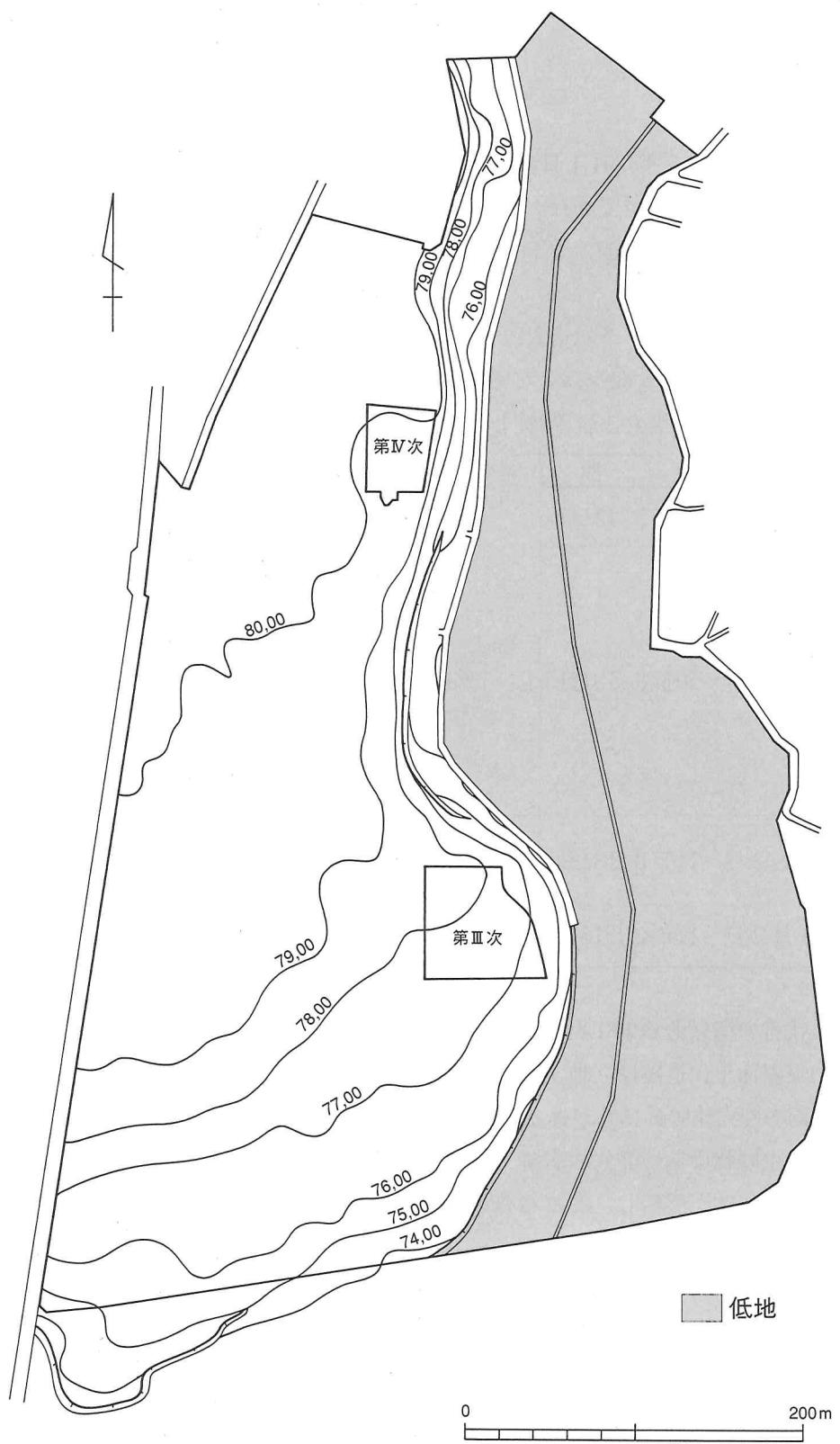
第1表 調査経過表

第1図は、今回の報告に關係ある第3次調査区と第4次調査区の位置を示した地形図である。台地の東側には谷が入り、その東斜面上に遺跡は立地する。第3次調査区は地形が舌状に張り出した場所にあたり、この部分で古墳時代前期の竪穴住居跡15軒が確認されている。また、第4次調査区は、それより北へ200mほどのところに位置し、弥生時代中期の竪穴住居跡1軒と土坑1基が確認された。何れの調査区においても7世紀～8世紀にかけての住居跡が展開し、これらの遺構との重複関係が見られるが、今回の報告では、弥生時代～古墳時代前期の遺構に限って報告する。

2. 遺跡の環境

西下谷田遺跡の所在する宇都宮市は、栃木県の中央部に位置し、関東平野の最奥部にあたる。本遺跡は、宇都宮市の中心から南方へ約10kmに所在し、すぐ南が宇都宮市と下野市（旧石橋町）と上三川町の3市町の境界となっている。

本遺跡は、姿川と田川に挟まれた宇都宮・祇園原台地上に立地する。標高は約80mを測る。また、遺跡の東側の神主台地との間に狭い谷が入る。調査前は雑木林と一部畠地であった。



第1図 調査前地形図

次に、本遺跡周辺の歴史的環境について概略を述べる。

旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺跡は、権現山北遺跡、大日塚古墳墳丘下、瑞穂野工業団地遺跡で確認されている。権現山北遺跡では有舌尖頭器と剥片が採集されており、他の2遺跡では剥片が出土している。

縄文時代の遺跡は、石川坪遺跡、西原遺跡、東原遺跡、上坪新田遺跡などがある。石川坪遺跡は、後・晩期の遺跡として有名であり、近年道路拡幅に伴う発掘調査により中期の竪穴住居跡や袋状土坑などが確認され、中期の段階から続く大規模な集落であることがわかりつつある。

弥生時代

中期の遺跡は、本村遺跡（1）、殿山遺跡（19）、権現山北遺跡（10）、立野遺跡（26）、杉村遺跡（28）、磯岡遺跡（29）、仏沼遺跡（31）などが挙げられる。分布的には、宇都宮市茂原町周辺、同市東谷町周辺などのまとまりが見られる。杉村遺跡で見られるように、竪穴住居跡1軒と土坑数基といった遺構数の少ない小規模な遺跡であることがわかる。後述するように、本遺跡でも同様な傾向が窺える。時期的には、中期後半のものが多く、渦巻文をもつ壺がいくつかの遺跡で見られ、東北地方南部との関係が指摘できる。

後期の遺跡は、二軒屋遺跡（3）、天狗原遺跡（8）、向原南遺跡（17）、上の原遺跡（18）、権現山北遺跡、瑞穂野工業団地遺跡（34）などがある。二軒屋遺跡は、後期の標式遺跡であり、本地域では、二軒屋式土器が他の地域に比べ多く出土している。殿山遺跡は、約20軒の竪穴住居跡が確認され、県内では比較的大きな集落跡である。本村遺跡でも12軒の竪穴住居跡が確認されている。道路幅分の調査であることから、住居跡の軒数はもっと増えると考えられ、殿山遺跡同様、この時期になると一遺跡内の住居軒数が10～20軒と増加する傾向が窺える。分布的にも二軒屋遺跡のある宇都宮市雀宮町周辺や同市針ヶ谷町周辺など遺跡の広がりが見られる。

古墳時代

本遺跡に隣接し県で調査をした部分からは、2軒の竪穴住居跡と1基の土坑が確認され、本遺跡の前期集落の一部が確認されている。また、この南西約300mの同台地縁辺には北原東古墳が存在する。一辺が約13mの方墳で、S字甕などの土器が出土することから前期の所産と考えられる。また、近くから直刀の鉄製鎌が出土している。距離的に近いことから本遺跡との関連が窺える。

この宇都宮南部地域は、前期～中期にかけての古墳が多く造られる地域である。また、県内でも早い段階に古墳が築造され始める。

本遺跡から北東約1kmのところにある大日塚古墳（12）は、この地域に初めて造られた古墳で、全長36mの前方後方墳である。昭和58年からの発掘調査により木棺直葬の主体部で、副葬品として素文鏡が出土している。これに続き、その南側に全長50mの愛宕塚古墳が築かれる。舟形の木棺をもつ木棺直葬の主体部で、副葬品として仿製鏡、櫛、刀子、管玉、ガラス小玉などが出土している。その後、谷を挟んだ北側の台地上に全長約60mの権現山古墳が造られる。この3基は何れも前方後方墳である。

また、この古墳群の周辺には、愛宕塚東遺跡（14）や権現山北遺跡といった古墳時代前期の集落跡が存在し、古墳と集落との関連を考える上で興味ぶかい。

前期末から中期初頭にかけては、この茂原古墳群から約1km南に所在する全長54mの上神主浅間神社古墳（35）が造られる。この古墳は円墳で、この地域で始めての円形の形をした古墳である。また、この周辺では方墳が3基確認され、そのうちの神主38号墳は木棺直葬の主体部が確認されたほか、周溝内から斧と鎌の石製模造品が出土している。その後もこの一帯には中期から後期にかけての古墳が連続して造られ、前方後

円墳2基のほか38基の円墳と5基の方墳からなる大規模な古墳群である。この古墳群の西側には殿山遺跡（竪穴住居跡447軒など）、向原遺跡（竪穴住居跡22軒・掘立柱建物跡10棟など）など大規模な中後期の集落跡が見つかっており、この古墳群との関連が窺える。

中期の中ごろになると、田川の東に全長約100mの前方後円墳である笹塚古墳が造られる。この地域に初めて造られた前方後円墳で、周辺には後続する大小の円墳群が多数存在し、東谷古墳群を形成する。また、古墳群の北側には杉村遺跡や磯岡遺跡などの中期から後期にかけての大規模な集落が展開する。



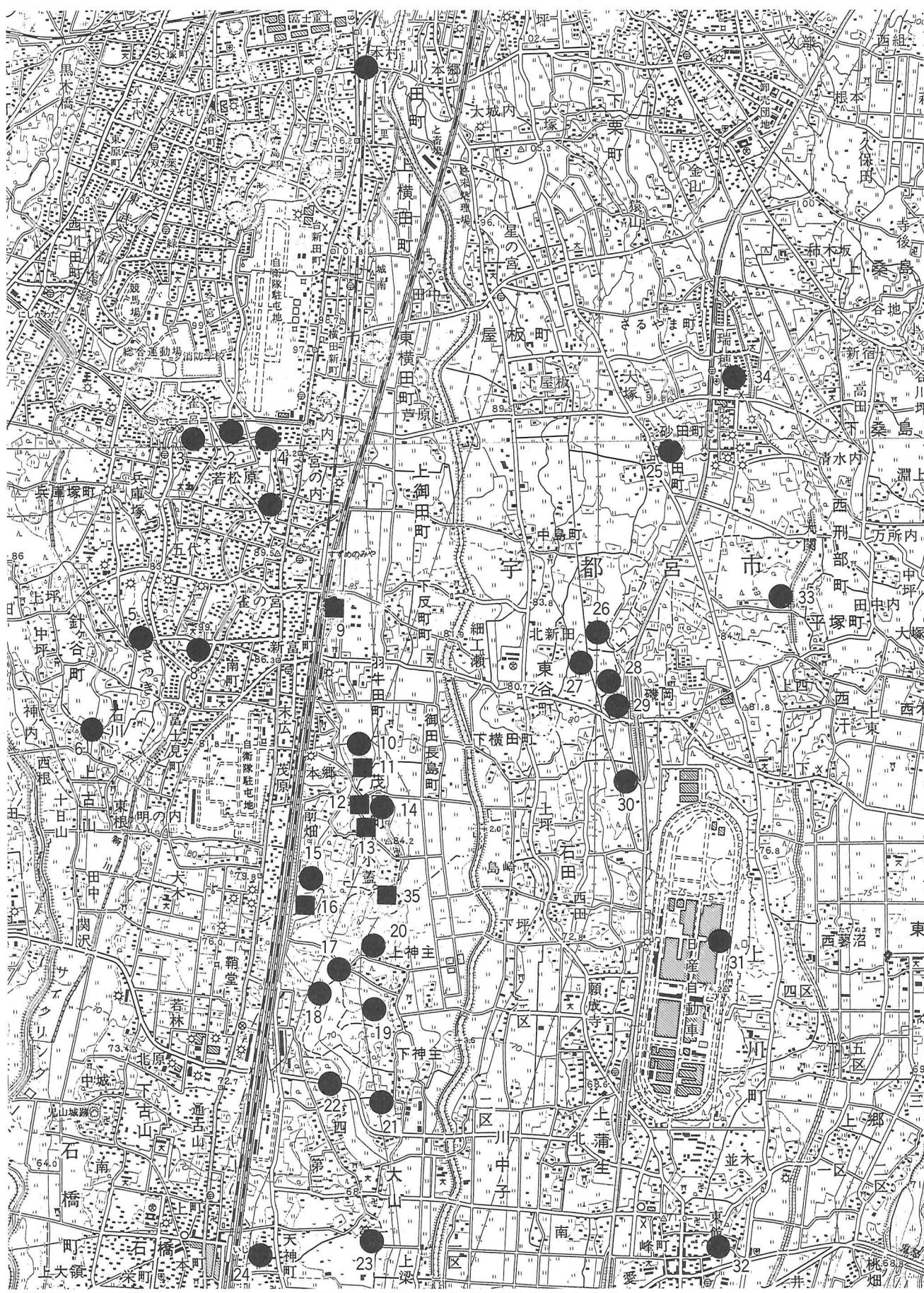
第2図 第3次調査区遺構配置図

飛鳥時代以降

本遺跡内でも奈良・平安時代の住居跡が見つかっているほか、南側を調査した県の調査分では、竪穴住居跡66軒、掘立柱建物跡40棟、井戸10基が確認されたほか、官衙関連の遺構と考えられる7世紀後半代の大型竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡10棟、八脚門1棟、柵列が確認されている。

また、本遺跡から東に約800mの位置には上神主・茂原官衙遺跡が所在する。人名瓦が出土することから従来寺院跡と言われてきたが、近年の調査により、「コ」の字状の掘立柱建物跡の配列をもつ政府跡と大型総柱式掘立柱建物からなる倉庫群からなる河内郡家の可能性が高まった。また、ここから南に約3.5kmのところに所在する多功遺跡も、掘立柱建物と礎石建物からなる倉庫群からなる遺跡であることから、以前から河内郡家の可能性が指摘されてきた。今後、本遺跡を含めた3つの遺跡の関係解明が課題となっている。

また、上神主・茂原官衙遺跡と関連してこの付近を古代の幹道である東山道がとおっていることが判明し



第3図 弥生～古墳前期周辺遺跡分布図

ている。尚、先に述べた多功遺跡付近が田部駅家の推定地となっている。

集落遺跡では、本遺跡の南にある殿山遺跡で、奈良・平安時代の堅穴住居跡が162軒確認されており、先に述べた官衙遺跡と合わせ、この一体が、当時は河内郡の中心的な位置を占めていたことがわかる。

No	遺跡名	所在地	時代と種別	概要
1	本村遺跡	宇都宮市川田町	弥生中・後期の集落跡	弥生中期後半の土器 弥生後期の堅穴住居跡12軒
2	若松原遺跡	宇都宮市雀宮町	弥生	弥生土器
3	二軒屋遺跡	宇都宮市雀宮町	弥生後期の集落跡	二軒屋式土器の標式遺跡
4	一向寺別院付近遺跡	宇都宮市雀宮町	弥生	弥生土器
5	二子塚北遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	弥生後期	弥生土器
6	岡田山遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	弥生・古墳前期集落跡	
7	溜西遺跡	宇都宮市雀宮町	古墳前期集落跡	古式土師器
8	天狗原遺跡	宇都宮市雀宮町	弥生・古墳前期集落跡	古墳前期の堅穴住居跡4軒
9	牛塚東遺跡	宇都宮市雀宮町	古墳前期の墓域	古墳前期の方墳2基
10	権現山北遺跡	宇都宮市茂原町	弥生～古墳前期の集落跡	弥生中期・後期の土器 古墳前期の堅穴住居跡1軒
11	権現山古墳	宇都宮市茂原町	古墳前期の古墳	全長約60mの前方後方墳
12	大日塚古墳	宇都宮市茂原町	古墳前期の古墳	全長36mの前方後方墳
13	愛宕塚古墳	宇都宮市茂原町	古墳前期の古墳	全長約50mの前方後方墳
14	愛宕塚東遺跡	宇都宮市茂原町	弥生～古墳前期の集落跡	弥生土器・古式土師器
15	西下谷田遺跡	宇都宮市茂原町	弥生・古墳前期集落跡	
16	北原東遺跡	宇都宮市茂原町	古墳前期の墓域	古墳前期の方墳1基
17	向原南遺跡	上三川町上神主	弥生の集落跡	弥生後期堅穴住居跡4軒
18	上ノ原遺跡	上三川町上神主	弥生・古墳前期集落跡	弥生後期の堅穴住居跡10軒 古墳前期の堅穴住居跡6軒
19	殿山遺跡	上三川町上神主	弥生の集落跡	弥生後期の堅穴住居跡21軒
20	後志部遺跡	上三川町上神主	弥生	弥生後期の土器
21	薄市遺跡	上三川町下神主	弥生	弥生中期後半・後期の土器
22	大山遺跡	上三川町大字大山	弥生の集落跡	弥生後期の堅穴住居跡1軒
23	木田遺跡	上三川町多功	弥生	弥生土器
24	多功遺跡	上三川町多功	弥生	弥生土器
25	砂田東遺跡	宇都宮市砂田町	古墳前期の集落跡	古墳前期の堅穴住居跡2軒
26	立野遺跡	宇都宮市東谷町	弥生	土坑4基
27	権現山遺跡	宇都宮市東谷町	弥生	土坑1基
28	杉村遺跡	宇都宮市東谷町	弥生の集落跡	弥生中期後半の堅穴住居跡1軒、 土坑2基
29	磯岡遺跡	上三川町磯岡	弥生	弥生中期後半の土坑2基
30	磯岡B遺跡	上三川町磯岡	弥生	弥生土器
31	仏沼遺跡	上三川町西蓼沼	弥生	弥生中期の土坑
32	大町遺跡	上三川町上蒲生	弥生	弥生土器
33	西刑部古屋原遺跡	宇都宮市西刑部	古墳時代前期の古墳と集落跡	古墳前期の方墳2基、堅穴住居跡1軒
34	瑞穂野工業団地遺跡	宇都宮市瑞穂野3丁目他	弥生時代の集落跡	弥生後期の堅穴住居跡2軒
35	上神主浅間神社古墳	上三川町上神主	古墳前期末～中期初頭の円墳	

第2表 弥生～古墳前期周辺遺跡一覧表

II. 調 査 概 要

1. 古墳時代前期

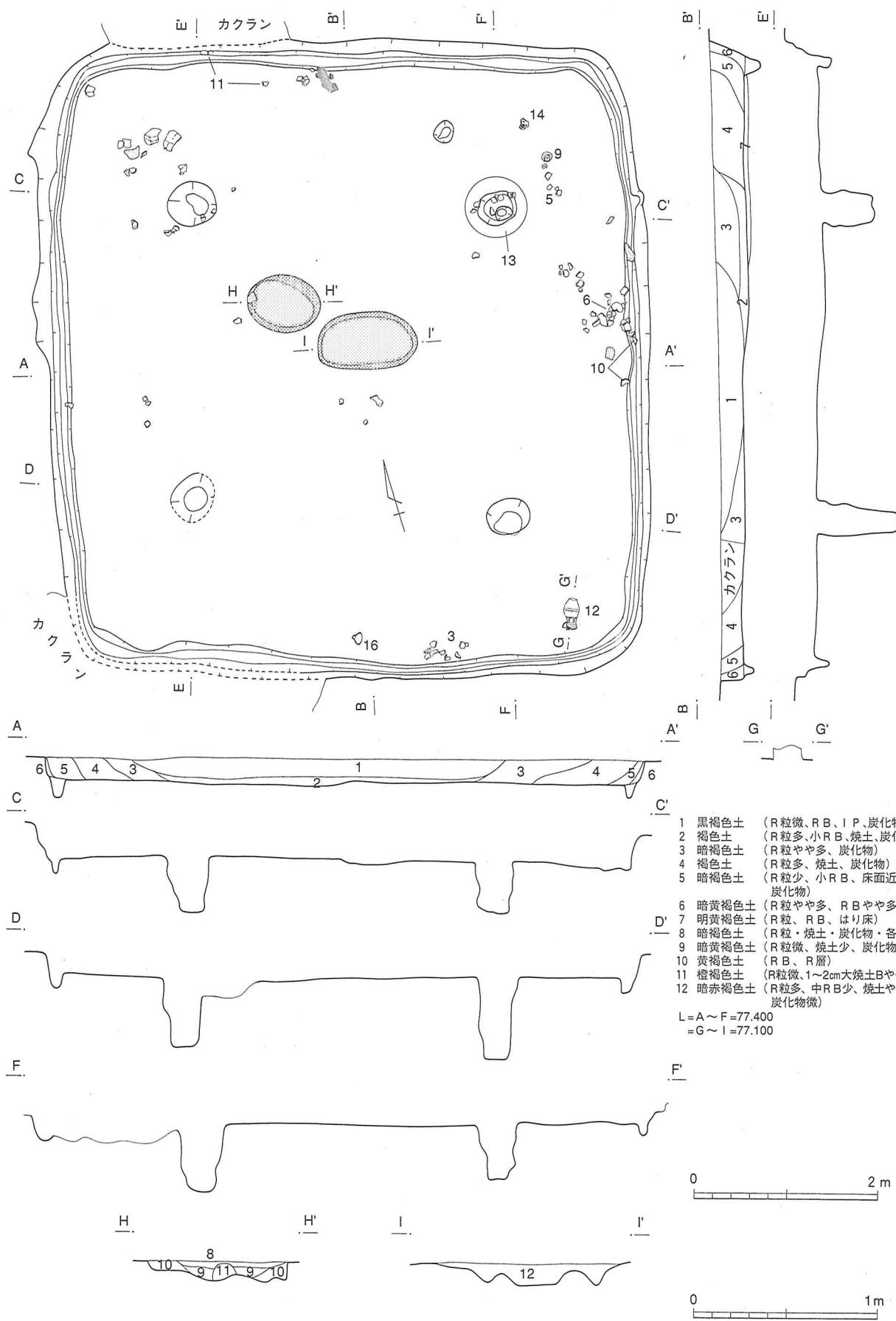
古墳時代前期の遺構は、第3次調査の結果、竪穴住居跡15軒、掘立柱建物跡1基が確認された（第4図）。何れも東に舌状にのびる台地の縁辺に位置する。尚、すぐ南側の県調査分においても2軒の竪穴住居跡、土坑1基が確認されている。



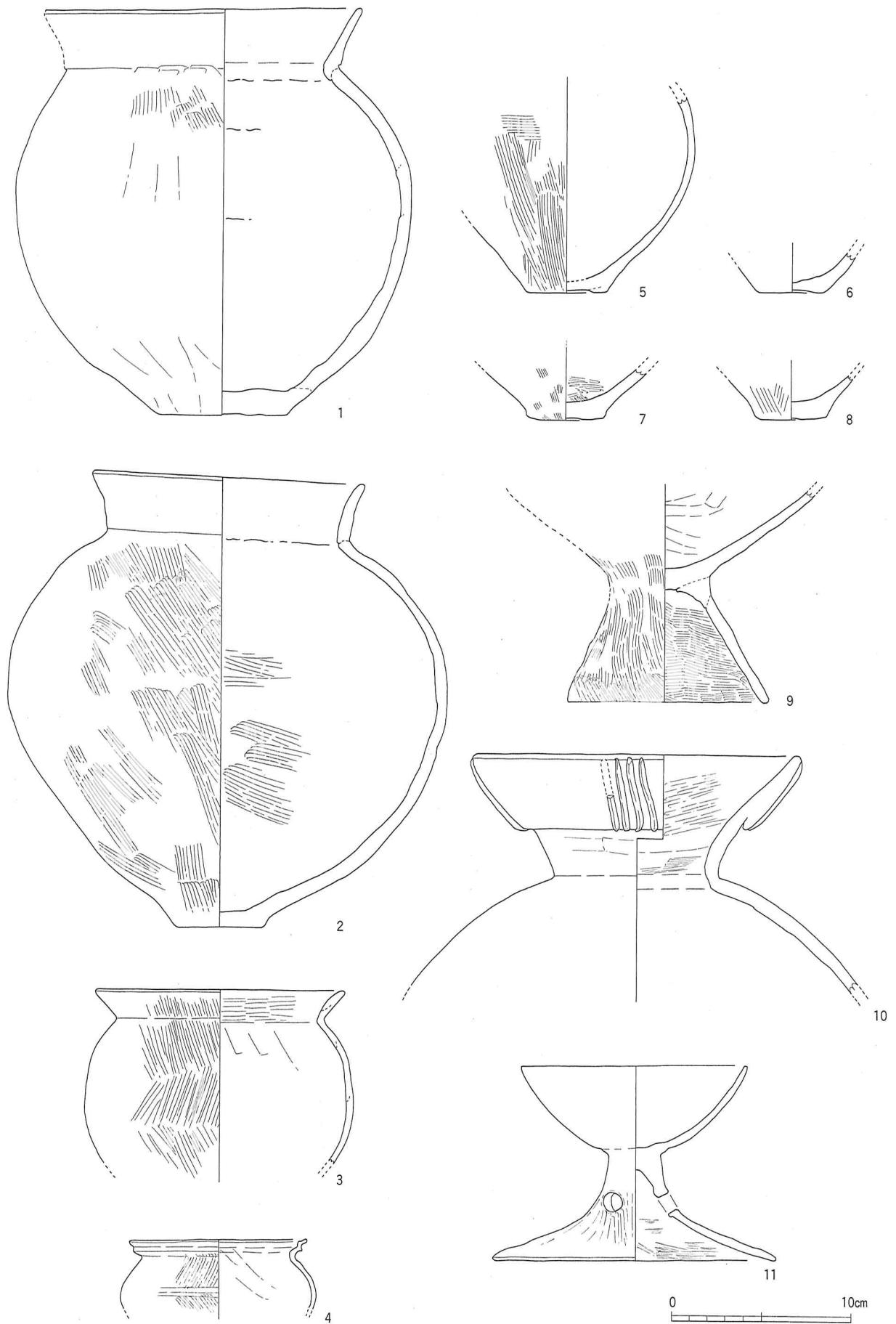
(1) 竪穴住居跡

SI59（第5図）

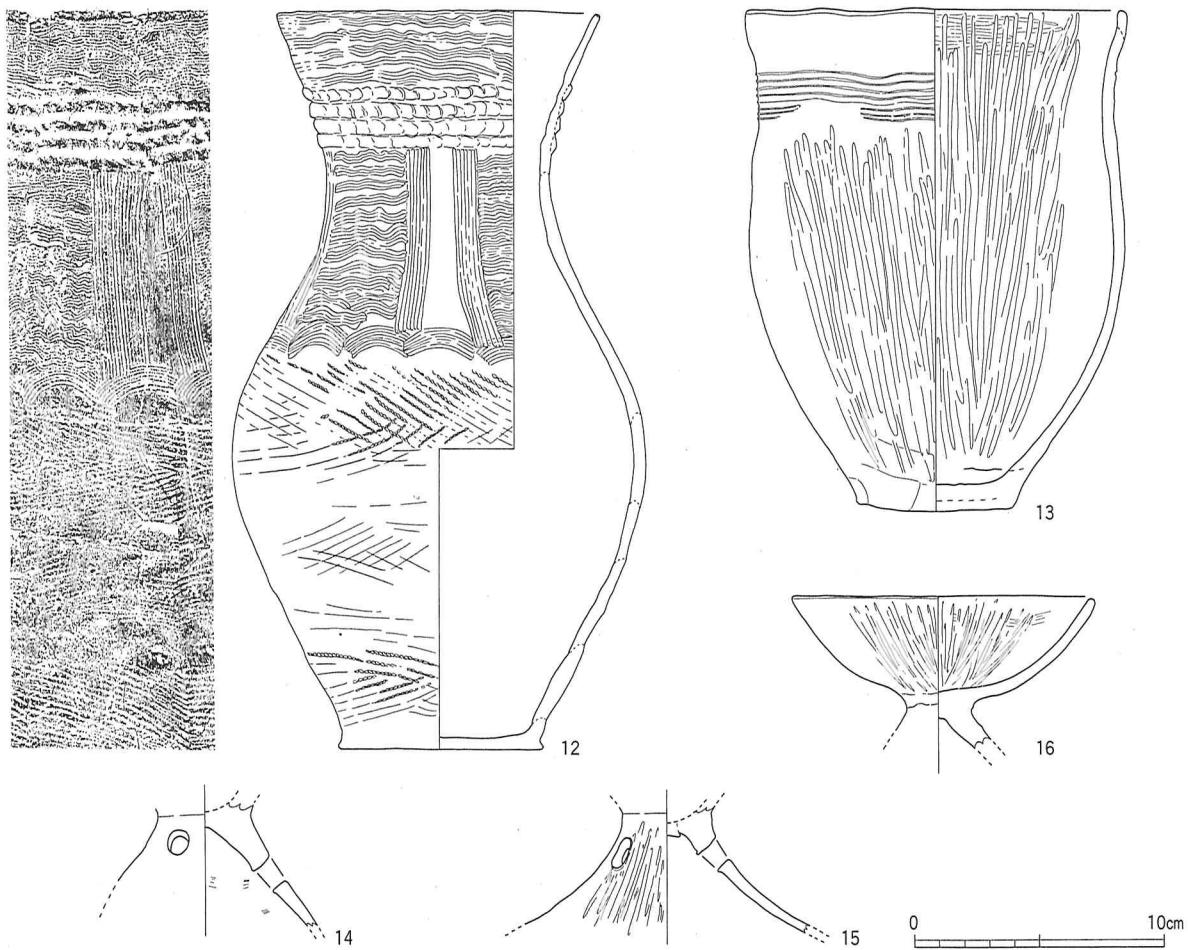
位置 T-42杭付近で住居跡群の中で一番東側に位置する。平面形 南北7.0m×東西6.4mのほぼ正方形。



第5図 S159平・断面図



第6図 S159出土遺物実測図(1)



第7図 SI59出土遺物実測図 (2)

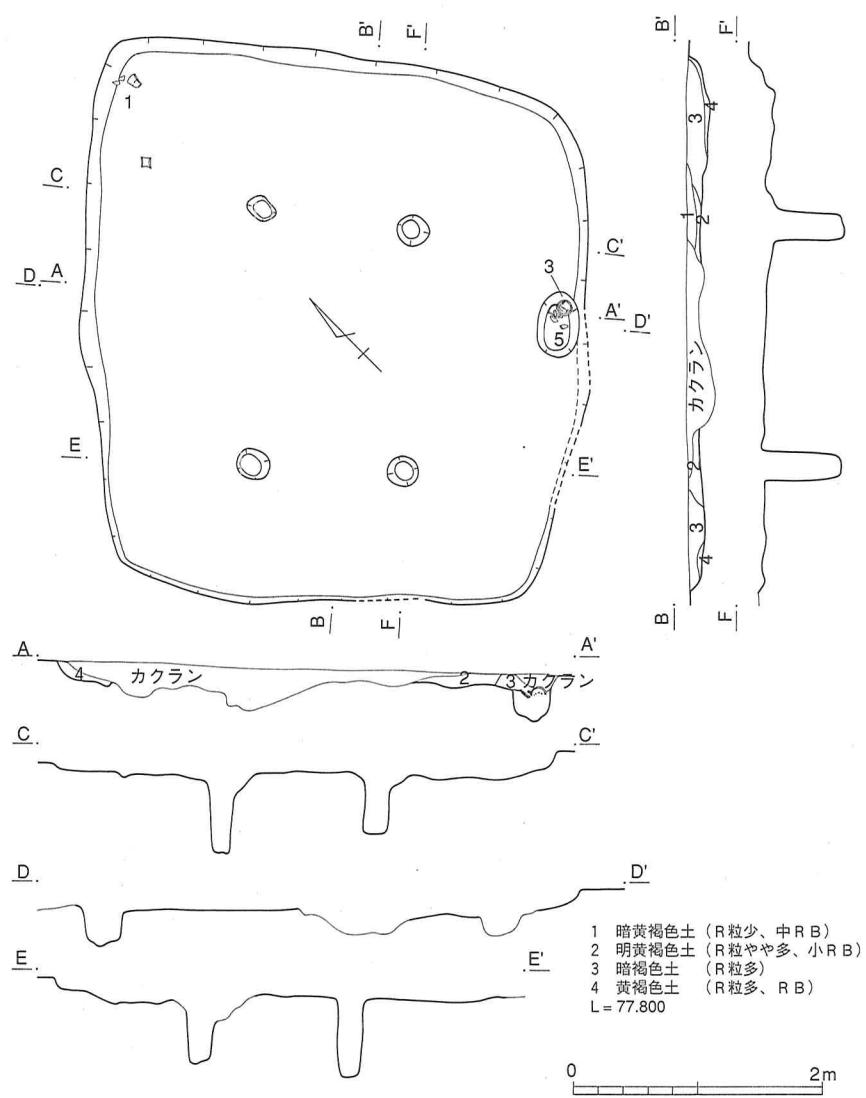
方位 N-16° -E 床面 ローム地山。壁 確認面から深さ30cm。壁溝 全周する。柱穴 4本。炉 ほぼ中央に2カ所 遺物 実測可能な遺物は、壺1、甕10、十王台式土器1、高坏1、小型高坏3。十王台式土器の壺は、南東コーナーから横倒しの状態で出土した。その他の土器の多くは、北東コーナー付近で出土。

器種	寸法(cm)			器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
	口径	器高	底径							
1 土師器甕	(17.6)	22.3	7.2	口縁部は「く」の字に屈曲し、胴部中位に最大径をもつ。平底。	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケ後ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	赤褐色	砂粒、石英、赤色スコリア粒	良好	床直	2/3残
2 土師器甕	(15.0 ～ 16.0)	24.6 ～ 25.0	5.0	口縁部は直立気味に立ち上がり、胴部上位に最大径をもつ。平底。	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケ後ナデ。	乳白色	砂粒、輝石、赤色スコリア粒	良好	埋土中	1/3残
3 土師器甕	13.6	—	—	口縁部は「く」の字に屈曲し、胴部中位に最大径をもつ。	外面：口縁部タテハケ、胴部ハケ後ナデ。 内面：口縁部ヨコハケ、胴部ヘラナデ。	暗褐色	白色粒、角閃石	良好	床直	1/4残
4 土師器甕	9.8	—	—	口縁部はS字状に屈曲し、胴部上位に最大径をもつ。	外面：口縁部ヨコナデ、胴部羽状ハケ後肩部にヨコハケ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	暗褐色	砂粒、輝石、長石	良好	埋土中	口縁部破片
5 土師器甕	—	—	4.3	平底で、胴部はやや球形を呈する。	外面：ハケ。 内面：ヘラナデ。	暗褐色	砂粒	良好	埋土中	1/5残。外面スヌ付着。
6 土師器甕			3.7	平底。	外面：ヘラナデ。 内面：ナデ。	淡褐色	石英、輝石、砂粒	良好	床直	底部片
7 土師器甕			4.2	平底。	外面：ハケ。 内面：ヘラミガキ。	褐色	砂粒	良好	床直	底部片
8 土師器甕			4.0	平底。	外面：ハケ。 内面：ヘラナデ。	暗褐色	白色粒、砂粒	良好	床直	底部片
9 土師器甕			11.2	「ハ」の字に開く台を付す。	外面：タテハケ。 内面：ヨコハケ。	灰赤褐色	白色粒、石英、輝石	良好	埋土中	1/5残
10 土師器壺	(17.8)			折り返し口縁。口縁部に4本1組の棒状浮文が貼りつく。	外面：胴部ヘラミガキ。 内面：口縁部ヘラミガキ、胴部ナデ。	乳白色	砂粒、輝石、赤色スコリア粒	良好	床直	破片
11 土師器小型高坏	12.5	10.7	15.6	坏部は椀状を呈し、脚部は大きく開く。透孔は3孔穿たれる。	外面：ヘラミガキ。 内面：坏部内面ヘラミガキ、脚部内面ハケ。	乳白色	角閃石、輝石、石英	良好	埋土中	1/2残
12 十王台式土器壺	13.0	29.4	8.2	長胴で、頸部は緩やかに湾曲し、口縁部に至る。	外面：口縁部に波状文、その下に3条の隆帯を廻らす。頸部には、縦区画充填波状文を施す。胴部と頸部の境に、連弧文を廻らす。胴部は付加条2種の縄文。底部は砂底。 内面：ナデ。	淡褐色	砂粒、金雲母、赤色スコリア粒	良好	床直	完形
13 樽式系土器甕	15.3	20	6.3	頸部があまり括れず、胴があまり張らず底部に至る。平底。	外面：頸部に2連止の簾状文がめぐる。胴部は縦位のヘラミガキ。 内面：縦位のヘラミガキ。	暗褐色	砂粒	良好	床直	1/3残
14 土師器高坏				脚部がやや内湾気味に開く。 透孔は3孔穿たれる。	外面：ヘラミガキ？ 内面：横位のハケ後ナデ。	橙褐色	輝石、砂粒	良好	床直	1/5残存
15 土師器小型高坏				脚部が大きく開く。 透孔は3孔穿たれる。	外面：ハケ縦位のヘラミガキ。 内面：ナデ。	褐色	砂粒	良好	床直	1/4残存
16 土師器小型高坏	12.3			坏部は椀状を呈する。	外面：縦位のヘラミガキ。 内面：横位のハケ後縦位のヘラミガキ。	褐色	白色粒、砂粒	良好	床直	1/3残存

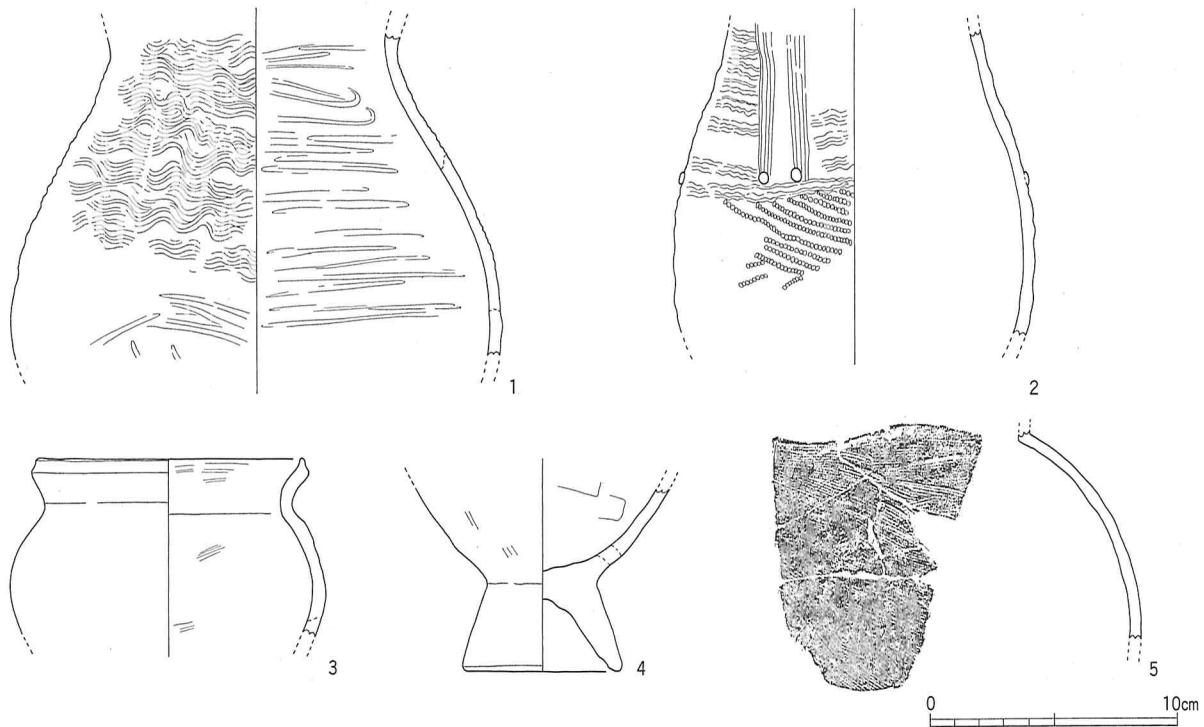
第3表 SI59遺物観察表

SI61 (第8図)

位置 U-39杭付近で住居跡群北西に位置する。平面形 南北4.2m×東西4.0mの方形。**方位** N-23° -W
床面 ローム地山。壁 確認面から深さ20cm。壁溝 無。柱穴 4本。炉 搅乱のせいか確認できなかった。
貯蔵穴 南壁中央に1箇所。0.26×0.16の楕円形で、深さが15cm。遺物 実測可能な遺物は、土師器甕2、台付甕1、樽式系甕1、十王台式壺1。3は貯蔵穴からの出土である。



第8図 SI61平・断面図



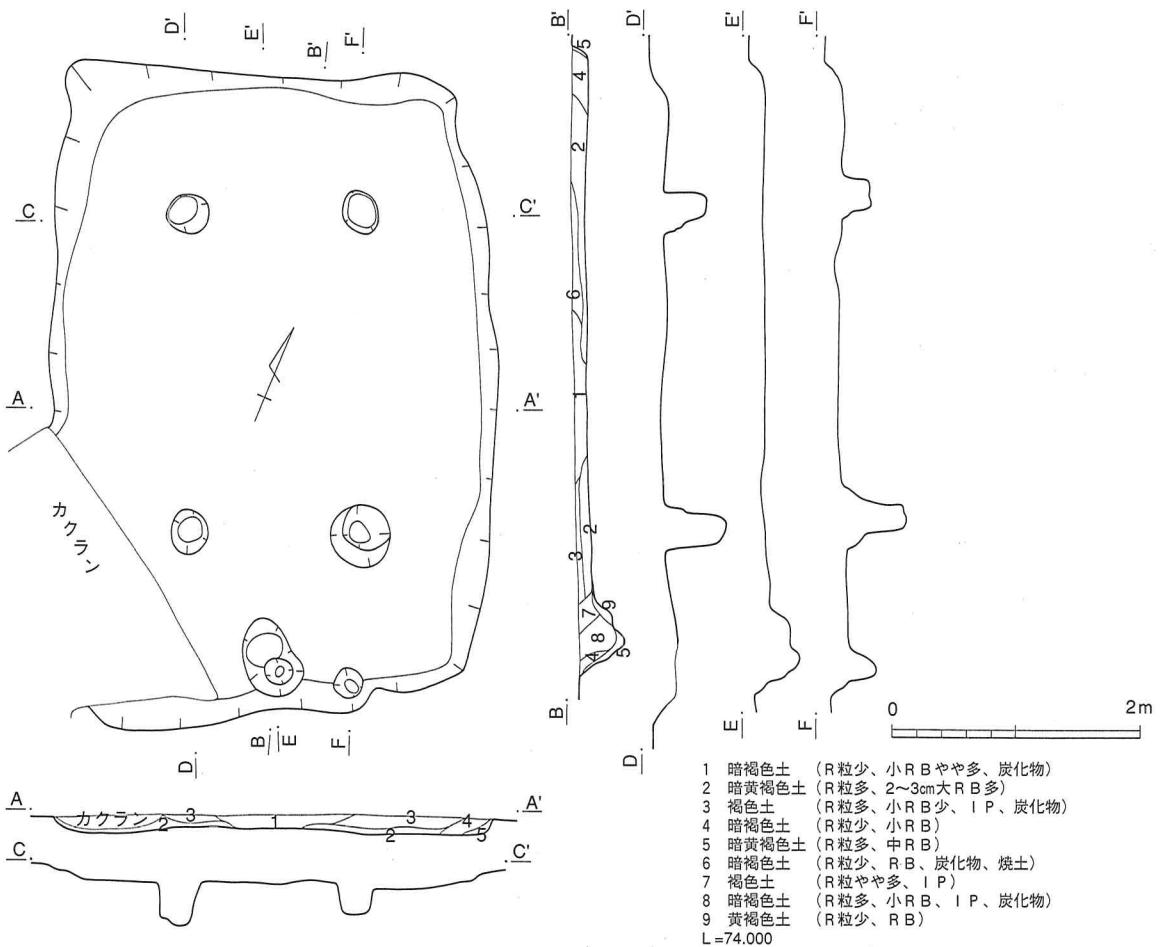
第9図 SI61出土遺物実測図

器種	寸法(cm)			器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
	口径	器高	底径							
1 尊式系甕				頸部があまり括れず、撫肩の胴部。	外面：頸部から胴部上半にかけて波状文。 内面：横位のヘラミガキ。	暗褐色	砂粒、輝石	良好	埋土中	胴部片
2 十王台式壺				頸部があまり括れず、撫肩の胴部。	外面：頸部と胴部の境に波状文、頸部は縦スリット後波状文、円形浮文が付く。胴部は付加条2種の縄文。	暗褐色	砂粒	良好	埋土中	胴部片
3 土師器甕	11.1			口唇部を摘み上げる。胴部は球形。	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。 内面：口縁部ハケ後ヨコナデ、胴部ハケ後ナデ。	褐色	砂粒	良好	埋土中	1/3残 外面スヌ付着
4 土師器甕			6.4	「ハ」の字に開く台を付す。	外面：ハケ。 内面：ナデ。	褐色	砂粒、輝石	良好	埋土中	外面スヌ付着
5 土師器甕				球形の胴部。	外面：ハケ。 内面：ヘラナデ。	暗赤褐色	砂粒	良好	埋土中	破片

第4表 SI61遺物観察表

SI62 (第10図)

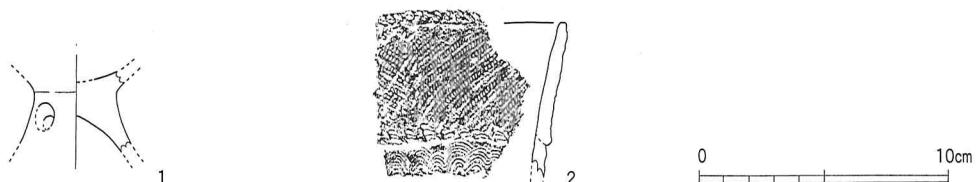
位置 U-41杭付近で、SI64の北側に位置する。平面形 南北4.9m×東西3.5mの長方形。方位 N-9° -W
床面 ローム地山。壁 確認面から深さ20cm。壁溝 無。柱穴 4本。炉 無。遺物 実測可能な遺物は無い。
備考 南壁面に出入り口施設に関連すると考えられるピットが2箇所。



第10図 SI62平・断面図

SI63（第12図）

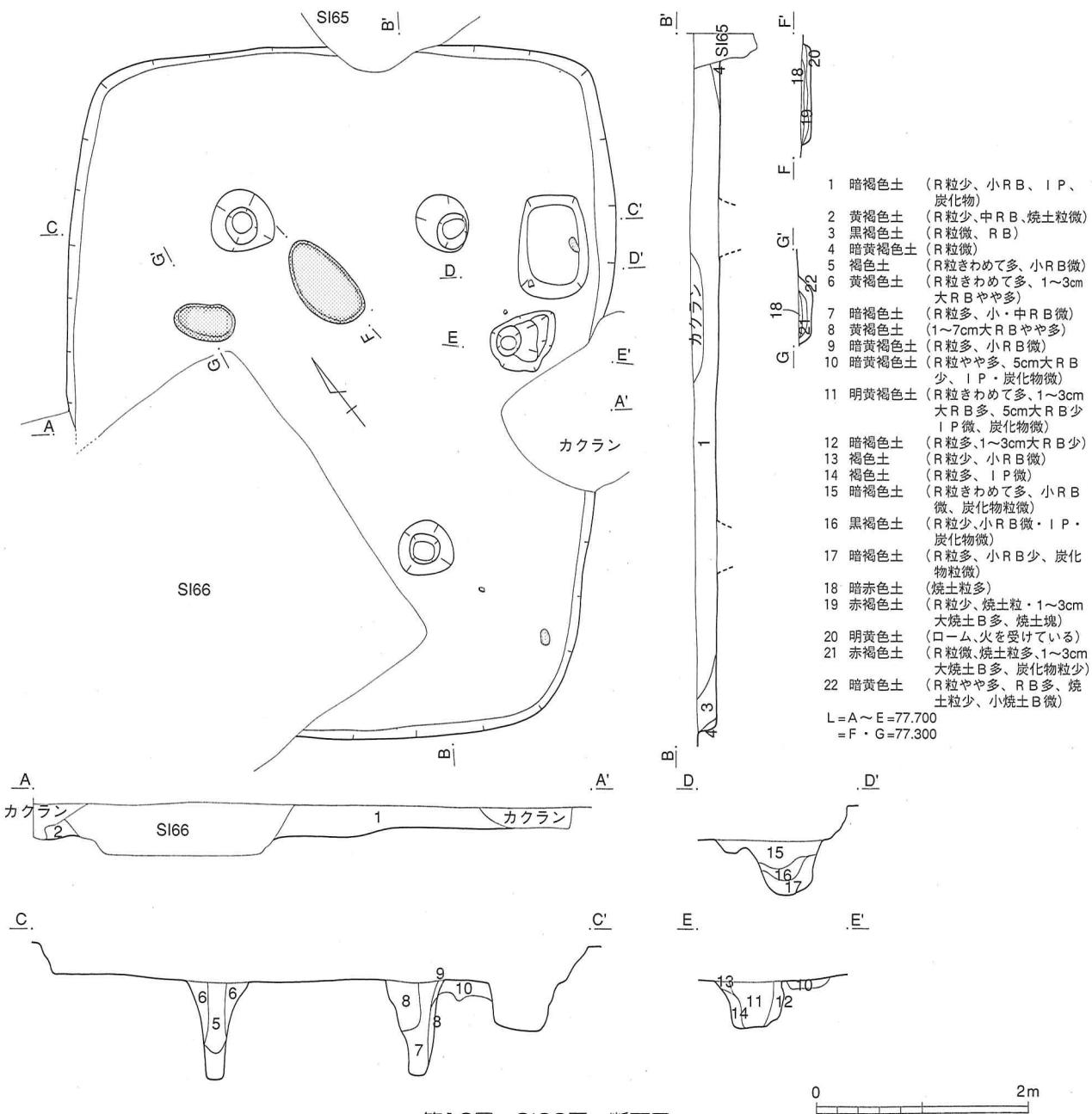
位置 V-39杭付近に位置する。 平面形 南北6.3m×東西4.9mの長方形。 **方位** N-12° -W **床面** ローム地山。 **壁** 確認面から深さ20cm。 **壁溝** 無。 **柱穴** 3本確認されているが、SI66に切られた部分にも柱穴があったと思われる。この他に南東側の壁面寄りに小ピットがある。 **炉** P-1の柱穴付近に2箇所。 **貯蔵穴** P-6のすぐ脇に長軸1.0m×短軸0.6mの隅丸長方形で、深さ30cm。 **遺物** 実測可能な遺物は、高壺1、二軒屋式壺片1。 **備考** SI65とSI66のカマドをもつ住居跡に切られる。



第11図 SI63出土遺物実測図

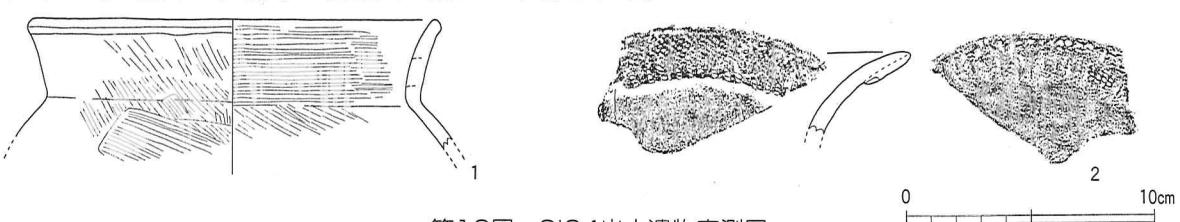
器種	寸法(cm)			器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
	口径	器高	底径							
1 土師器 小型高壺				透孔を3孔穿つ。	外面：縦位ヘラミガキ。	淡褐色	砂粒、輝石	良好	埋土中	破片
2 二軒屋式壺				複合口縁。	外面：口縁部に付加条1種縄文を縦位に施し、頸部に波状文を施す。口唇部と口縁部下端には縄文原体による押捺。	橙褐色	石英、砂粒	良好	埋土中	破片

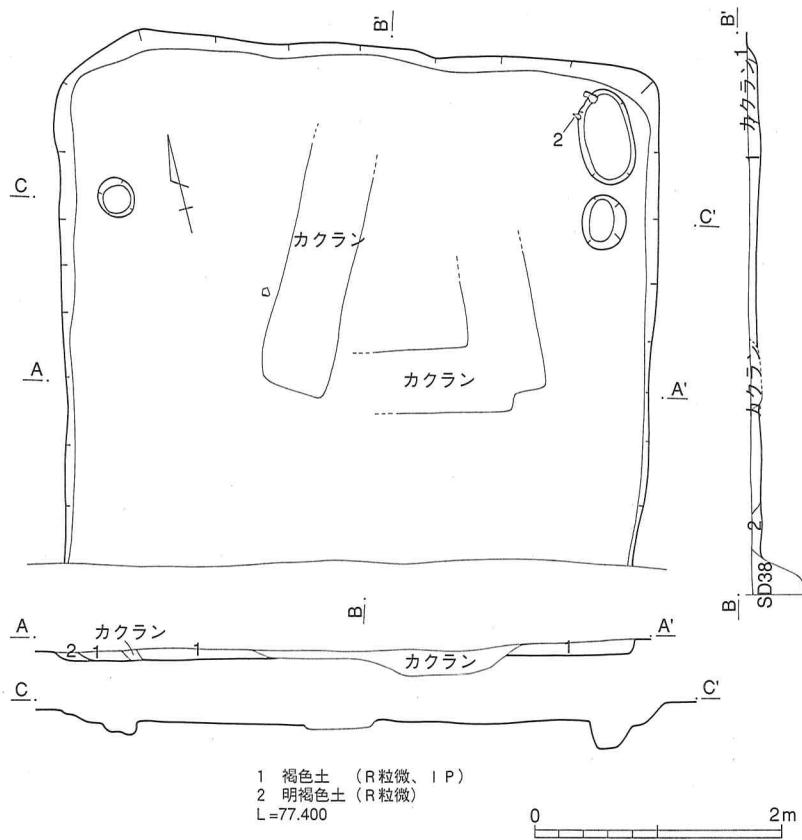
第5表 SI63遺物観察表



SI64 (第14図)

位置 V-41杭付近で、SI62の南側に位置する。 **平面形** 南北 1 m × 東西4.5m。南壁面が溝により切られる。**方位** N-8° -W **床面** ローム地山。 **壁** 確認面から深さ15cm。 **壁溝** 無。 **柱穴** 2箇所ピットが確認されているが、柱穴かどうかは不明。 **炉** 搅乱を受けており不明。 **遺物** 実測可能な遺物は、土師器甕1、弥生式土器片1。 **備考** 南壁面が溝により切られる。





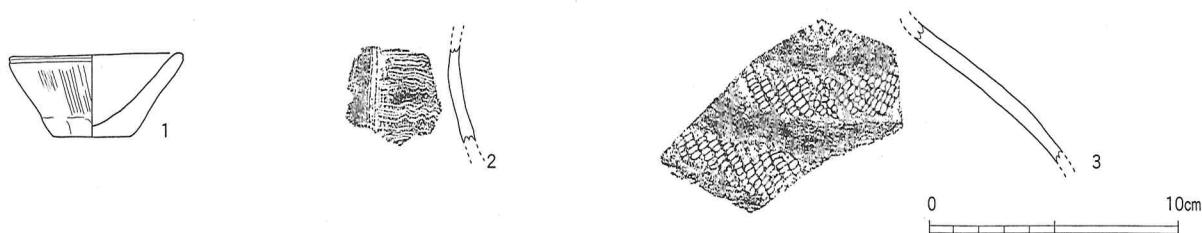
第14図 SI64平・断面図

器種	寸法(cm)			器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
	口径	器高	底径							
1 土師器甕	16.6			直立気味に口縁部が立ち上がる。	外面：縦位のハケ。 内面：横位のハケ。	暗褐色	砂粒	良好	埋土中	破片
2 弥生土器壺				折り返し口縁。	外面：口縁部内外面に繩文を施す。口縁部下端には繩文原体による押捺。	淡赤褐色	砂粒、輝石	良好	埋土中	破片

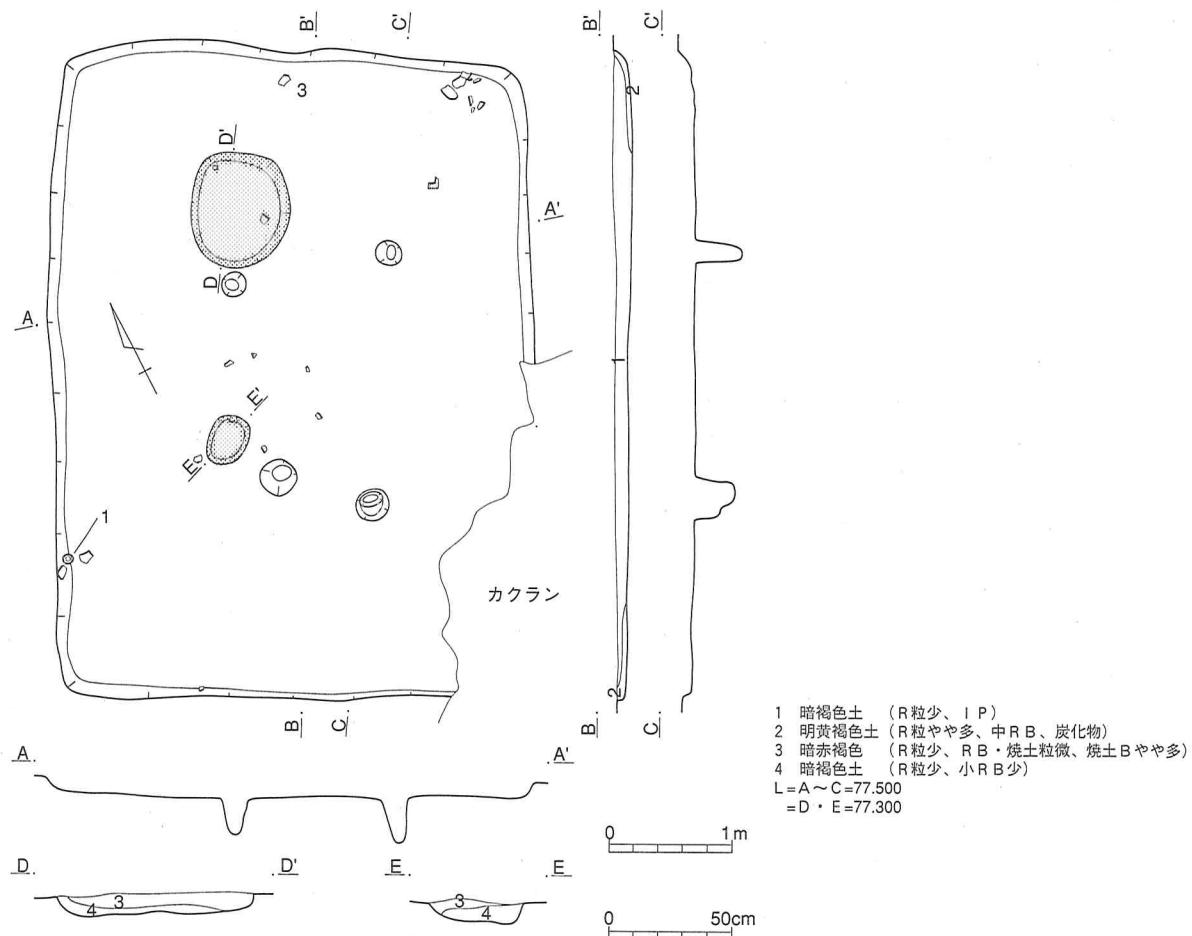
第6表 SI64遺物観察表

SI67 (第16図)

位置 V-41杭付近で、SI62の東側に位置する。平面形 南北5.0m×東西3.7mの長方形。方位 N-1° -W
床面 ローム地山。壁 確認面から深さ20cm。壁溝 無。柱穴 4本。炉 2箇所。遺物 実測可能な遺物は、弥生土器壺2、小型鉢1。備考 南東隅が搅乱により切られる。



第15図 SI67出土遺物実測図



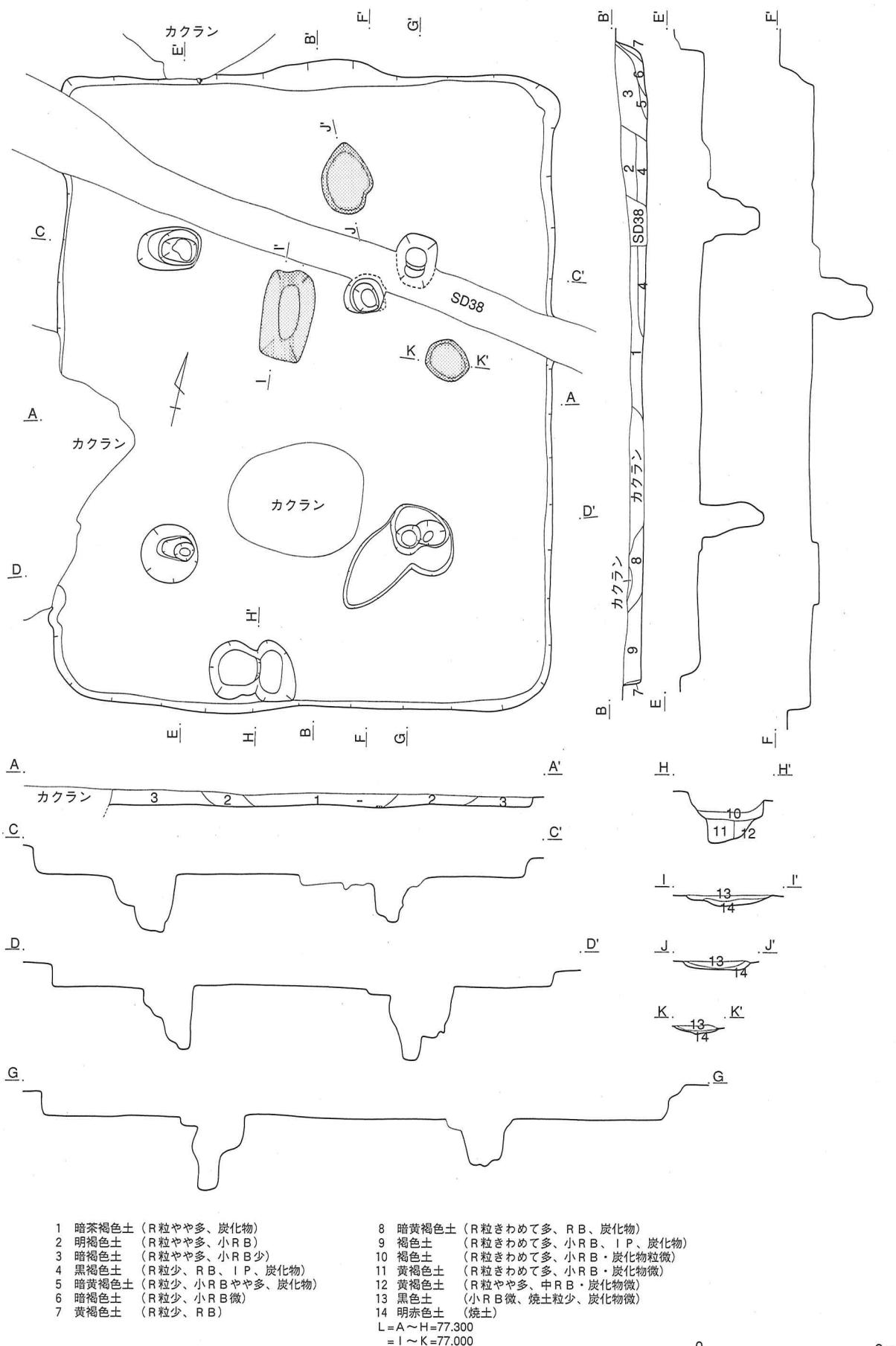
第16図 SI67平・断面図

器種	寸法(cm)			器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
	口径	器高	底径							
1 土師器 小型鉢	7.0	3.3	3.1	平底で、「ハ」の字状に開く。	外面：ハケ。 内面：ナデ。	褐色	砂粒	良好	埋土中	完形
2 十王台式壺					外面：縦区画充填波状文。	淡赤褐色	砂粒 赤色スコリア粒	良好	床面	破片
3 弥生土器壺					外面：単節RLの縄文を施す。	淡褐色	砂粒	良好	埋土中	破片

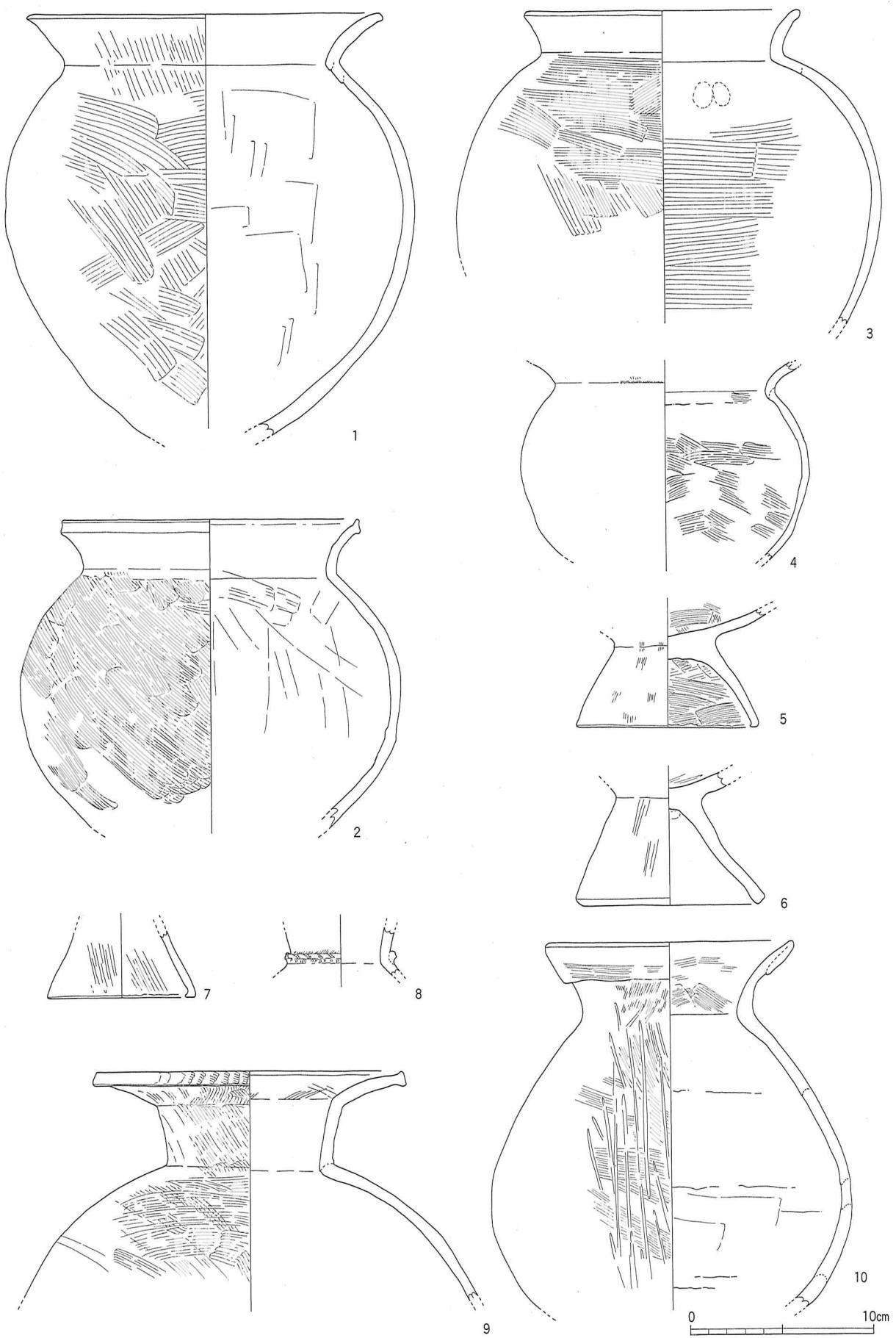
第7表 SI67遺物観察表

SI68 (第18図)

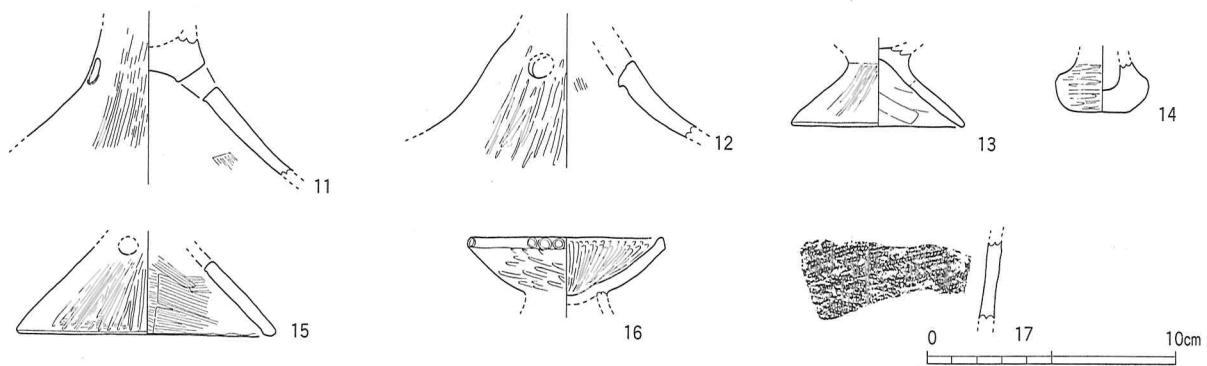
位置 W-42杭付近に位置する。平面形 南北6.7m×東西5.2mの長方形。方位 N-0°-E 床面 ローム地山。壁 確認面から深さ25cm。壁溝 無。柱穴 4本。炉 北東柱穴の周辺に3箇所。遺物 実測可能な遺物は、土師器甕7、壺4、高坏4、器台1、十王台式壺1。備考 南壁面に出入り口施設に関連すると考えられるピットが2箇所。中央部が搅乱により切られる。



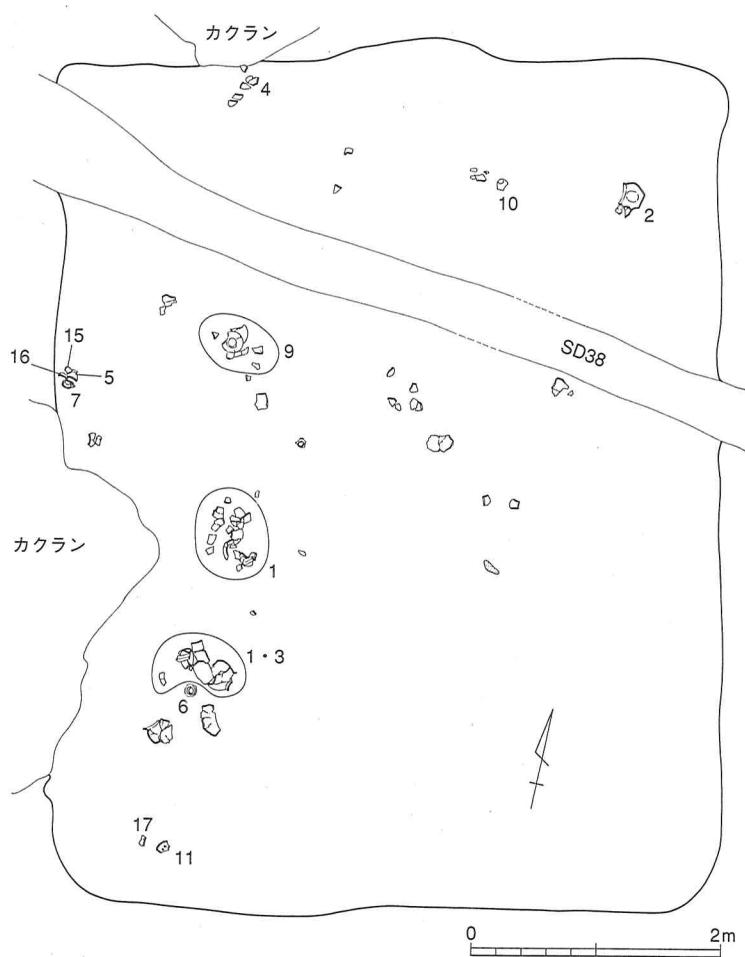
第17図 SI68平・断面図



第18図 SI68出土遺物実測図 (1)



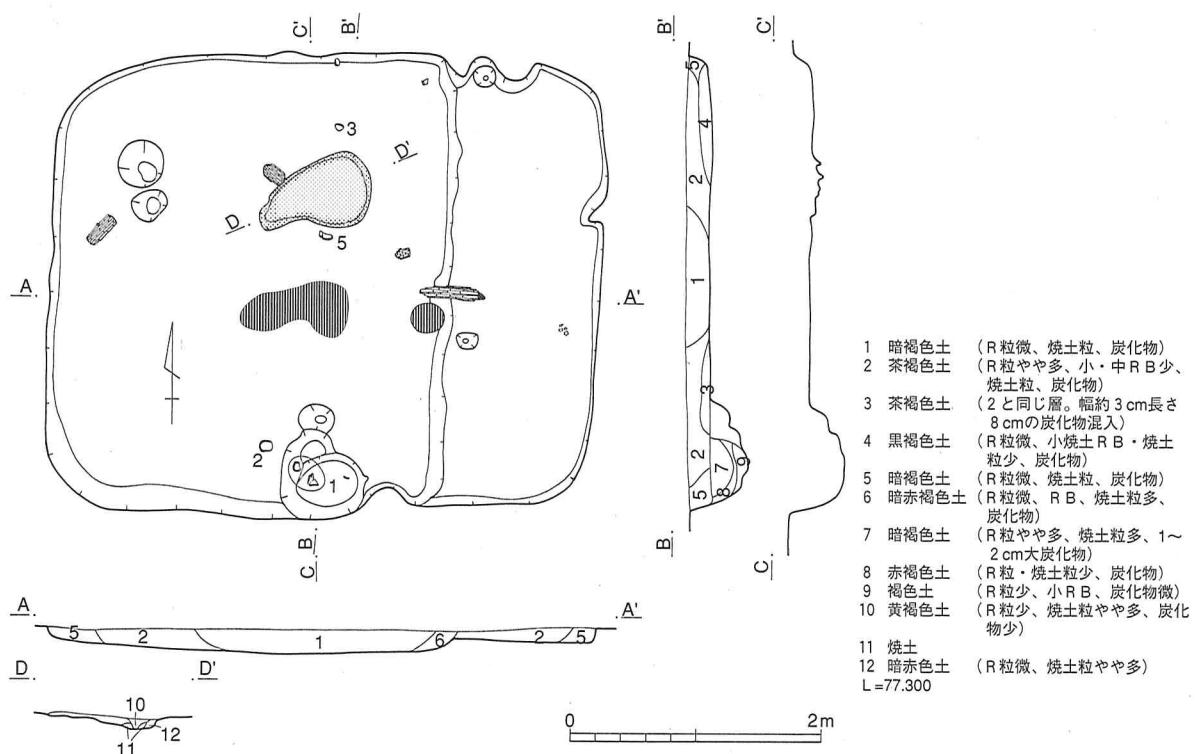
第19図 SI68出土遺物実測図 (2)



第20図 SI68遺物平面図

器種	寸法(cm)			器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
	口径	器高	底径							
1 土師器甕	(19.6)			「く」字口縁。	外面：口縁部ハケ後ナデ、胴部ハケ。 内面：ヘラナデ。	黒褐色	砂粒	良好	床面	
2 土師器甕	16.2			口唇部を摘み上げる。 胴部は球形を呈する。	外面：口縁部ヨコナデ、 胴部ハケ。 内面：口縁部ヨコハケ後 ナデ、胴部ハケ後ナデ。	褐色	砂粒、輝石、赤色スコリア粒	良好	埋土中	
3 土師器甕	(15.0)			「く」字口縁。	外面：口縁部ヨコナデ、 胴部ハケ。 内面：口縁部ヨコナデ、 胴部ハケ。	暗褐色	砂粒	良好	床面	1/4残
4 土師器甕				胴部は球形。	外面：口縁部ハケ後ナデ、 胴部ナデ。 内面：ハケ。	橙褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	埋土中	
5 土師器甕		10.0		「ハ」字状の台を付す。	外面：ハケ後ナデ。 内面：ハケ。	褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	埋土中	破片
6 土師器甕		10.4		「ハ」字状の台を付す。	外面：ナデ。 内面：ヘラナデ。	淡褐色	砂粒、輝石	良好	埋土中	
7 土師器甕		4.0		端部を折り返す。	外面：ハケ。 内面：ハケ。	暗褐色	砂粒、石英	良好	埋土中	台部片
8 土師器壺				頸部に突帯が廻る。	外面：ハケ後ナデ。	淡褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	埋土中	破片
9 土師器壺	15.0			頸部はやや外傾し、口縁部で大きく開く。	外面：縦位ヘラミガキ。 内面：横位のハケ。	淡褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	ピット内	破片
10 土師器壺	13.8			折り返し口縁で、頸部があまり括れず撫肩の胴部。	外面：ハケ後ナデ。 内面：口縁部ハケ後ヨコナデ、胴部ナデ。	赤褐色	砂粒、小石	良好	床面	ほぼ完形
11 土師器高壺				透孔が3孔穿つ。	外面：ハケ後ナデ。 内面：ナデ。一部ハケ。	暗褐色	砂粒、小石	良好	床直	2/3残
12 土師器小型高壺				脚部が大きく開く。	外面：ヘラミガキ。 内面：ハケ後ナデ。	褐色	砂粒、小石	良好	床直	2/3残
13 土師器高壺		7.0		「ハ」字に開く。	外面：ヘラミガキ。 内面：ヘラナデ。	褐色	砂粒、小石	良好	埋土中	台部片
14 土師器小型壺		2.3			外面：ヘラミガキ。 内面：ナデ。	黑褐色	砂粒	良好	埋土中	底部片
15 土師器高壺		10.4		「ハ」字に開く。透孔が2孔穿つ。	外面：ヨコハケ後ミガキ。 内面：ナデ。	黑褐色	砂粒、石英	良好	埋土中	底部片
16 土師器器台	7.8			塊状の受部。	外面：口唇部に円形の刺突文。 内面：ヘラミガキ。	褐色	砂粒、石英	良好	埋土中	底部片
17 十王台式壺					外面：付加条2種の縄文。	淡褐色	金雲母	良好		破片

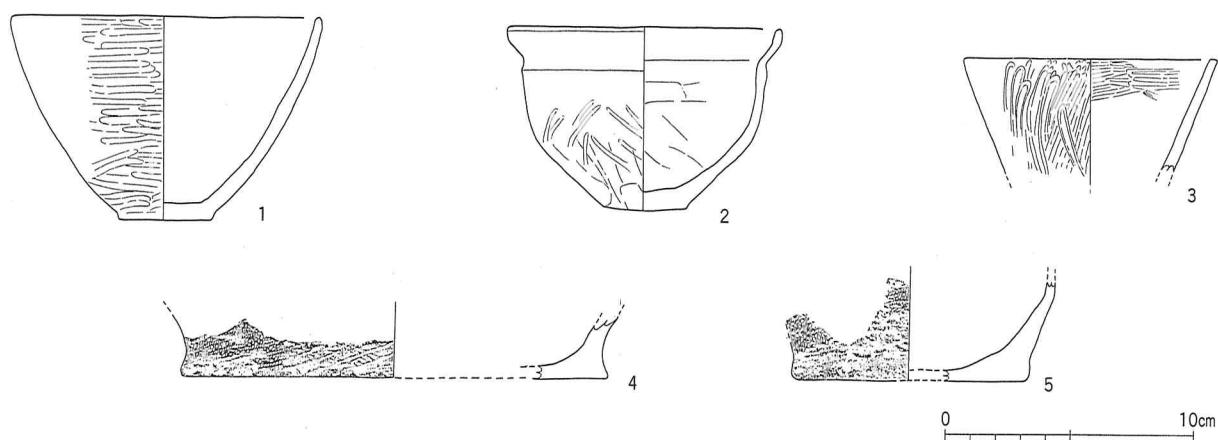
第8表 SI68遺物観察表



第21図 SI69平・断面図

SI69 (第21図)

位置 U-43杭の西側に位置する。平面形 南北3.7m×東西4.25mの長方形で、東側にベッド状遺構がみられる。
方位 N-0°-E
床面 ローム地山。壁 確認面から深さ30cm。壁溝 無。
柱穴 ピットは4箇所確認できるが何れも柱穴かどうかは不明。
炉 中央やや北よりに1箇所。
貯蔵穴 南壁面に長軸0.6m×短軸0.4mの楕円形で、深さ30cm。
遺物 実測可能な遺物は、土師器甕1、鉢1、壺1、弥生土器2。備考SB23に切られる。



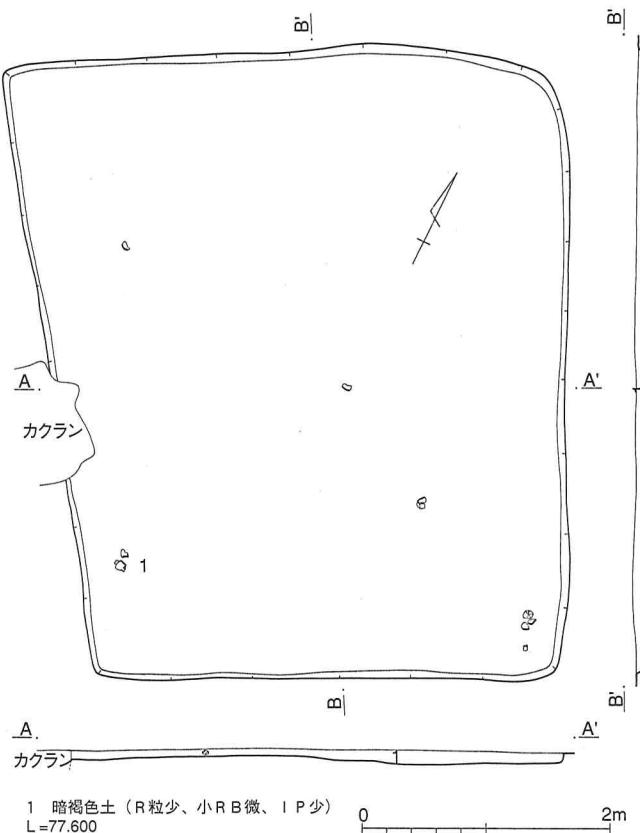
第22図 SI69出土遺物実測図

器種	寸法(cm)	器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考		
1 土師器 鉢	13.6	8.1	3.6	平底で、「ハ」の字状に開く。	外面：横位のヘラミガキ。 内面：縦位のヘラミガキ	淡褐色	砂粒 赤色スコリア粒	良好	床直	ほぼ完形
2 土師器 小型甕	11.0	7.3	3.3	平底で、口縁部がやや受け口状を呈する。	外面：口縁部ヨコナデ、 胴部ヘラ削り後ヘラミガキ。 内面：胴部ヘラナデ。	内面黒 褐色 外面暗 赤褐色	砂粒	良好	埋土中	2/3残
3 土師器 壺	(9.6)			直口縁の壺。	外面：縦位のヘラミガキ。 内面：横位のヘラミガキ。	明褐色	砂粒、輝石	良好	床直	破片
4 弥生土器			17.0	平底。	外面：胴部は付加条2種の縄文、底部は砂底。	乳白色	砂粒、 赤色スコリア粒、 金雲母	良好	床直	破片
5 弥生土器			9.4	平底。	外面：胴部は付加条2種の縄文、底部は砂底。	暗褐色	砂粒、 赤色スコリア粒	良好	床直	破片

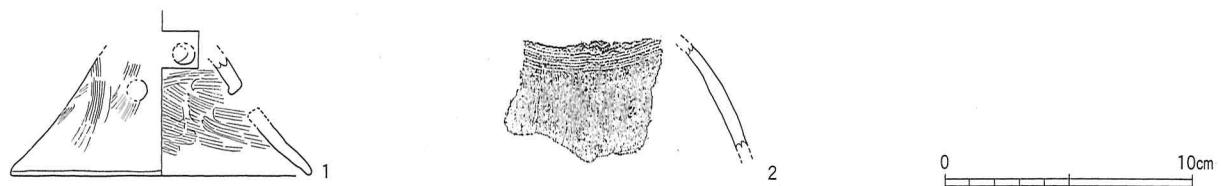
第9表 SI69遺物觀察表

SI70 (第23図)

位置 W-39杭の北側に位置する。平面形 南北4.9m×東西4.1mのやや不整な方形。方位 N-8° -W 床面 ローム地山。壁 確認面から深さ10cm。 壁溝 無。柱穴 無。炉 無。遺物 実測可能な遺物は、台付甕1、弥生土器1。



第23図 SI70平・断面図



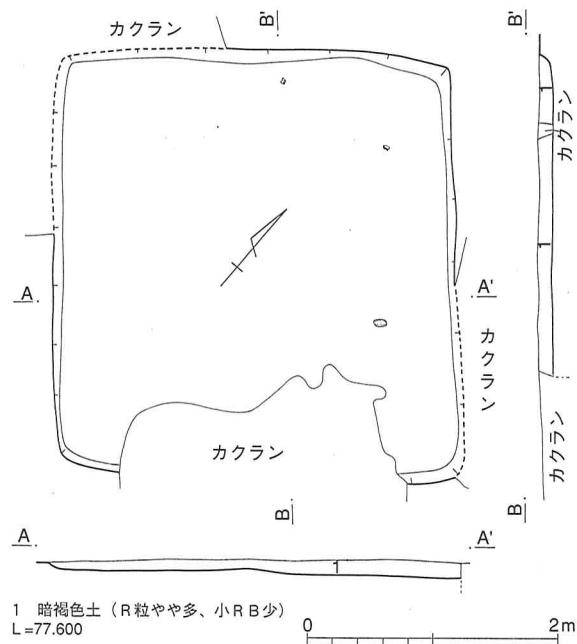
第24図 SI70出土遺物実測図

器種	寸法(cm)			器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
	口径	器高	底径							
1 土師器 高壺			12.0	内湾気味に「ハ」の字 に開く。 内面：ハケ後ナデ。	外面：縦位のハケ後、端 部ヨコナデ。 内面：ハケ後ナデ。	淡赤褐色	砂粒、輝石、 角閃石、石英	良好	床直	破片
2 弥生土 器					頸部に直線文と波状文が 廻る。	暗褐色	砂粒	良好	埋土中	破片

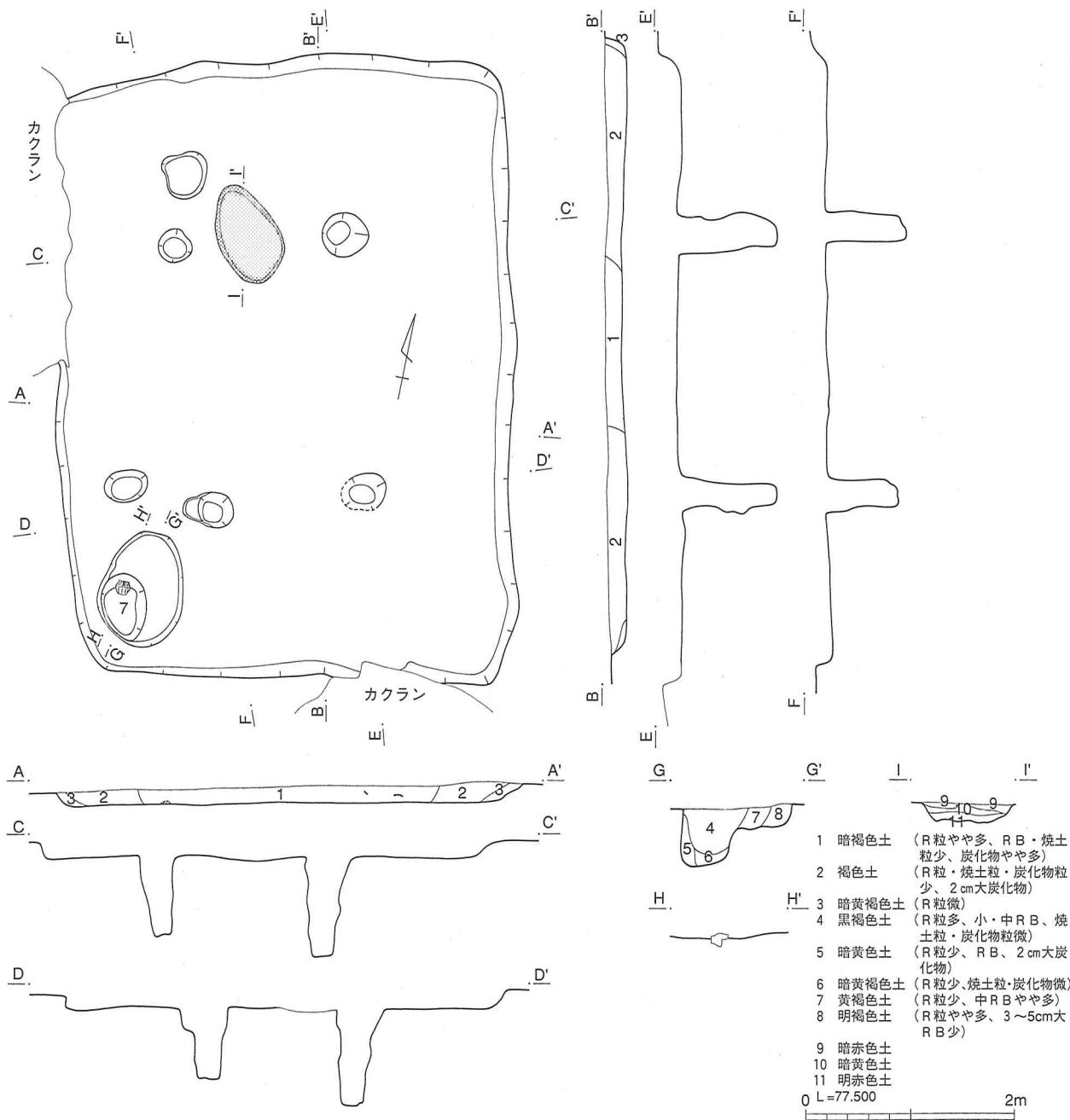
第10表 SI70遺物観察表

SI71（第25図）

位置 W-40杭の北側に位置する。平面形 南北3.4m×東西3.1mの方形。方位 N-2°-E 床面 ローム地山。壁 確認面から深さ20cm。壁溝 無。柱穴 無。炉 無。遺物 実測可能な遺物は無い。備考 3箇所の搅乱を受ける。



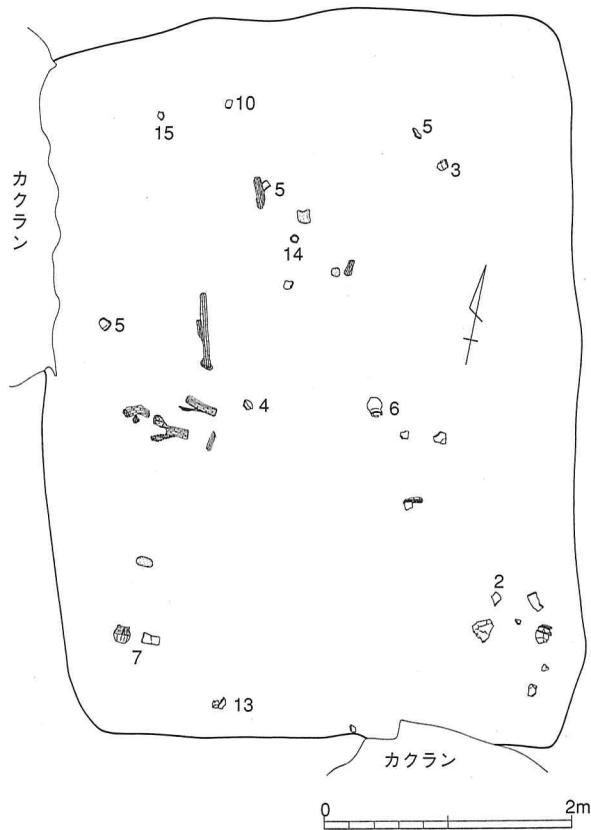
第25図 SI71平・断面図



第26図 SI73平・断面図

SI73 (第26図)

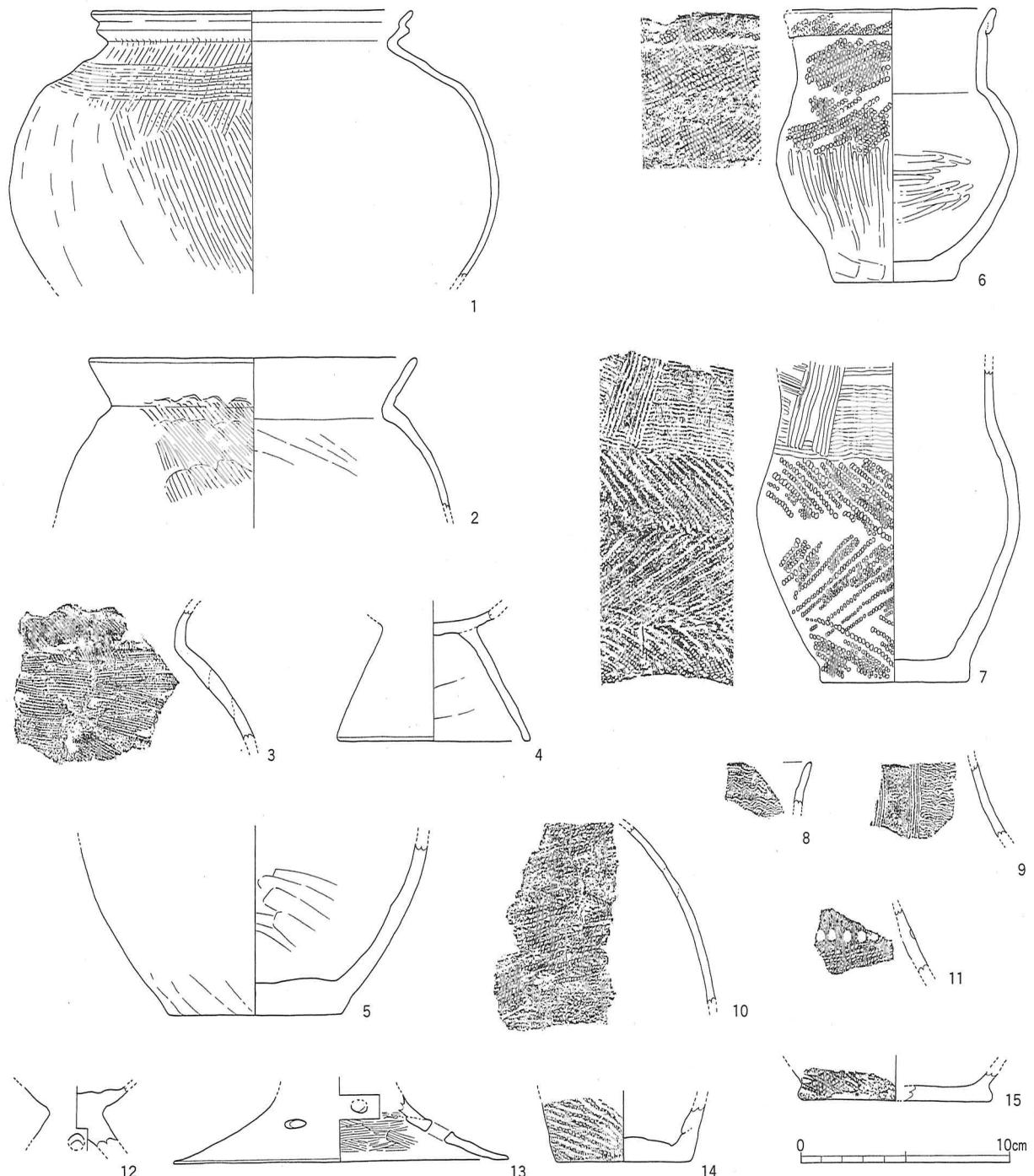
位置 W-40杭付近で、SI71の南側に位置する。平面形 南北5.6m×東西4.2mの長方形。**方位** N-16° -W
床面 ローム地山。**壁** 確認面から深さ20cm。**壁溝** 無。**柱穴** 4本。**炉** 1箇所。**貯蔵穴** 北西隅に1箇所。長軸0.8m×短軸0.6mの楕円形で、深さ50cm。**遺物** 実測可能な遺物は、土師器甕5、十王台式土器5、吉ヶ谷式甕1、高坏2、弥生土器2。**備考** 北西隅が攪乱により切られる。



第27図 SI73遺物出土状態図

器種	寸法(cm)			器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
	口径	器高	底径							
1 土師器甕	(15.6)			S字状口縁。胴部上半に最大径をもつ。	外面：ハケを羽状に施し、肩部に横ハケが巡る。 内面：ナデ。	暗褐色	砂粒	良好	床直	1/4残
2 土師器甕	(15.6)			「く」字口縁。	外面：口縁部片、胴部ハケ。 内面：ヘラナデ。	暗褐色	砂粒	良好	床直	口縁部片
3 土師器甕					外面：ハケ。	黒褐色	砂粒、輝石	良好	埋土中	
4 土師器甕			9.2	「ハ」字状に開く台を付す。	外面：ナデ。 内面：ヘラナデ。	橙褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	埋土中	
5 土師器甕			8.2	平底。	外面：ナデ。 内面：ヘラナデ。	褐色	砂粒、輝石	良好	埋土中	
6 吉ヶ谷式系甕	11.1	12.9	5.6	口唇部が折り返し口縁で、頸部があまり括れず胴部に至る。平底。	外面：口縁部から胴部上半にかけて単節の縄文。	暗赤褐色	砂粒、小石	良好	床直	ほぼ完形
7 十王台式壺			17.2	頸部があまり括れず胴部に至る。平底。	外面：頸部が縦区画充填波状文、胴部と頸部の境は波状文、胴部は付加条2種の縄文を施す。	暗褐色	砂粒、小石	良好	床直	2/3残
8 十王台式壺					波状文を施す。	黒褐色	砂粒、輝石	良好	埋土中	破片
9 十王台式壺					頸部に縦区画充填波状文を施す。	暗褐色	砂粒、金雲母	良好	埋土中	破片
10 弥生土器					撲糸文を施す。	赤褐色	砂粒、輝石、赤色スコリア粒	良好		破片
11 弥生土器					頸部に刺突文と撲糸文を施す。	暗褐色	砂粒、赤色スコリア粒		埋土中	破片
12 土師器高壺				透孔が3孔穿つ。		乳白色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	埋土中	破片

第11表 SI73遺物観察表(1)



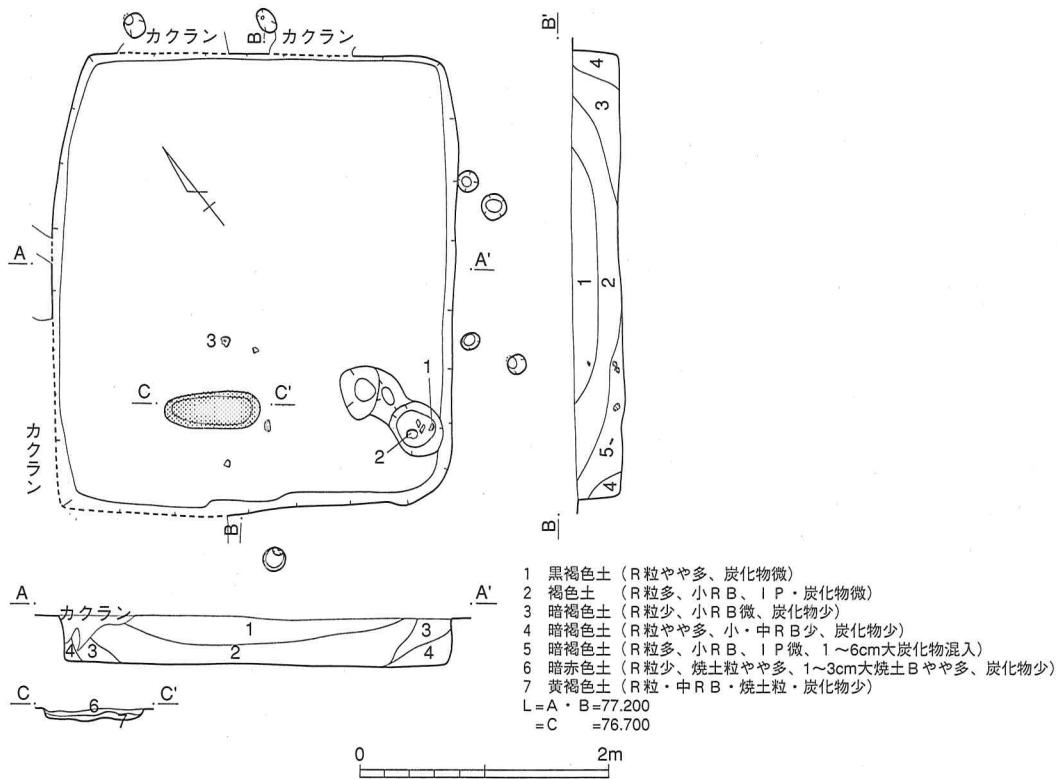
第28図 SI73出土遺物実測図

器種	寸法(cm)			器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
	口径	器高	底径							
13 土師器 小型高 壺			16.0	透孔が2段。	外面：縦線ヘラミガキ。 内面：横位のハケ。	淡褐色	砂粒、赤色ス コリア粒、小 石	良好	ピット内	破片
14 十王台 式壺			6.4	平底。	外面：胴部は付加条2種 の縄文を施す。	褐色	砂粒、石英	良好	埋土中	底部片
15 十王台 式壺				平底。	外面：胴部は付加条2種 の縄文を施す。	暗褐色	砂粒、輝石	良好		底部片

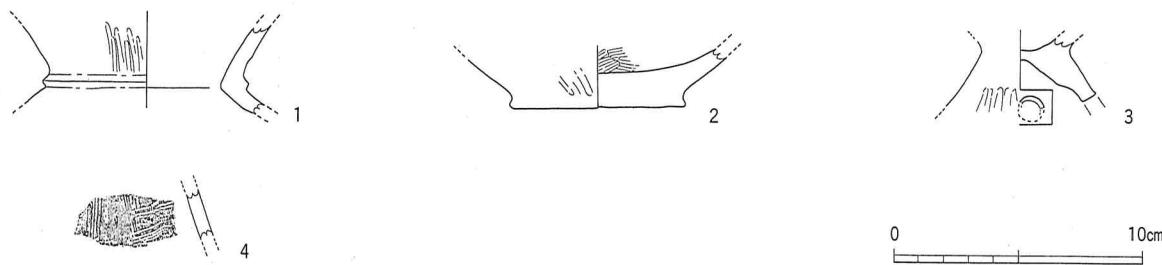
第12表 SI73遺物観察表(2)

SI74 (第28図)

位置 X-43杭の西側に位置する。平面形 南北3.5m×東西3.1mのほぼ方形。方位 N-16° -W 床面 ローム地山。壁 確認面から深さ30cm。壁溝 無。柱穴 南東隅にピットが確認されるが、柱穴とは判断できない。炉 1箇所。遺物 実測可能な遺物は、土師器壺2、高坏1、十王台式壺1。



第29図 SI74平・断面図



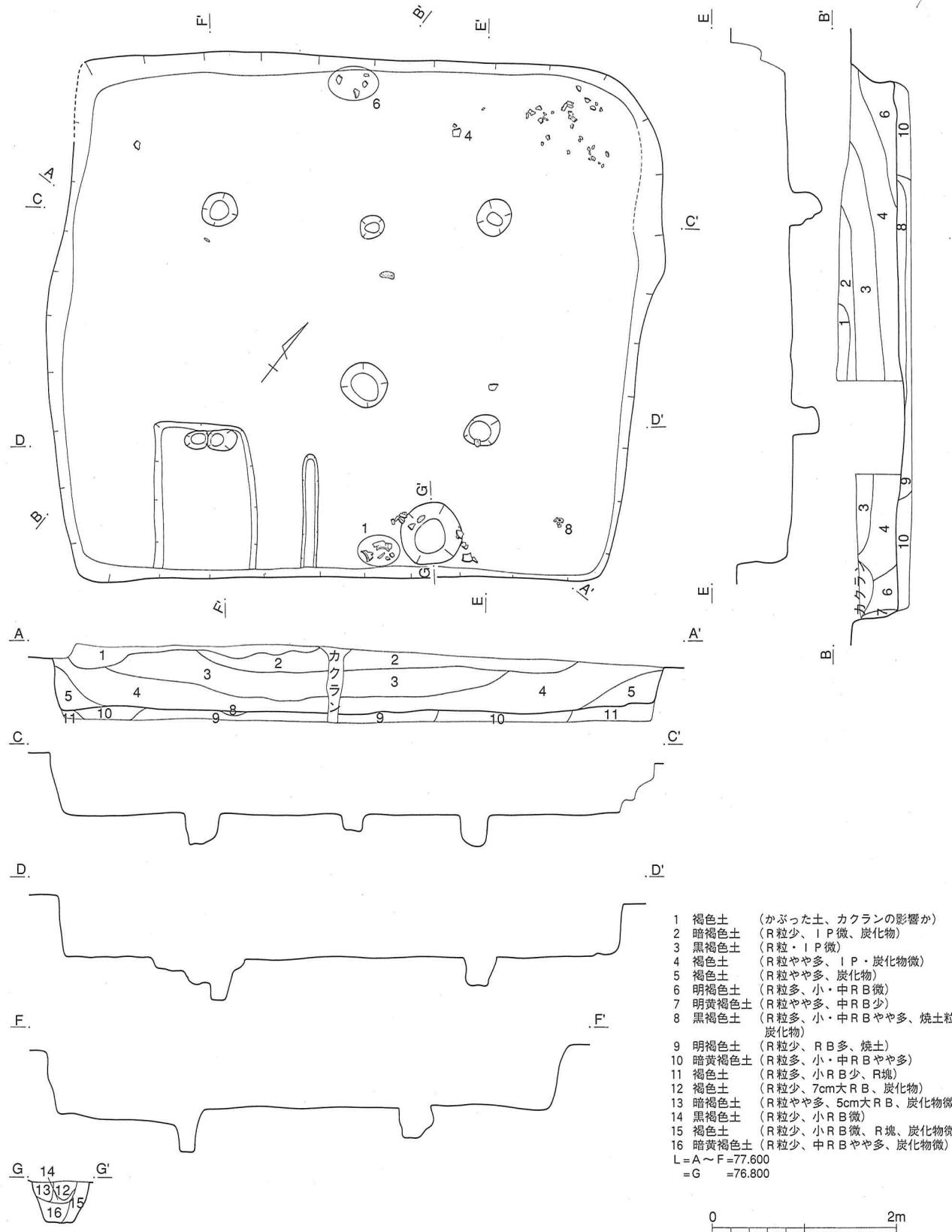
第30図 SI74出土遺物実測図

器種	寸法(cm)			器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
	口径	器高	底径							
1 土師器壺				頸部に突帯が巡る。	外面：ヘラミガキ。 内面：ナデ。	淡褐色	砂粒、 赤色スコリア粒	良好	埋土中	破片
2 土師器壺			7.0	平底。	外面：ヘラミガキ。 内面：ハケ。	黒褐色	砂粒、 赤色スコリア粒	良好	埋土中	破片
3 土師器高坏				透孔が3孔穿つ。	外面：ヘラミガキ。	褐色	砂粒、石英	良好	埋土中	破片
4 十王台式壺					頸部に縦区画充填波状文を施す。	赤褐色	砂粒、金雲母	良好	埋土中	破片

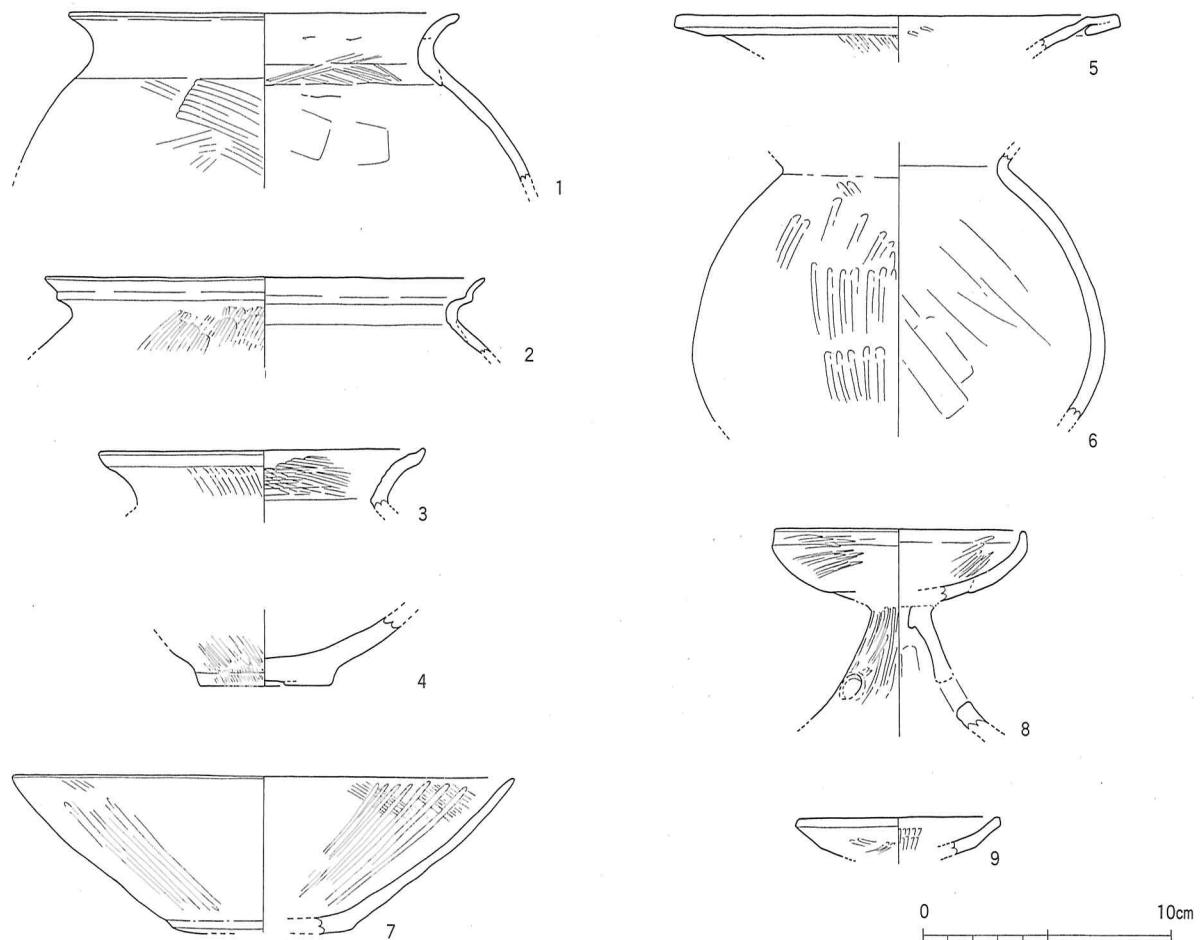
第13表 SI74遺物観察表

SI75 (第29図)

位置 X-39杭付近に位置する。平面形 南北5.5m×東西6.1mのやや横長の方形。方位 N-16° -W 床面貼床。壁 確認面から深さ70cm。壁溝 無。柱穴 4本。炉 不明。貯蔵穴 南東壁面に径0.7mの円形で、深さ40cm。遺物 実測可能な遺物は、土師器甕4、壺2、器台2、高坏1。



第31図 SI75平・断面図



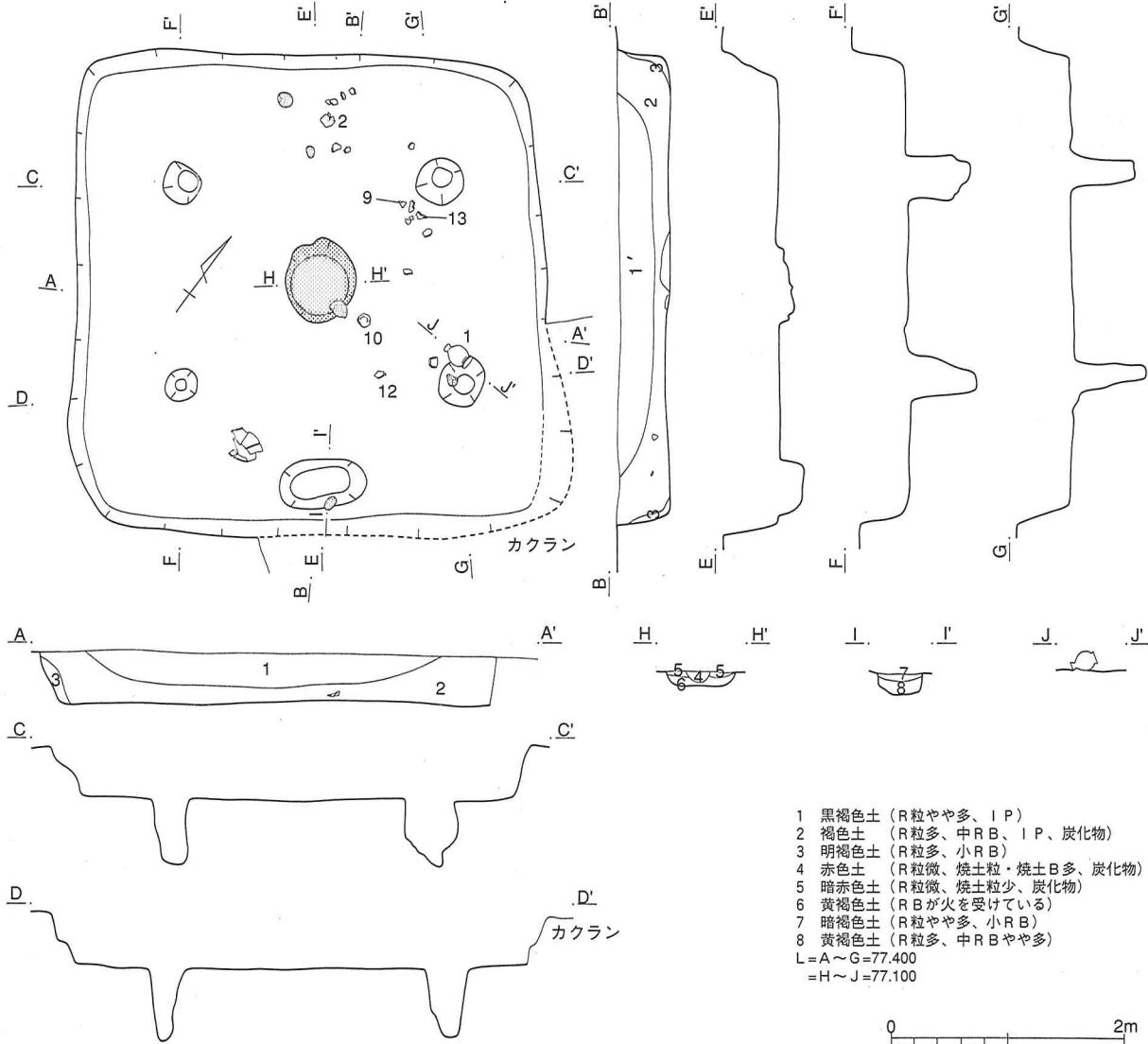
第32図 SI75出土遺物実測図

器種	寸法(cm)			器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
	口径	器高	底径							
1 土師器 甕	15.5			「く」字口縁。	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケ。 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、胴部ヘラナデ。	淡褐色	砂粒、小石	良好	埋土中	破片
2 土師器 甕	(17.6)			S字状口縁。	外面：ハケ。 内面：ハケ。	黒褐色	砂粒、	良好	貼床内	破片
3 土師器 甕	(13.0)			口唇部を摘み上げる。	外面：ハケ。 内面：ヘラナデ。	黒褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	貼床内	破片
4 土師器 甕			5.2	平底。	外面：ハケ後ヘラミガキ。 内面：ナデ。	暗褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	埋土中	破片
5 土師器 壺	(17.8)			折り返し口縁。	外面：ヘラミガキ。 内面：ヘラミガキ。	淡褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	貼床内	破片 内面に赤彩
6 土師器 壺				下膨れの胴部。	外面：ヘラミガキ。 内面：ヘラナデ。	淡褐色	砂粒、輝石	良好	埋土中	破片
7 土師器 高坏	20.2			「ハ」字状に大きく開く。	外面：縦位ヘラミガキ。 内面：ハケ後縦位ヘラミガキ。	暗褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	床直	破片
8 土師器 器台	10.0			塊状で、口唇部が短く直立する。	外面：ヘラミガキ。 内面：受部ヘラミガキ。	赤褐色	砂粒、金雲母	良好	埋土中	1/4 残
9 土師器 器台	(8.2)				外面：ヘラミガキ。 内面：ヘラミガキ。	赤褐色	砂粒	良好	埋土中	破片 内外面に赤彩

第14表 SI75遺物観察表

SI76 (第33図)

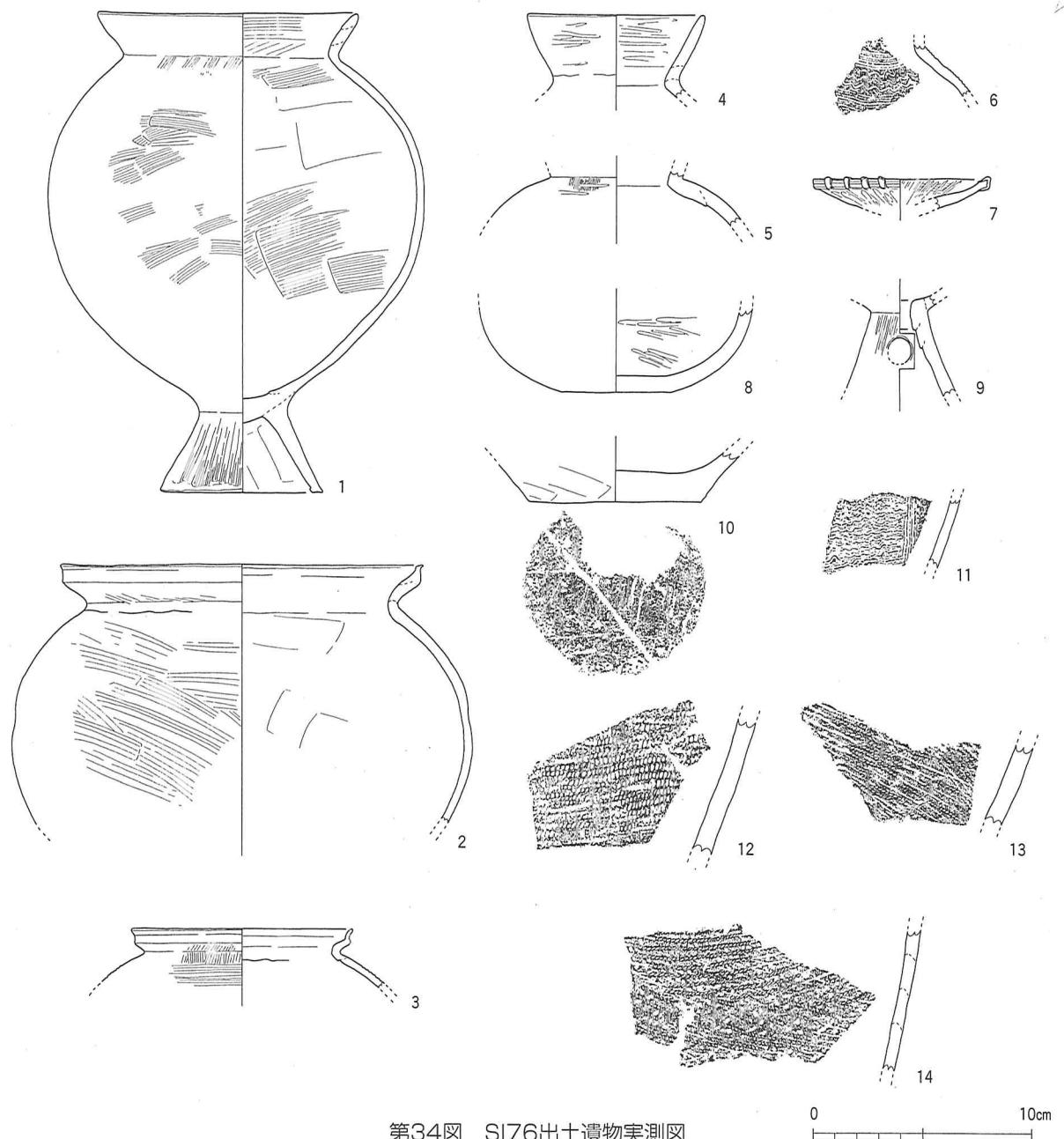
位置 X-41の東側に位置する。平面形 南北4.0m×東西4.0mの正方形。方位 N-16° -W 床面 ローム地山。壁 確認面から深さ30cm。壁溝 無。柱穴 4本、南壁面付近に出入口に関係するピット1本。炉中央に1箇所。遺物 実測可能な遺物は、土師器甕4、壺4、器台1、高坏1、十王台式壺3、弥生土器壺1。



第33図 SI76平・断面図

器種	寸法(cm)			器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
	口径	器高	底径							
1 土師器甕	11.8	21.7	7.3	「く」字口縁。胴部は球形で台を付す。	外面：口縁部ヨコナデ、胴部から台部ハケ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラナデ、下半ハケ。	暗褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	床面	ほぼ完形
2 土師器甕	(15.6)			S字状口縁。	外面：ハケ。 内面：ヘラナデ。	黒褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	埋土中	破片
3 土師器甕	(10.0)			S字状口縁。	外面：ナナメハケ後ヨコハケ。 内面：ナデ。	黒褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	埋土中	破片
4 土師器壺				内湾気味に立ち上がる。	外面：横位のヘラミガキ。 内面：横位のヘラミガキ。	暗褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	埋土中	破片

第15表 SI76遺物観察表 (1)



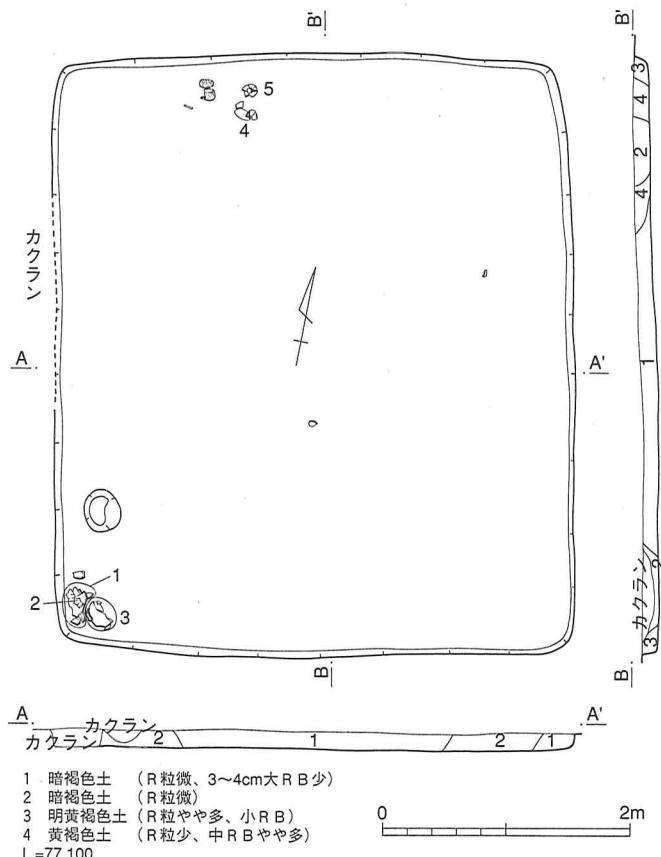
第34図 SI76出土遺物実測図

器種	寸法(cm)			器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
	口径	器高	底径							
5 土師器壺					外面：ヘラミガキ。 内面：ナデ。	淡褐色	砂粒	良好	埋土中	破片、No8と同一個体
6 土師器壺					外面：横線文—波状文— 横線文が施される。	淡褐色	砂粒	良好	埋土中	破片
7 土師器器台	(8.1)			口唇部の端部に横線文 が廻り、等間隔で浮文 を貼り付ける。	外面：ヘラミガキ。 内面：ヘラミガキ。	赤褐色	砂粒	良好	埋土中	破片
8 土師器壺			5.0	平底。	外面：ヘラミガキ。 内面：ヘラミガキ。	淡褐色	砂粒、小石	良好	埋土中	破片、No5と同一個体
9 土師器高壺				透孔が3孔穿つ。		暗褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	埋土中	破片
10 土師器甕			7.8	平底。	外面：ヘラケズリ木葉底。 内面：ナデ。	淡褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	埋土中	破片
11 十王台式壺					縦区画充填波状文を施す。	褐色	砂粒、金雲母	良好	埋土中	破片
12 弥生土器壺					縄文。	褐色	砂粒	良好	埋土中	破片
13 十王台式壺					付加条2種の縄文を羽状 に施す。	褐色	砂粒	良好	埋土中	破片
14 十王台式壺					付加条2種の縄文を羽状 に施す。	淡褐色	砂粒、赤色スコリア粒		埋土中	破片

第16表 SI76遺物観察表(2)

SI78 (第35図)

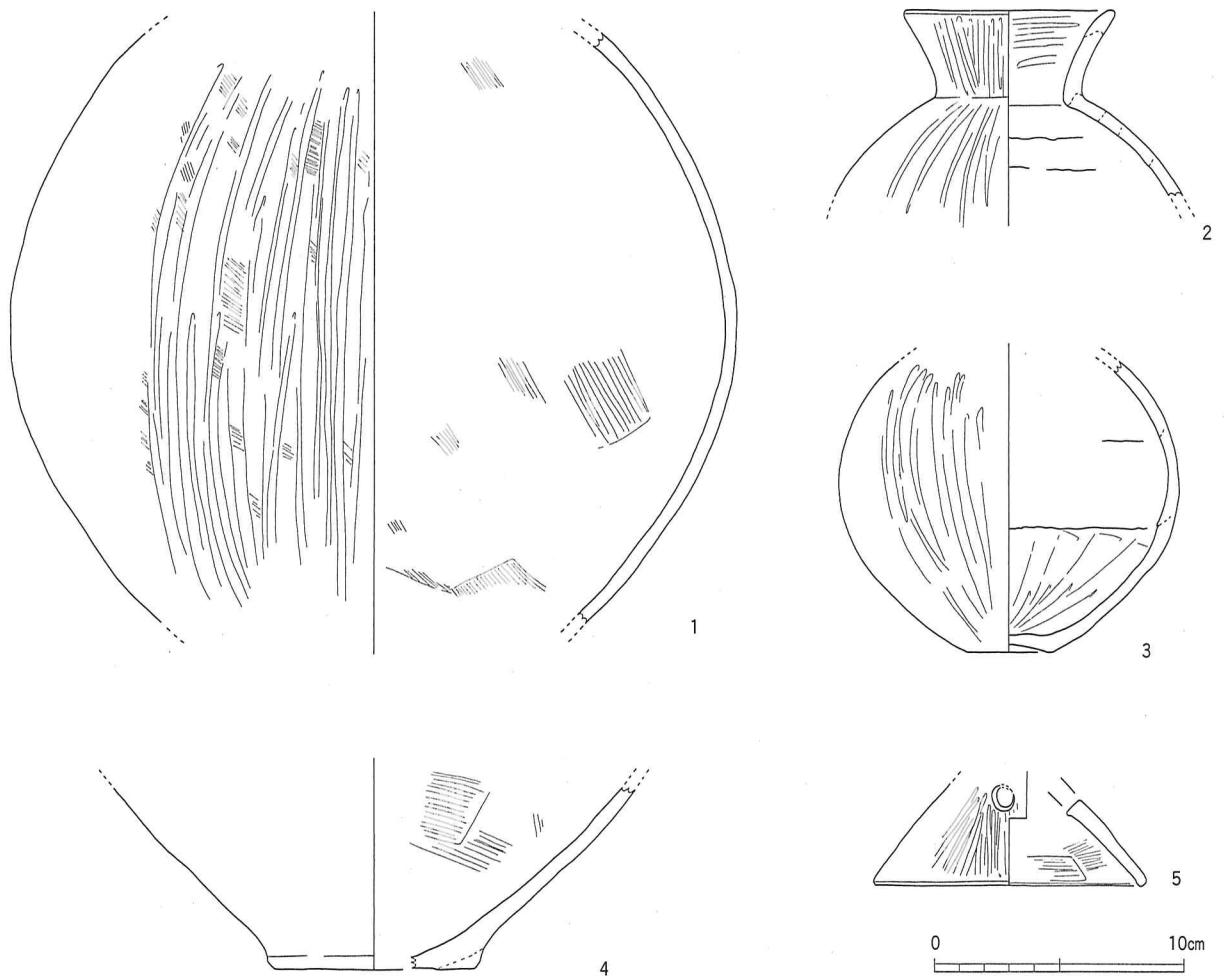
位置 X-43の東側に位置する。平面形 南北4.8×東西4.2mのほぼ方形。方位 N-16° -W 床面 ローム地山。壁 確認面から深さ20cm。壁溝 無。柱穴 無。炉 無。遺物 実測可能な遺物は、土師器壺4、高杯1。



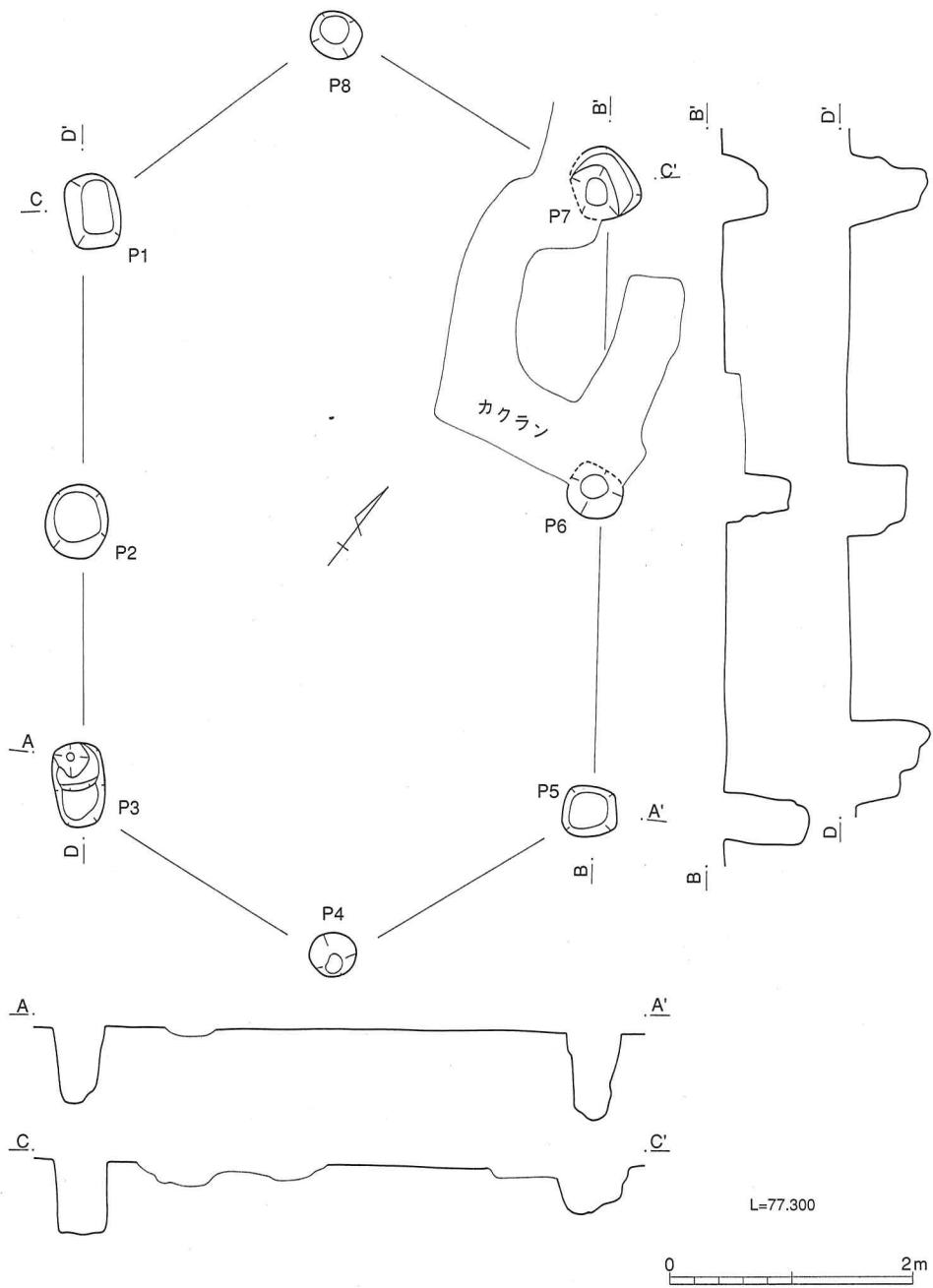
第35図 SI78平・断面図

器種	寸法(cm)			器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
	口径	器高	底径							
1 土師器壺				胴部球形。	外面：ヘラミガキ。 内面：ハケ。	淡褐色	砂粒	良好	埋土中	破片
2 土師器壺	8.4			外反する口縁部。	外面：ヘラミガキ。 内面：口縁部。ヘラミガキ、胴部ナデ。	褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	埋土中	破片
3 土師器壺			3.6	凹底で、胴部は球形。	外面：ヘラミガキ。 内面：ヘラナデ。	褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	埋土中	1/5残
4 土師器壺			(8.0)	平底。	外面：ヘラミガキ。 内面：ハケ後ナデ。	淡褐色	砂粒	良好	埋土中	破片
5 土師器高杯			10.8	内湾気味に開く。	外面：ハケ後ヘラミガキ。 内面：ハケ後ナデ。	褐色	砂粒、小石	良好	埋土中	破片

第17表 SI78遺物観察表



第36図 SI78遺物実測図



第37図 SB23平・断面図

(2) 掘立柱建物跡

SB23 (第37図)

位置 V-43杭の付近に位置する。**形態** 南北4.8m×東西4.0mで、妻側のP4、P8が妻側柱筋から大きく離れる独立棟持柱形式の建物。**方位** N-18° -E **遺物** 無。**備考** SI69を切る。

2. 弥生時代

第38図は、第4次調査区の弥生遺構配置図である。この調査区からは、弥生時代中期の竪穴住居跡1軒と土坑1基が確認されている。

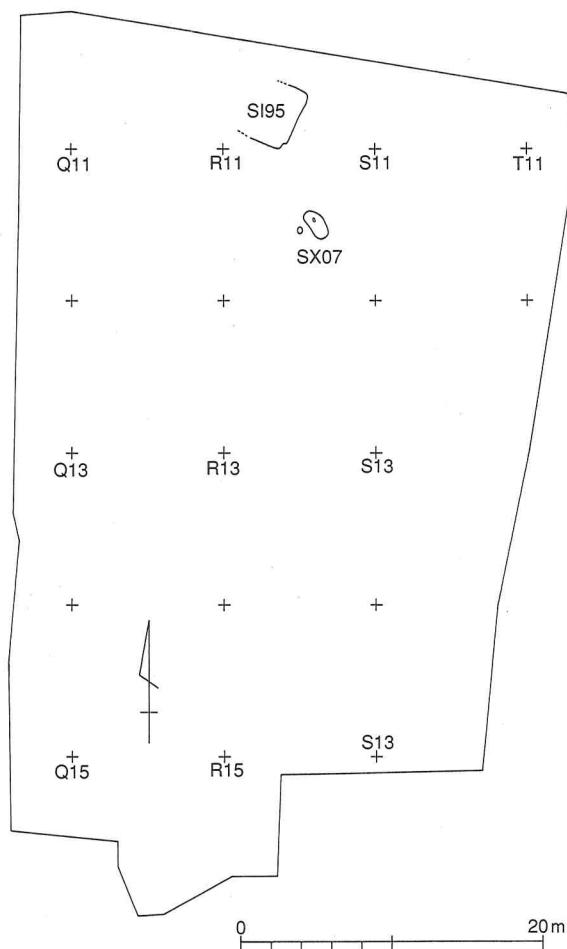
(1) 竪穴住居跡

SI95 (第39図)

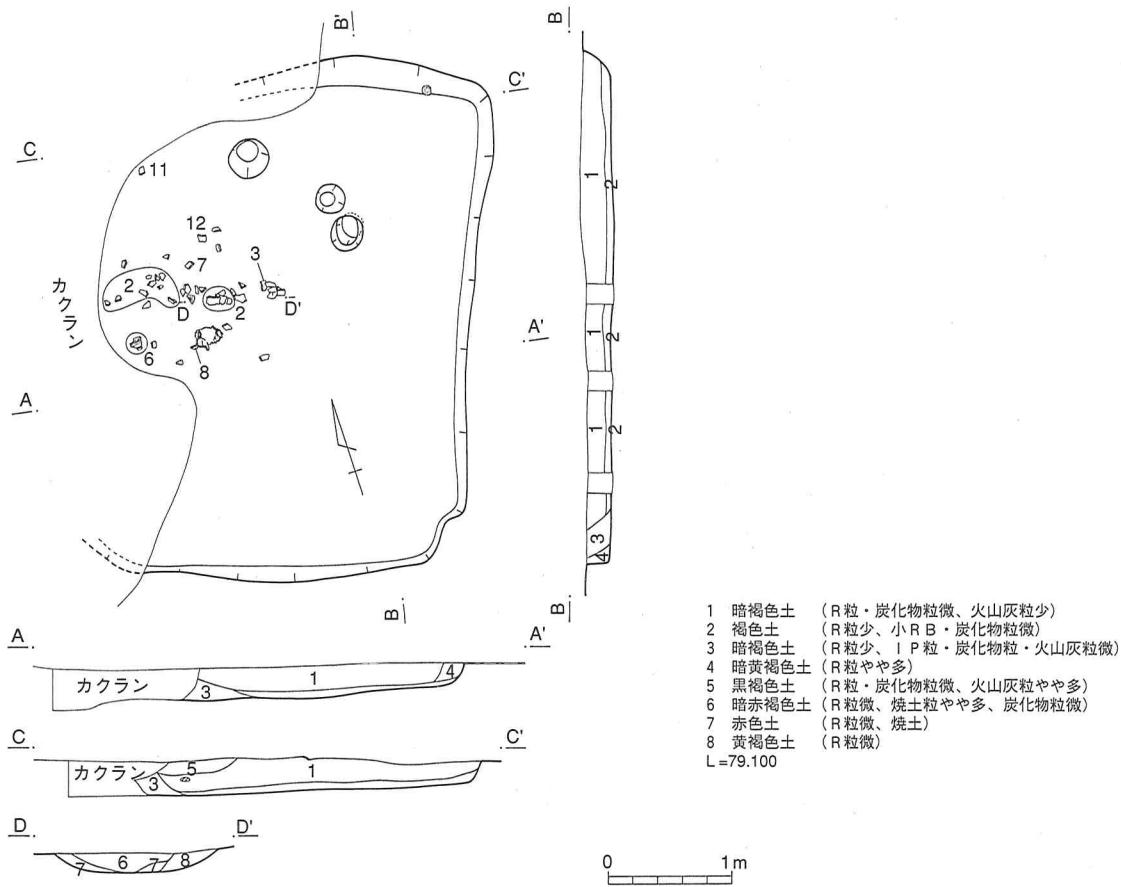
位置 R-11の東側に位置する。平面形 南北4.0m×東西 — mの不整形。西側が搅乱により、プランが不明。方位 N-16° -W 床面 ローム地山。壁 確認面から深さ30cm。壁溝 無。柱穴 北側にまとまってピットが3本。炉 不明。

遺物 (第40図) 実測可能な遺物は、弥生土器13点。

1は、壺の胴部片である。ハケ状工具による調整後、1本描きによる渦巻文が施される。2は、壺の胴部下半片である。R Lの単節縄文が施される。3は、あまり胴の張らない壺の胴部片である。L Rの単節縄文が施される。4は、甕の口縁部片である。あまり屈曲しない口縁部で、無節の縄文が施される。5は、甕の口縁部片である。あまり屈曲しない口縁部で、L Rの単節縄文を横位に施し、その下を波状文が廻る。6は、



第38図 第IV次調査区遺構平面図



第39図 SI95平・断面図

甕の口縁部片である。折り返し口縁で、口縁端部及び外面にLRの単節縄文を横位に施し、頸部は無文帶である。7は、甕の口縁部片である。口縁部外面及び内面に単節の縄文が施される。8は、甕の口縁部片である。LRの単節縄文が施される。9は、鉢片で、折り返し口縁で、LRの単節縄文を施す。10は、壺片で、3本1組の下向きの連弧文が施される。11～13は胴部片で、11がLRの単節縄文、12が撫糸文、13が無節の縄文が施される。

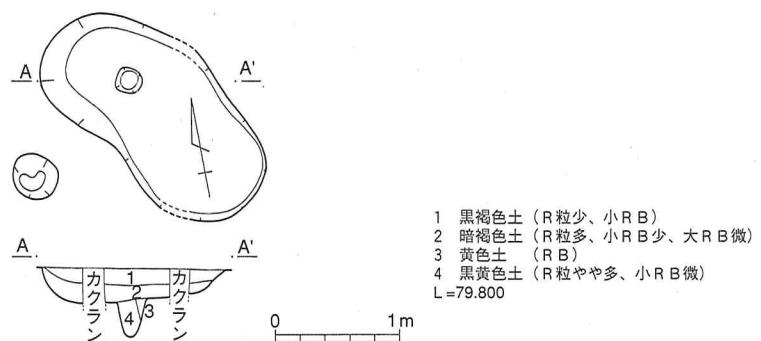
(2) 土坑

SX07 (第41図)

位置 SI95の南東側に位置する。**平面形** 南北2.0m×東西1.0mの楕円形。中央北よりにピットをもつ。**方位** N-16°-W **床面** ローム地山。**壁** 確認面から深さ30cm。**遺物** 弥生土器片が数点出土。



第40図 S195出土遺物実測図

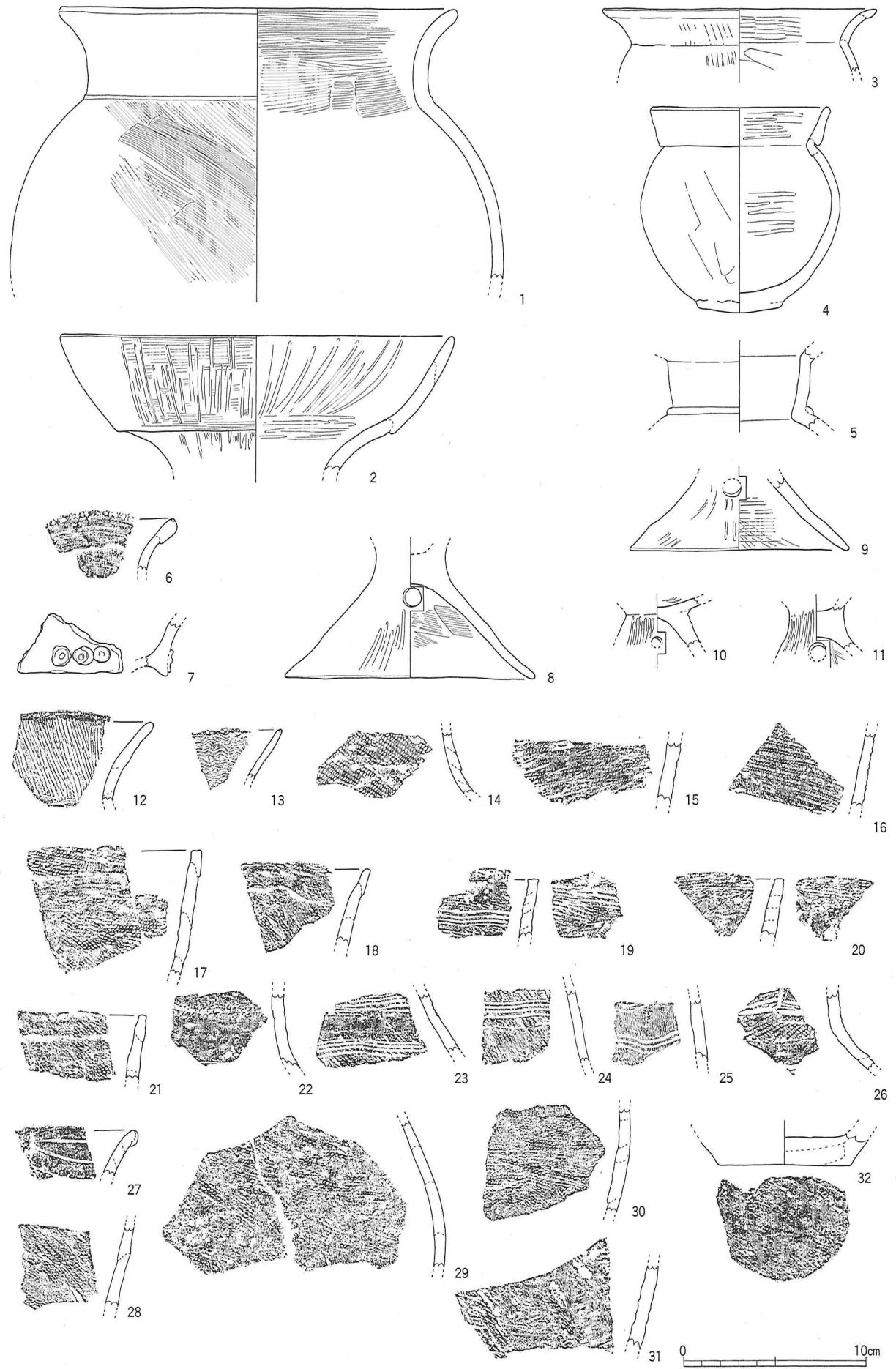


第41図 SX07平・断面図

3. 遺構外出土遺物

1から11は古墳時代前期の遺物である。1は甕の上半部片で、ゆるく外反する口縁部をもち、胴部は球形である。口縁部内面ハケ、胴部外面ハケ調整が施される。2は複合口縁壺片である。口縁部外面は、横位のハケ後縦位のヘラミガキ、口縁部内面も、縦位のヘラミガキ。3は甕の口縁部片で、「く」字に屈曲する。口縁部外面ハケ、内面ヨコハケ。4は小型甕の完形品である。折り返し状の口縁で、やや縦長の胴部である。外面ヘラナデ、内面、ヘラミガキ。5は二重口縁壺の頸部片である。やや内湾気味に立ち上がり、頸部に突帯が廻る。6は折り返し口縁壺の口縁部片である。口縁端部に刻み目を有する。7は二重口縁壺の口縁部片である。3個1組の円形浮文を付す。8は高坏の脚部片である。内湾気味に開く脚で、円形の透孔を3孔穿つ。器面調整は、外面縦位のヘラミガキ、内面ハケ。9は高坏の脚部片である。内湾気味に開く脚で、円形の透孔を穿つ。器面調整は、外面縦位のヘラミガキ、内面ハケ。10は高坏の脚部片である。円形の透孔を穿つ。器面調整は、外面縦位のヘラミガキ。11は高坏の脚部片である。円形の透孔を穿つ。器面調整は、外面縦位のヘラミガキ、内面ハケ。

12から32は弥生時代の遺物である。12は甕の口縁部片である。縦位のハケ後頸部にヨコハケが廻る。口唇部に棒状工具による刻みを有する。13は十王台式土器の壺口縁部片である。波状文が施される。14は吉ヶ谷式土器の甕頸部片である。輪積み痕が残り、L Rの単節縄文が施される。15は胴部片で、撫糸文が施される。16は胴部片で、付加条2種の縄文が施される。17は折り返し口縁の甕の口縁部片で、口縁部及び胴部にR Lの単節縄文を施し、頸部は無文帶。18は折り返し口縁の甕の口縁部片で、口縁部及び胴部に撫糸文を施す。19は素口縁の甕の口縁部片で、外面に4条の沈線が廻る。内面は地文に縄文を施した後、沈線が施される。20は素口縁の甕の口縁部片で、内外面にL Rの単節縄文が施される。21は折り返し口縁の甕の口縁部片で、撫糸文が施される。22は頸部片で、櫛状の工具による列点文と沈線文が廻る。23と24は頸部片で、地文に縄文を施した後、4条の沈線が廻る。25は地文に縄文を施した後、3条の沈線文が施される。26は頸部片で、L Rの単節縄文と櫛描文が施される。27は口縁部片で、ヘラ描きによる沈線文が施され、口縁端部には浮文を付す。28は、胴部片で、R Lの単節縄文が施される。29～31は胴部片で撫糸文が施される。32は底径7.2cmの底部片である。



第42図 遺構外出土遺物実測図

III. おわりに

1. 古墳時代前期の集落について

本遺跡において15軒の竪穴住居跡と1棟の掘立柱建物跡が確認できた。各遺構から出土した土器群は、次のような2時期に分けられる。樽式（系）土器、吉ヶ谷式（系）土器、南関東系土器、十王台式土器など他地域の弥生系の土器と土師器が伴う段階（Ⅰ期）と、土師器のみの段階（Ⅱ期）である。

I期

この時期に属する住居跡はSI59、SI61、SI62、SI63、SI67、SI68、SI69、SI70、SI73の9軒が挙げられる。

これらの住居跡からは、第43図に示すような他地域の弥生土器の系譜を引く土器が出土している。

樽式（系）の土器は、SI59、SI61、SI70から出土している。

SI61では、胴部上半に波状文を施す樽式の甕が出土している。あまり頸部がくびれず内面のミガキもしっかりしているが、波状文が乱れて施文され後出的な要素がみられる。また、SI59では、在来の弥生土器の系譜からは見出せないヘラミガキが多用され、横線文もしくは簾状文が頸部に施される土器が出土している。樽式の影響を受けた土器と考えておきたい。SI70では、頸部に波状文と横線文（破片であるため簾状文の可能性もあり）が廻り、胴部がヘラミガキの土器が出土しており、在地の二軒屋式土器の系譜を考えるよりは、樽式（系）の土器と考えられる。なお、樽式（系）の土器は、この遺跡の周辺の大日塚古墳2号住居跡や愛宕塚古墳墳丘下などから、量的には少ないものの出土が見られ注目される。

十王台式土器は、SI59、SI61、SI73から出土している。SI59では完形品が横倒しの状態で出土している。この手の連弧文をもつ十王台式土器は、鈴木素行氏の検討により、久慈川流域に多く見られることがある（鈴木1998）。このような単独の連弧文をもつものは、海老澤氏のⅢ期（海老澤2000）に位置づけられ、土師器との供伴が見られる。SI61とSI73例は、頸部と胴部の境に波状文が廻るタイプである。

吉ヶ谷式（系）の土器は、SI73で出土している。口縁部が折り返し口縁で、縄文の施文がやや乱れ、土師器と供伴する段階である柿沼氏のⅣ期（柿沼1996）に位置づくと考えられる。

南関東系の土器は、SI64、SI67から出土している。SI64では内外面に擬似縄文が施される折り返し口縁部が出土しており、SI67では胴部に斜縄文を間隔をおいて施文する壺が出土している。

東海系の土器は、S字甕及び高坏・小型高坏がSI59、SI68、SI70、SI73から出土している。SI59とSI73では、S字状口縁甕B類の中～新段階（赤塚1990）のものが出土している。また、高坏は、SI70やSI68のように脚部が内湾志向のものが見られる。尚、SI76出土の器台は、口縁端部に沈線文を廻らす。赤塚氏器台A2類に見られる特徴であるが、棒状浮文が多用されている点は関東的であり、東海・関東両者の要素がミックスされた土器と考えたい。

北陸系の土器は、SI68、SI69から出土している。SI68では、口縁端部が面取りされるもので、川村氏の甕A類（川村2003）に類似すると考えられるが、胴部が球形化し、所謂「北陸北東部」系統の土器と考えておきたい。また、SI69の鉢は有段口縁を意識した作りで、川村氏の鉢D類（有段口縁、球胴でミガキ調整が丁寧に施される）に類似するが、口縁部の有段は弱く、ミガキも雑であることから、上記の甕

同様、口縁部に北陸系の影響が見られるという程度の模倣品と捉えておきたい。なお、この近くの雀宮町地内より北陸系の装飾性の高い有透器台が出土しており、本遺跡出土の土器と合せ、北陸からの間接的な影響を窺える資料である。

このほかに、S I 6 9から受口状の口縁部をもつ甕が出土しているが、頸部の屈曲があまく、立ち上がりが小さい点は、近江系の土器を検討した植田氏分類の受口状口縁甕A6類（植田1994）に近似する。但し、小型であり、胴部のハケ調整が不明瞭である点、上述の北陸系土器と同様、近江系の影響が見られるという程度の模倣品と考えられる。尚、S I 5 9・S I 7 5の甕には、底部輪台技法がみられ、畿内的な影響も窺える。

以上、樽式（系）土器、吉ヶ谷式（系）土器、南関東系土器、十王台式土器など他地域の弥生系の土器とS字状口縁甕B類及び内湾志向の残る高坏等の東海系土器との供伴関係がみられることから、この時期は廻間Ⅱ式後半段階に位置付けておきたい。

Ⅱ期

この時期に属する住居跡は、S I 7 1、S I 7 4、S I 7 5、S I 7 6、S I 7 8の5軒である。また、S B 2 3はI段階のS I 6 9を切っていることから、この時期に位置づけたい。尚、S I 7 6には、十王台式土器が出土しているが、小破片であり流れ込みと考えたい。

S I 7 5とS I 7 6では、S字甕が出土している。

S I 7 5では、S字甕C類の甕が出土している。S I 7 6では、S字甕B類が出土しているが、破片であり流れ込みの可能性が考えられる。また、第34図2の土器は、受け口状を呈し、S字甕とは別に考える必要がある。

このほかに特徴的な遺物は見られないが、S字甕をみる限りにおいては、I期に後続する時期、すなわち廻間Ⅲ式の段階に位置付けておきたい。

次に遺構の配置状況をみてみる。第44図に示すとおり、I期は概ね台地の奥側に位置し、II期は台地縁辺側である。また、I期の竪穴住居跡の平面形が長方形を呈するものが多いのに対し、II期は方形に近いものが増加する。このことから、住居跡の平面プランにおいて長方形→方形の流れが窺える。住居内の構造は、主柱穴が4本で、比較的大型の住居跡には貯蔵穴を伴う。炉は有るものと無いものの両者が見られる。内部構造上は両時期において大きな違いは見られない。

最後に土器様相からこの遺跡を含めた周辺遺跡についてみてみる。

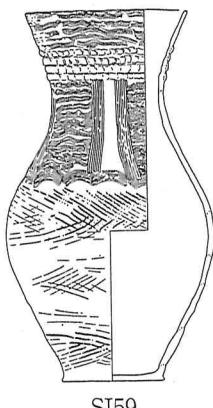
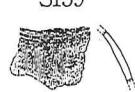
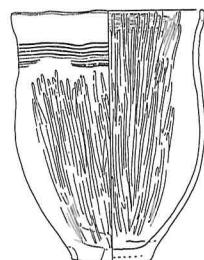
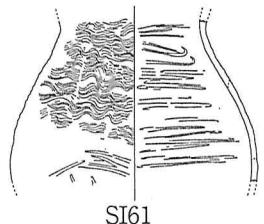
I期は、本遺跡を含めた茂原地域に他地域からの土器の流入がみられる時期である。本遺跡のすぐ南の北原東古墳の周辺からは、樽式（系）の土器が出土しているほか、大日塚古墳墳丘下住居跡や愛宕塚古墳墳丘下住居跡からも樽式（系）の土器が出土している。同様に吉ヶ谷式（系）の土器も散見される。これら樽式（系）、吉ヶ谷式（系）、十王台式など隣接地域の土器は、本県において単体で出土する例が多く、単体で搬入された可能性が指摘できる。この地域の古墳時代開始において群馬・埼玉北部方面からの影響を窺わせる資料といえる。なお、比田井氏は、このような樽式、十王台式の移動の在り方を一時波及型と呼び、至近距離同志の移動は一般的にこのパターンに入るとしている（比田井2003）。

（参考文献）

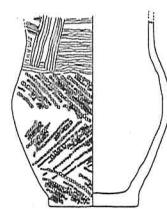
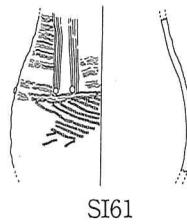
赤塚次郎 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

植田文雄 1994「湖東北域の近江系について」『庄内式土器研究VI—庄内式併行期の土器生産とその動き—「近江系土器の実態とその移動」』庄内式土器研究会

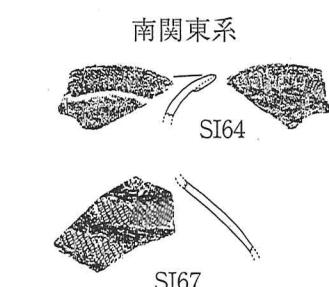
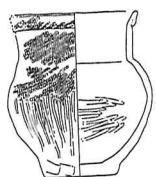
樽式(系)



十王台式

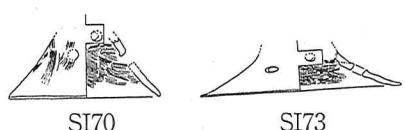
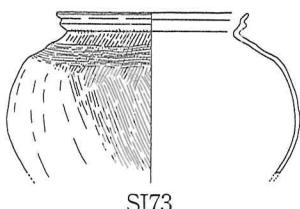


吉ヶ谷式(系)

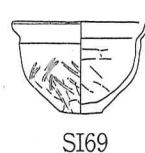
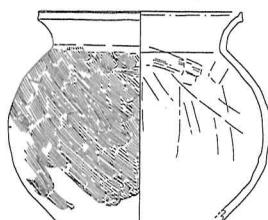


南関東系

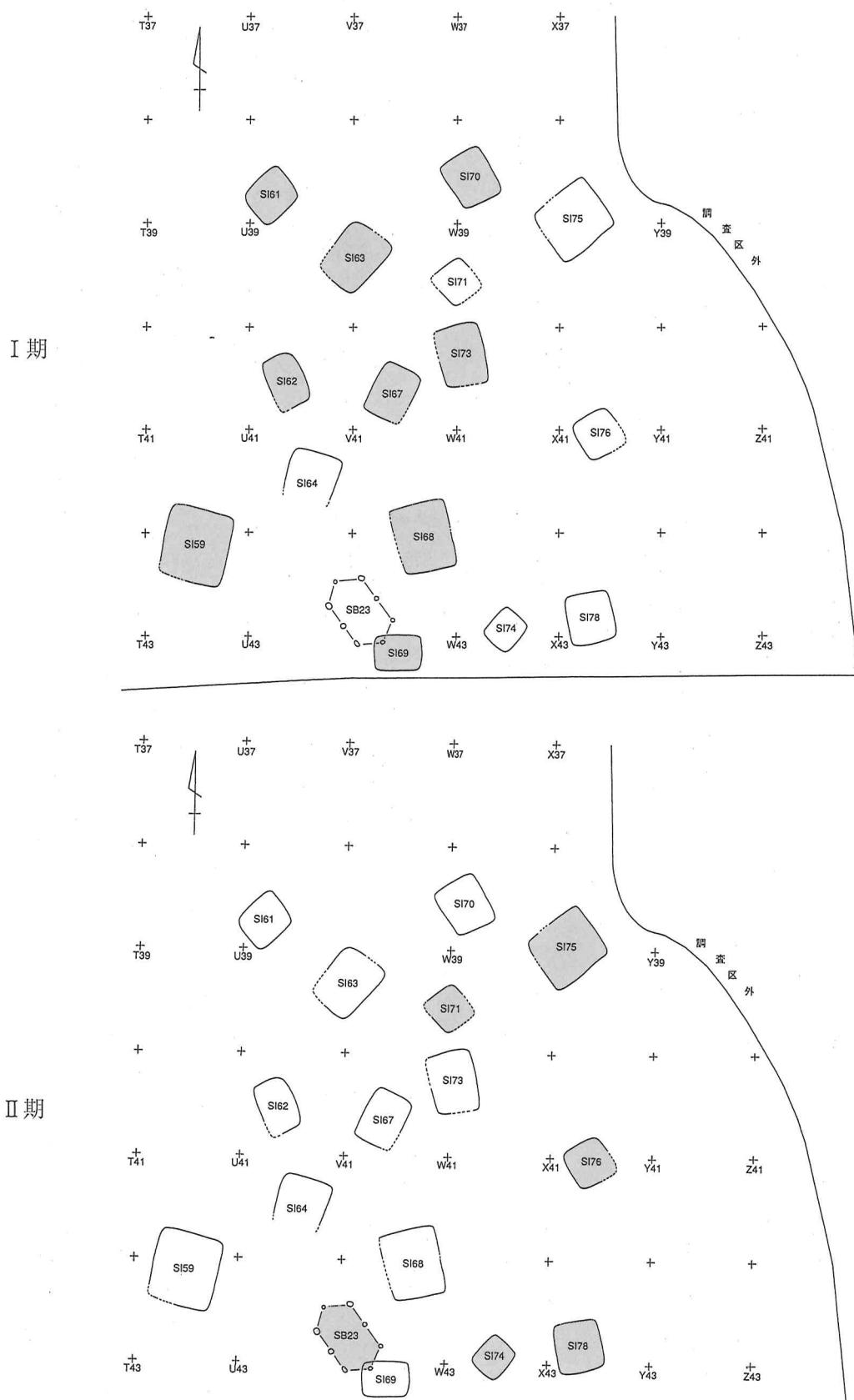
東海系



北陸系



第43図 他地域系統の土器



第44図 遺構変遷図

- 海老澤稔 2000「茨城における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会
- 柿沼幹夫 1996「北関東①埼玉県」『関東の方形周溝墓』同成社
- 川村浩司 2003『古墳出現期土器の研究』高志書院
- 鈴木素行 1998「武田石高い関における十王台式土器の編年について」『武田石高遺跡』ひたちなか市教育委員会
- 比田井克仁 2003「土器移動の類型と原理—弥生後期から古墳時代前期の東日本を対象として—」『法政考古学』第30集 法政考古学会

2. 弥生時代の遺構について

(1) 土器について

今回の調査では、本遺跡より弥生時代中期後半の住居跡1軒と土坑が1基確認された。また、遺構に伴わないうがほぼ同時期の遺物が表採されている。それら遺物の器種構成は、甕・壺・鉢からなり、以下のように分類できる（第45図）。

壺

文様の施文により大きく3つに分類できる。

- A 脊部にヘラもしくは櫛状工具により一本線描きをするもの。
- B 1 脊部に単節もしくは撚糸文を施すもの。
- B 2 単節もしくは撚糸文施文後、頸部及び脣部上半に横線文や波状文を施すもの。

A類の壺は、一本線描きの同心円状の文様をもつ。県内で同心円状の文様を持つものは、大塚古墳群内SK-16、新郭SI-48が挙げられる。尚、遺構外出土の第42図27の壺口縁部片は、大塚古墳群内SK-16壺と類似し、本遺跡例もこのようない器であった可能性が指摘できる。このような壺は、東北地方のニツ釜式の影響を受けたものと考えられる。B 1類は、第40図2・3・11~13が挙げられる。B 2類は、第42図23~25が挙げられる。地文に縄文を施した後、多条のヘラガキもしくは櫛描きによる横線文や波状文を施す類例は、御新田B区gグリッド285や295に見られる。

甕

甕は、口縁部形態により次のように分類できる。

- A 素口縁のもの
 - 1 単節・無節などの縄文が施されるもの。
 - 2 地文に縄文を施した後、波状文が施されるもの。
 - 3 口縁部内面及び外面に縄文を施すもの。
 - 4 口縁部内面及び外面に縄文を施した後、外面に沈線を施すもの。
- B 折り返し口縁のもの
 - 1 口縁部及び脣部に縄文を施し、頸部が無文帶のもの。
 - 2 口縁部~脣部にかけて縄文を施すもの。

3 口縁部内外面に縄文を施すもの。

A1・B1・B2類の類例は、御新田遺跡や鹿沼流通団地内遺跡等に見られる。B類の甕は、折り返し部下端へのヘラによるキザミの見られないことから、岩上・藤田氏の後新田段階（岩上・藤田1997）と考えられる。また、東北系と考えられるA類の壺は、1本工具により施文されていることから二ツ釜式の段階と考えられる。後新田段階は二ツ釜式の段階と併行すると考えられていることから、これらの土器群の供伴関係に矛盾は無く、SI95の時期は、中期後半の後新田段階と位置づけられる。

（2）住居跡について

次に、住居跡の平面プランについてみてみる。本遺跡出土のSI95は、一部攪乱により不明な部分があるが、長方形を呈する。炉は確認できず、柱穴は不規則である。

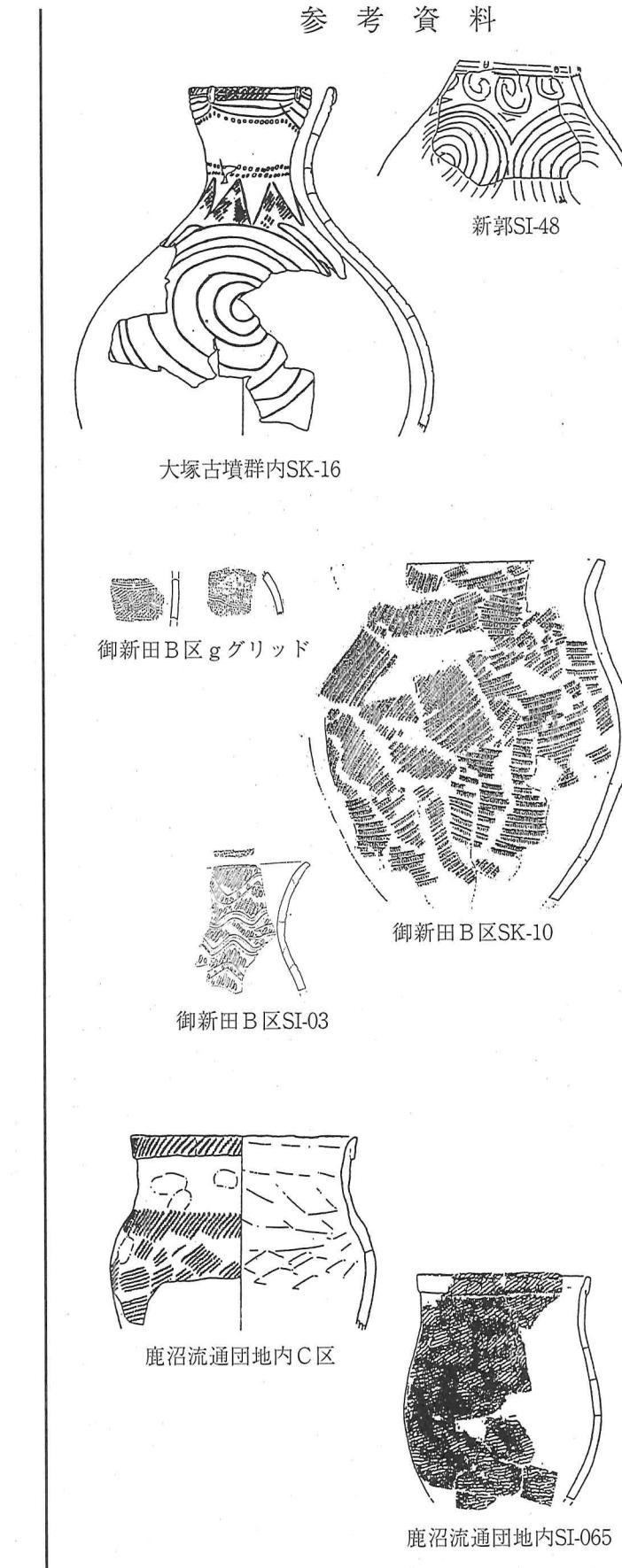
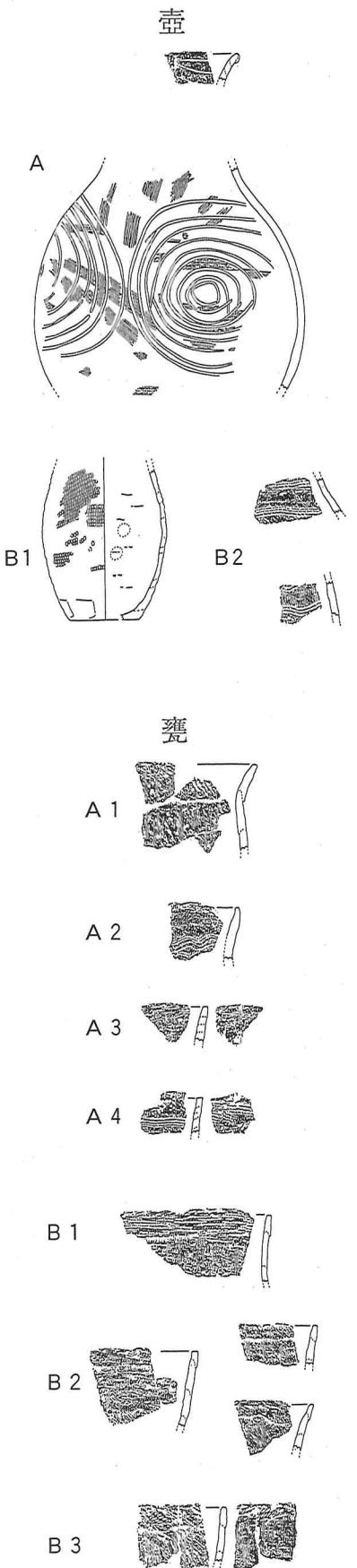
石野氏によれば、弥生時代中期の関東地方は「方型」住居が主流となる地域であるとのことである（石野1990）。また、宮本氏も弥生時代の竪穴住居跡の平面形について、「北関東地方から中部地方にかけて、円形・楕円形式が弥生時代中期まで残存するが、主流は隅丸方形・隅丸長方形平面である。」と指摘する（宮本1986）。

第46図は、本地域の弥生中期後半（御新田段階—上山段階）の住居跡を並べたものである。前述の両者が指摘するように、円系（楕円形や円形のもの）と方系（隅丸方形や長方形のもの）の両方が両段階とも見られる。本遺跡例は方系のグループに属するが、鹿沼流通団地遺跡SI201ほど隅が丸くならず、山崎北遺跡第9号住に近い形態を示す。

この時期の集落は、岩上・藤田氏が「1軒の住居跡と1～2基程度の土坑をひとつの単位として1単位多くても2単位程度がその規模」と指摘しているが、本遺跡も同様な状況を確認することができた。また、「一定の距離をおいて各々が分立しながら散在的に」営まれているとの指摘のとおり、本遺跡の周辺には、権現山北遺跡や愛宕塚東遺跡など弥生時代中期後半の遺跡が点在する。

（参考文献）

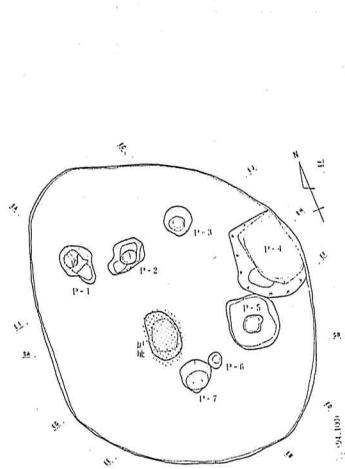
- 石野博信 1990『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館
内山敏行 1998『新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡』栃木県教育委員会 （財）栃木県文化振興事業団
岩上照朗・藤田典夫 1997「栃木県における弥生時代中期後半の土器群 —「上山系列」の提唱—」『研究紀要』第5号 （財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
亀田幸久 2001『大塚古墳群内遺跡・塚原遺跡』栃木県教育委員会 （財）栃木県文化振興事業団
今平昌子他 1999『山崎北・金沢・台耕上・関口遺跡』栃木県教育委員会 （財）栃木県文化振興事業団
初山孝行他 1991『鹿沼流通業務団地内遺跡』栃木県教育委員会
藤田典夫他 2000『杉村・磯岡・磯岡北』栃木県教育委員会 （財）栃木県文化振興事業団
細谷正策・尾花源司 1987『宇都宮競馬場付属総合きゅう舎建設地内遺跡』栃木県教育委員会
宮本長二郎 1986「2住居と倉庫」『弥生文化の研究 7 弥生集落』雄山閣



第45図 本遺跡弥生中期土器分類図

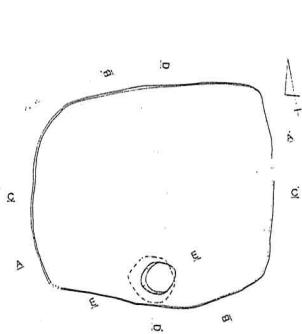
円 系

御新田段階

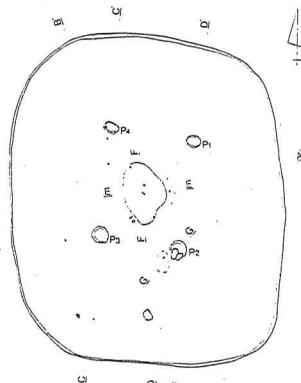


御新田SI-03

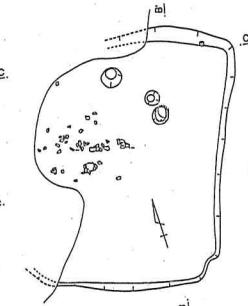
方系



鹿沼流通団地SI065

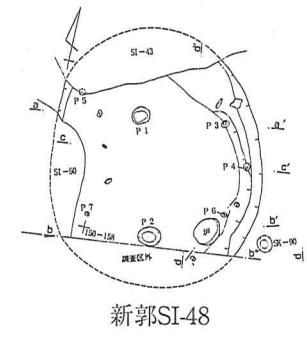


鹿沼流通団地SI201

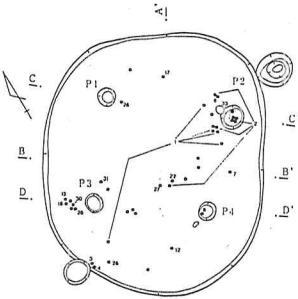


西下谷田SI95

上山段階



新郭SI-48



磯岡北第4号住

山崎北第9号住

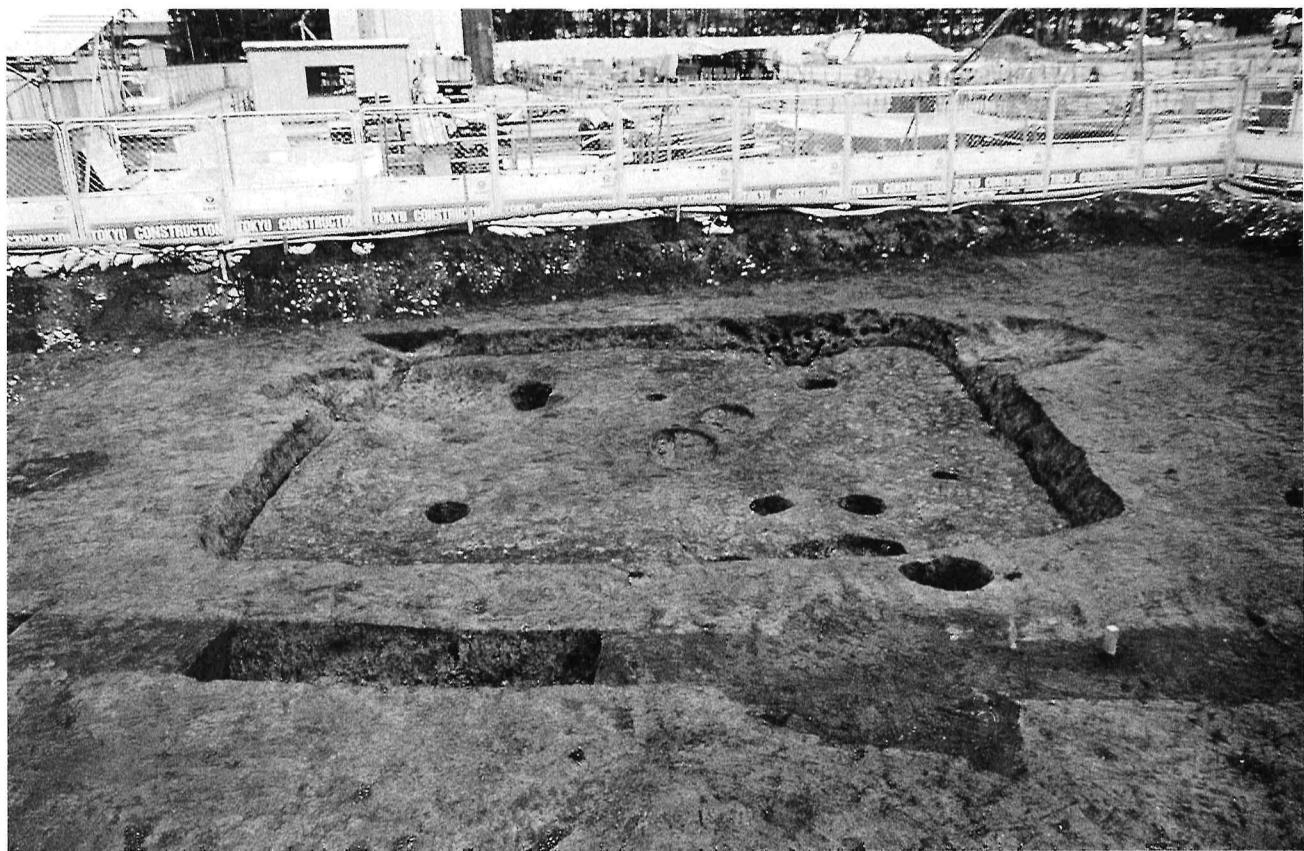
山崎北第7号住

第46図 御新田・上山段階の住居跡

段階	遺跡・遺構	東北系
御新田	御城跡SX01 西下谷田遺跡95号住	二ツ釜式
上山	山崎北遺跡 杉村北遺跡（4号住 2号土坑 3号土坑） 磯岡遺跡（SK-96 SK-98） 清稜高校内遺跡	川原町口式

第18表 宇都宮市内の弥生中期後半の遺跡

写 真 図 版



①SI59完掘状況



②SI59遺物出土状態



①SI61完掘状況



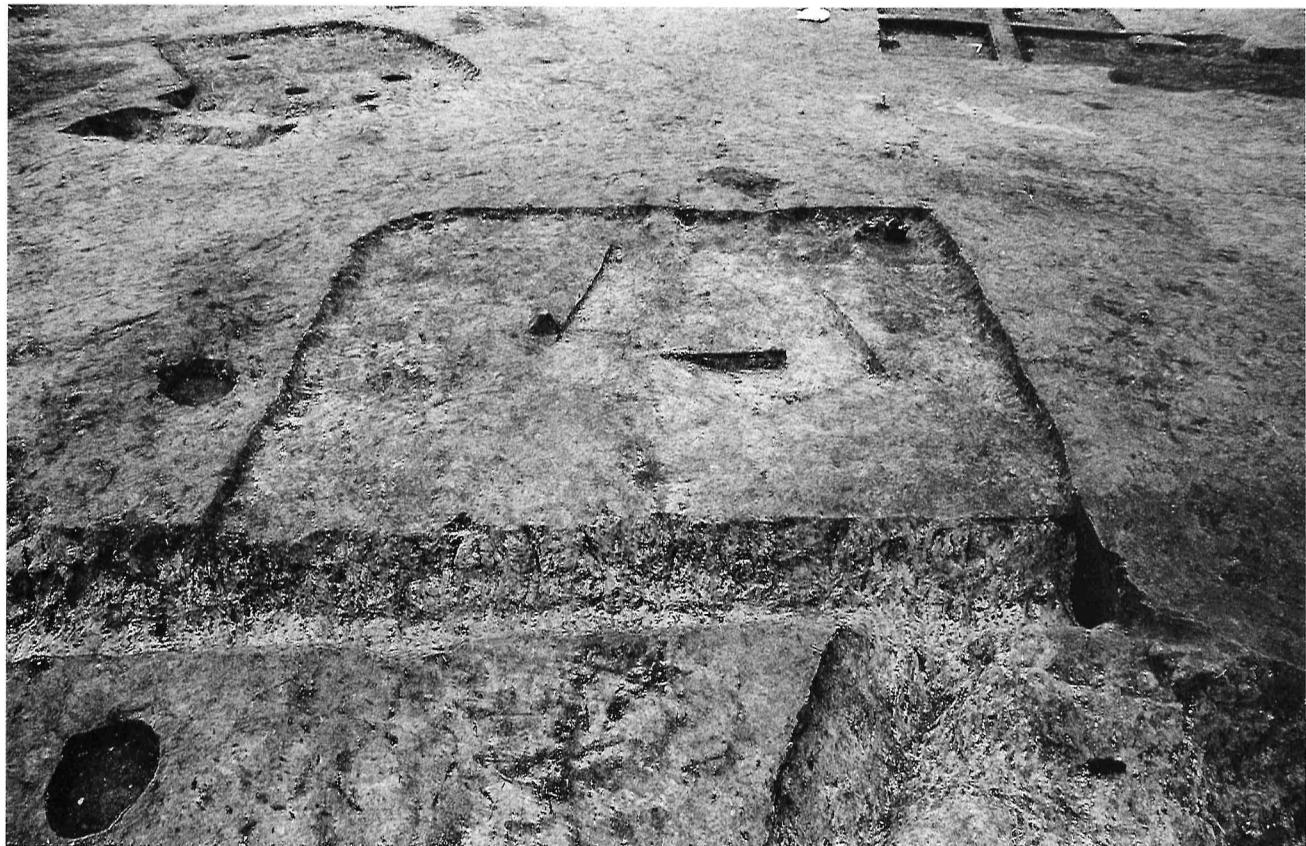
②SI61遺物出土状態



①SI62完掘状况



②SI63完掘状况



①SI64完掘状況



②SI64遺物出土状態



①SI67完掘状况



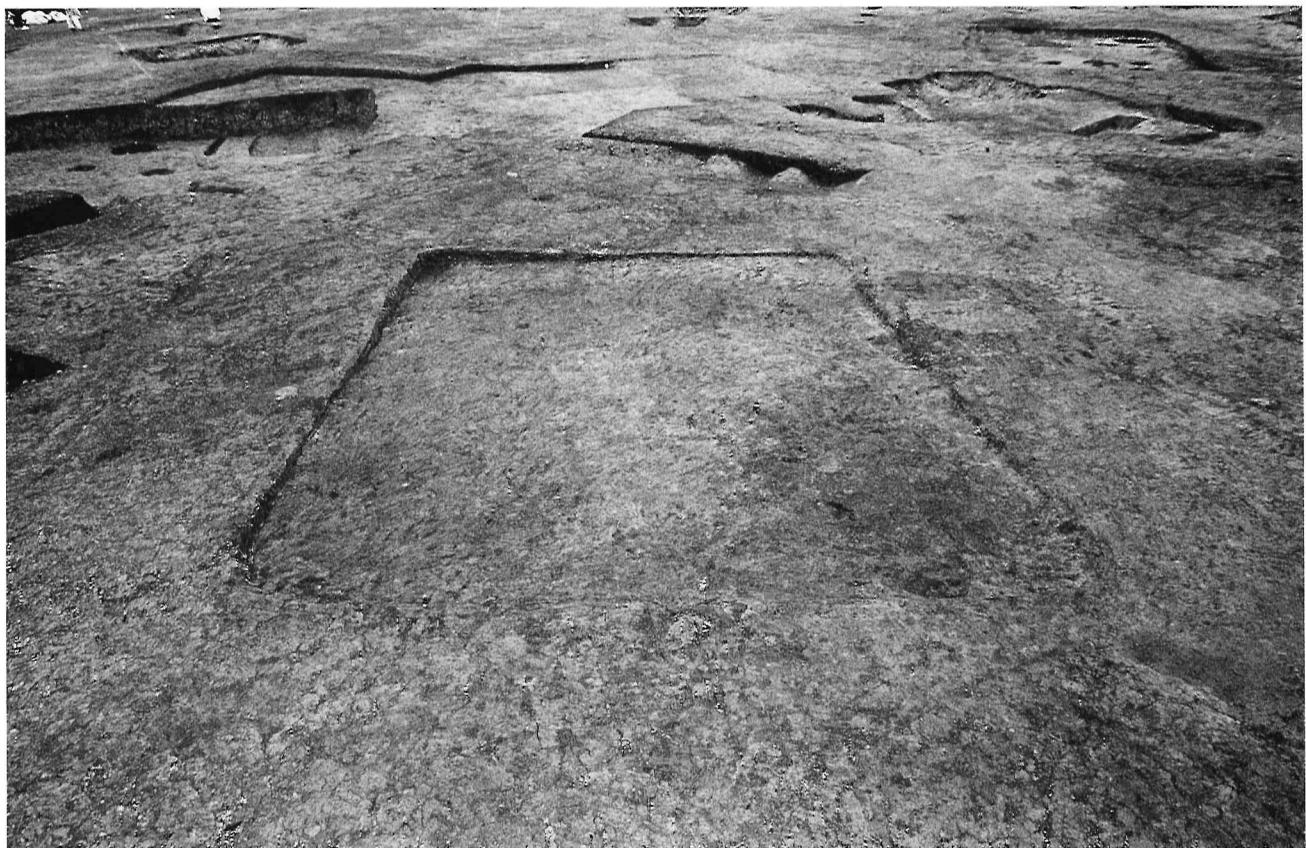
②SI68完掘状况



①SI69完掘状况



②SI70遺物出土状况



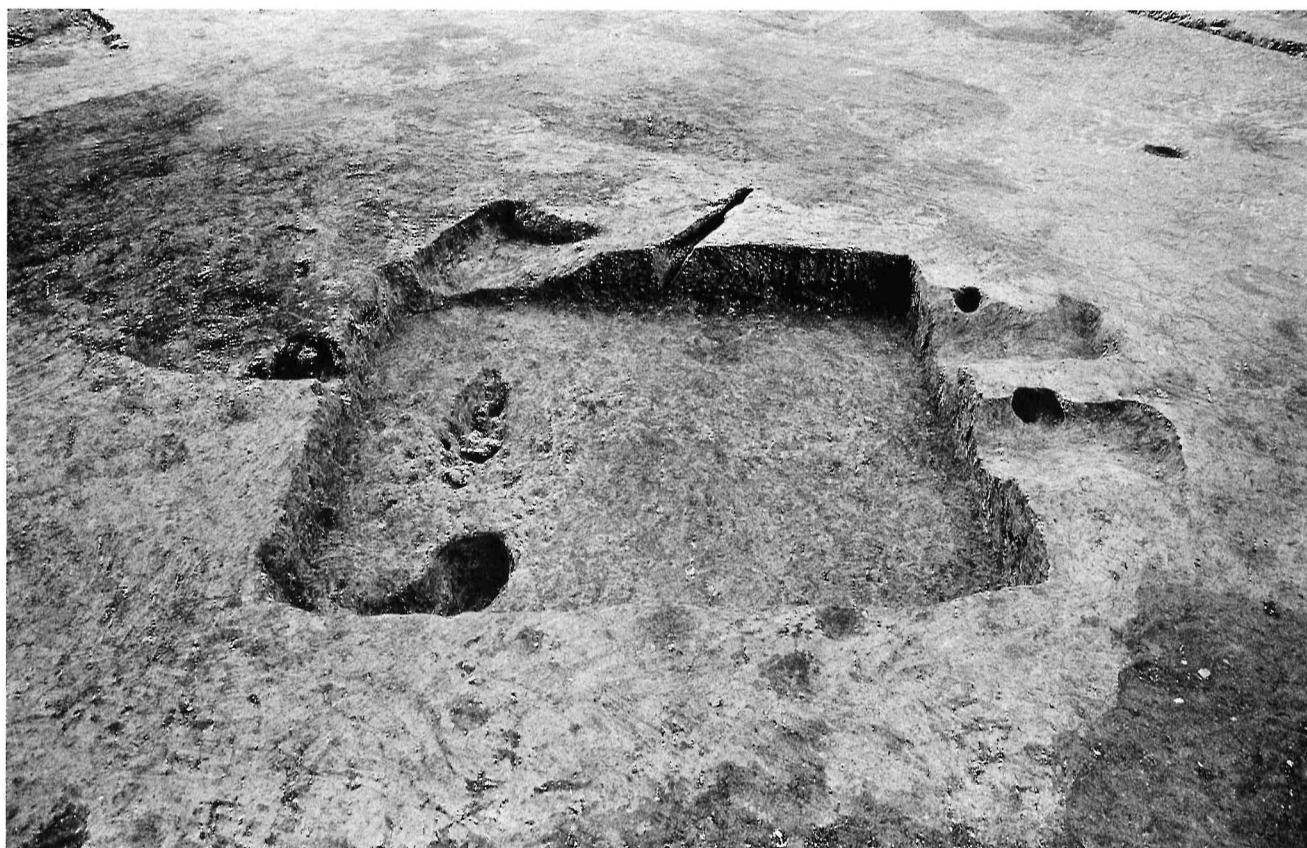
①SI71完掘状况



②SI73完掘状况



①SI73遺物出土状態



②SI74完掘状況



①SI75遺物出土状况



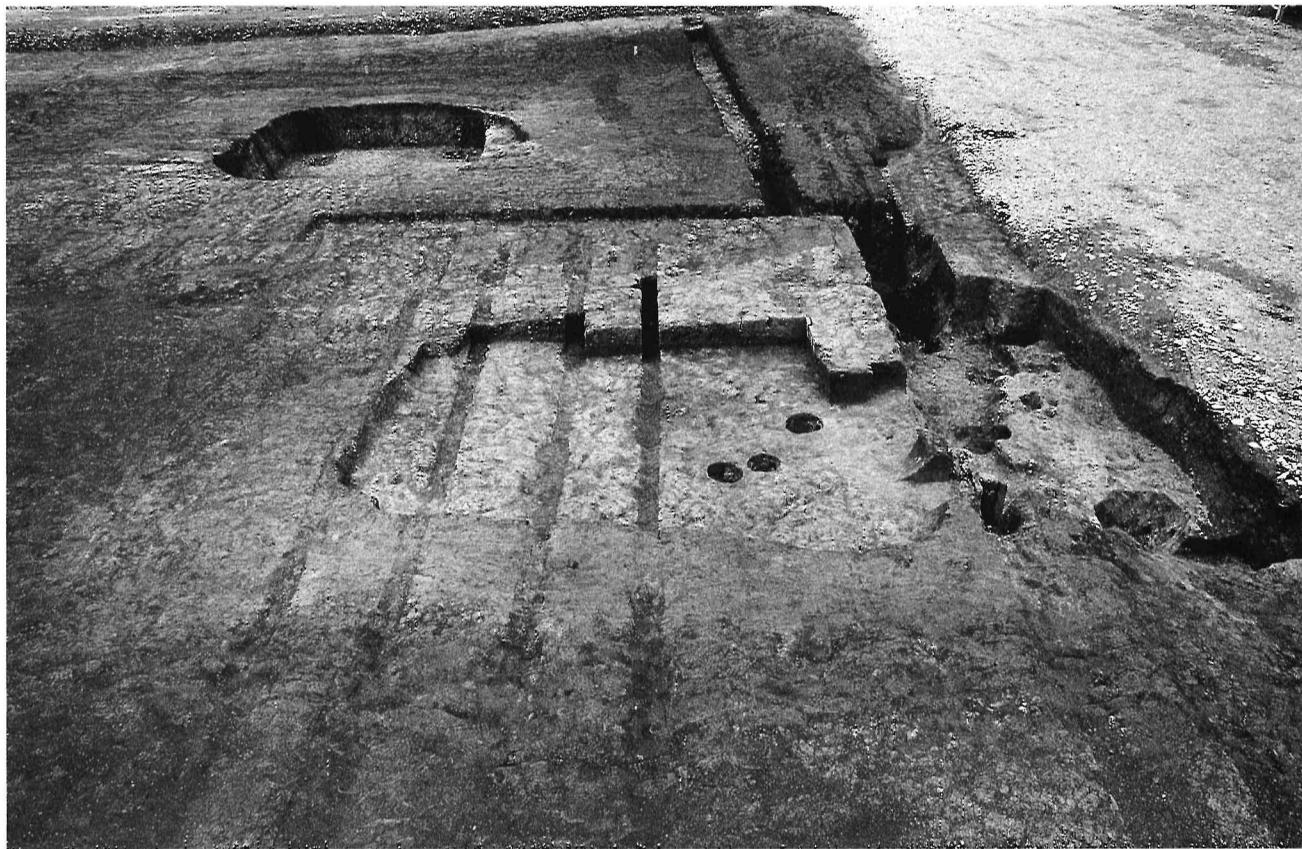
②SI76完掘状况



①SI76遺物出土狀況



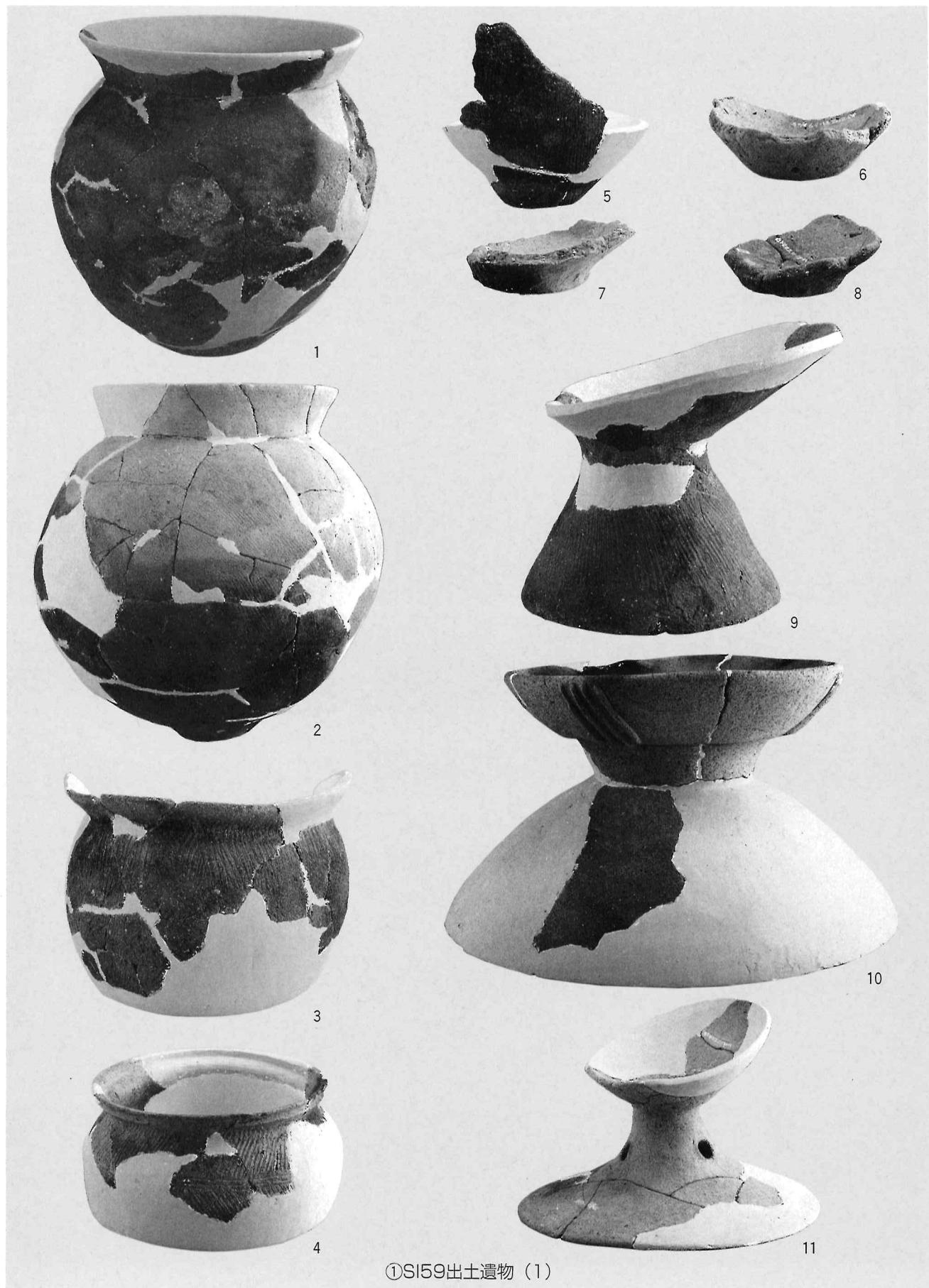
②SI78完掘狀況

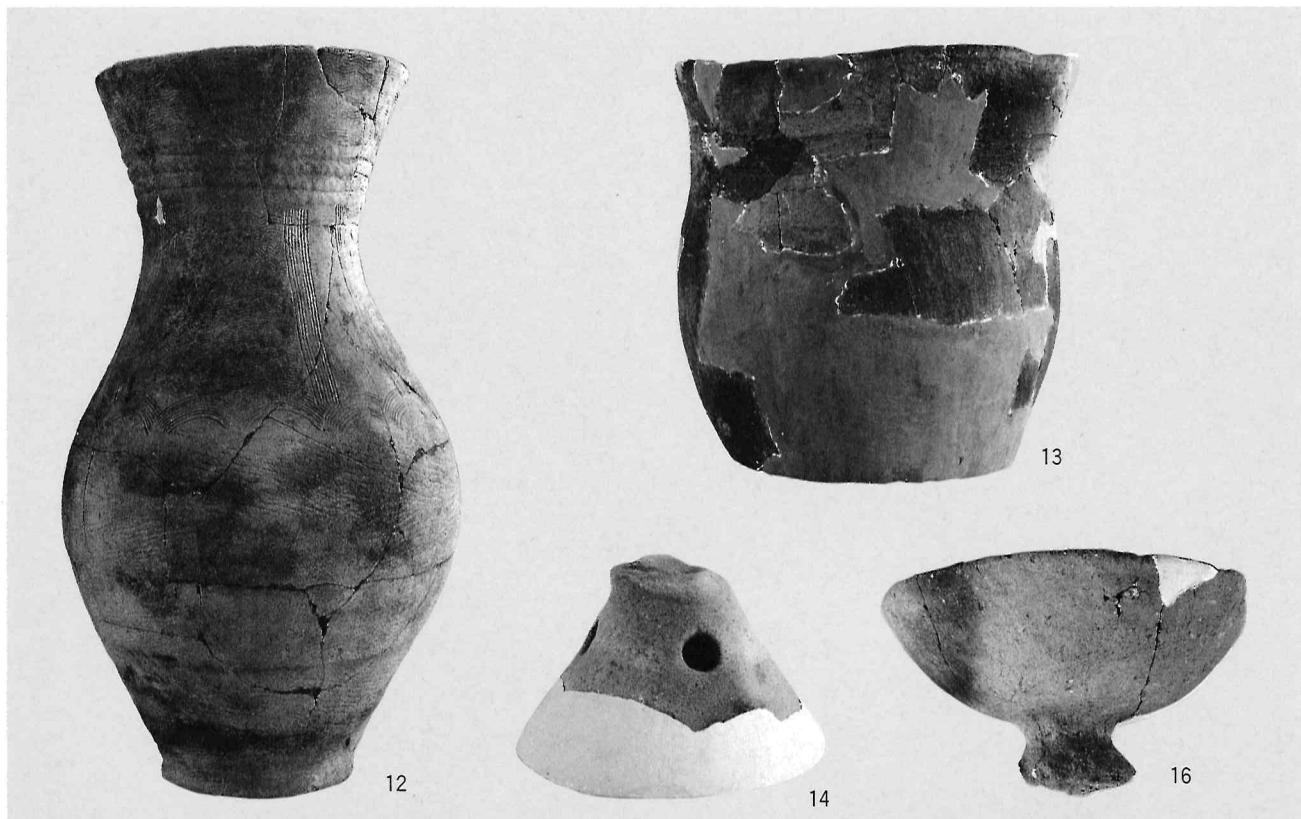


①SI95完掘状況

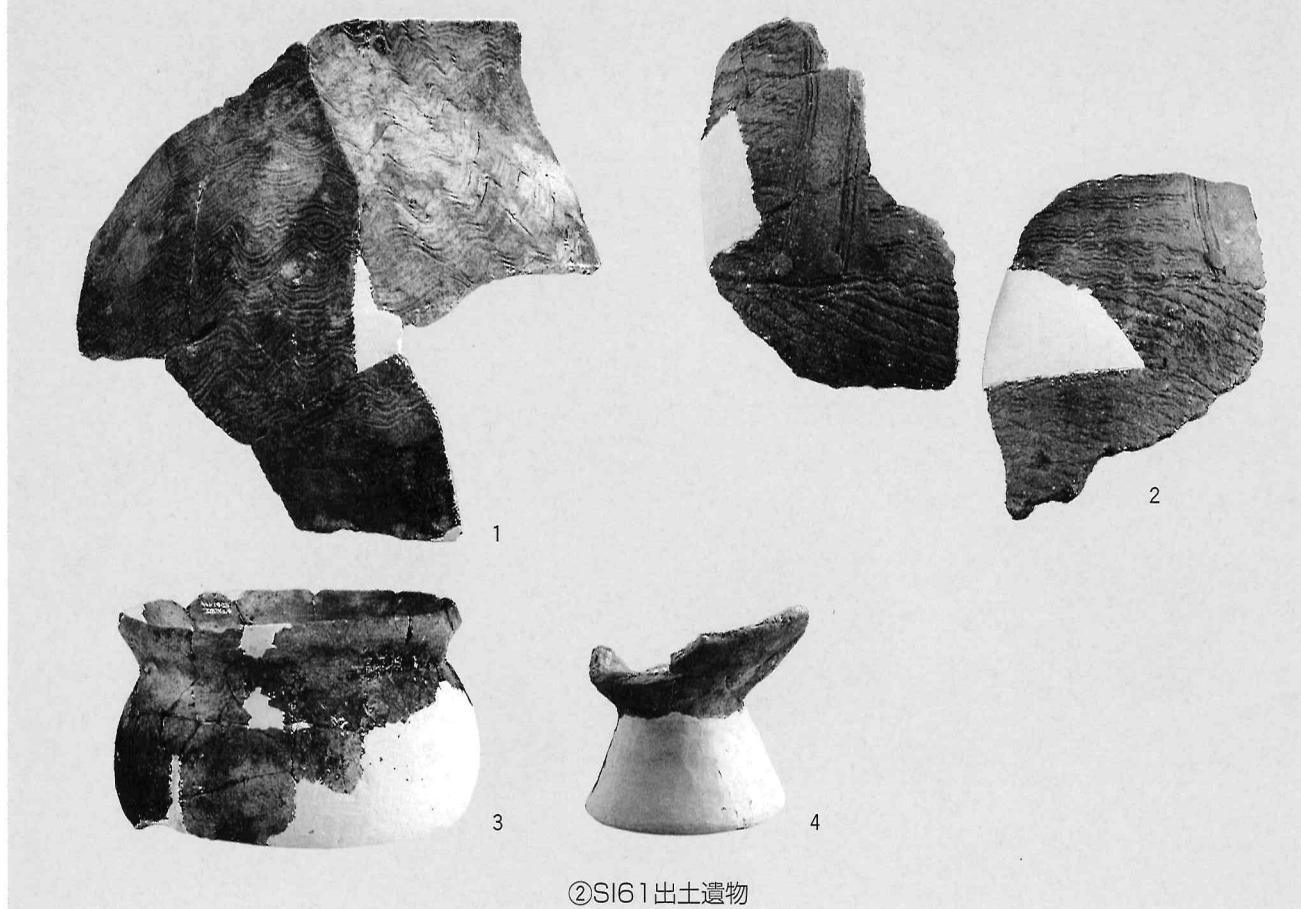


②発掘作業員





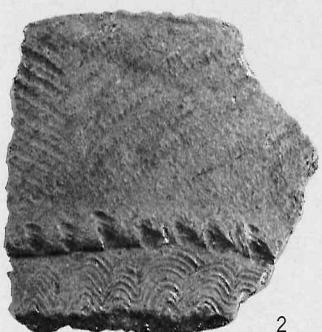
①SI59出土遺物 (2)



②SI61出土遺物

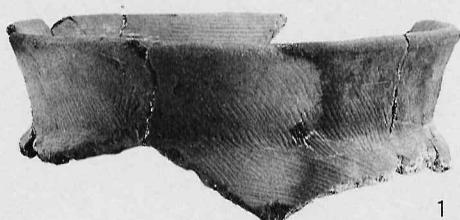


1

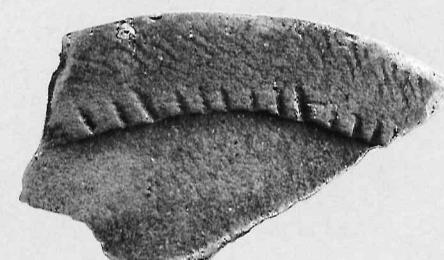


2

①SI63出土遺物



1



2



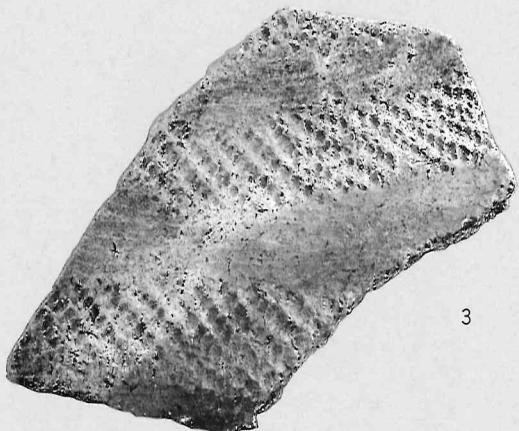
②SI64出土遺物



1

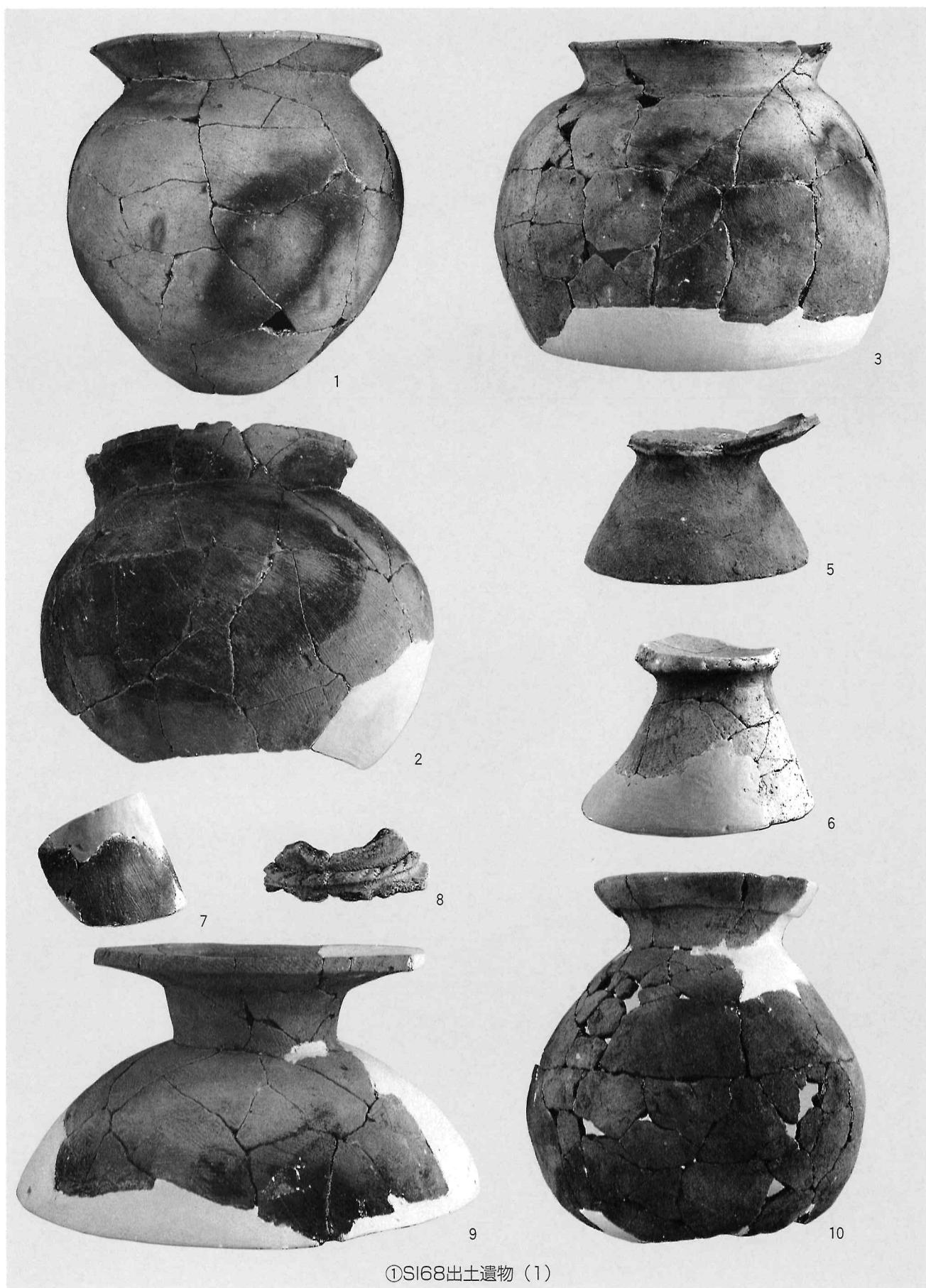


2

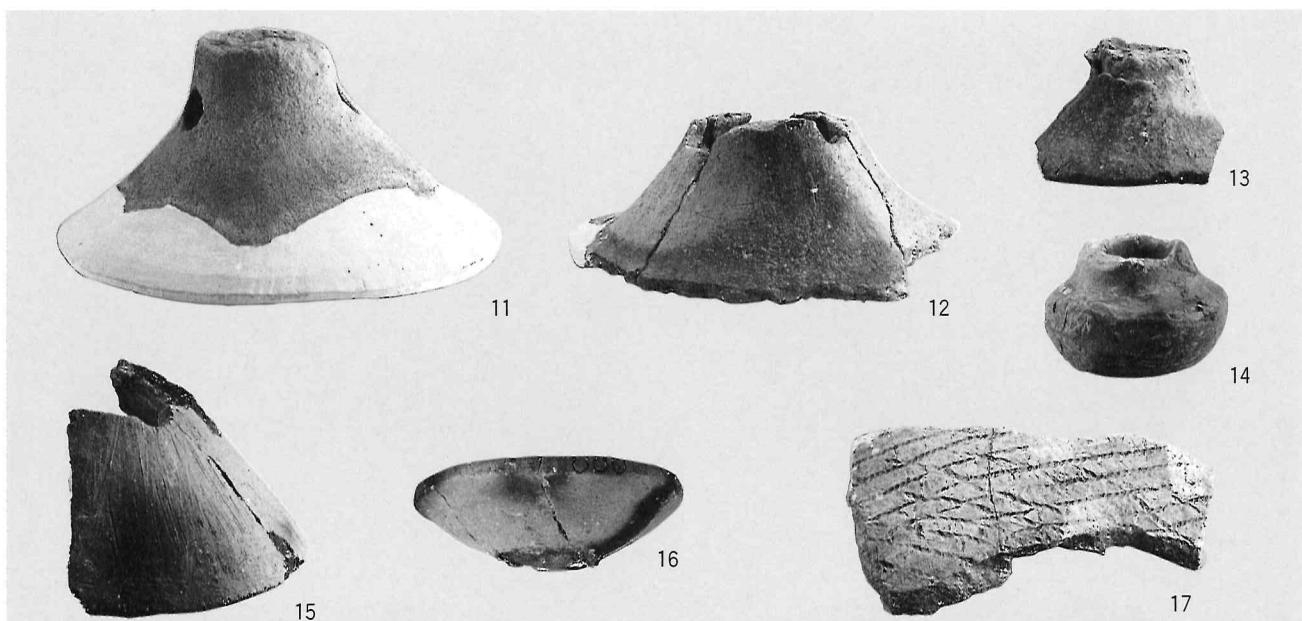


3

③SI67出土遺物



① SI68出土遺物 (1)



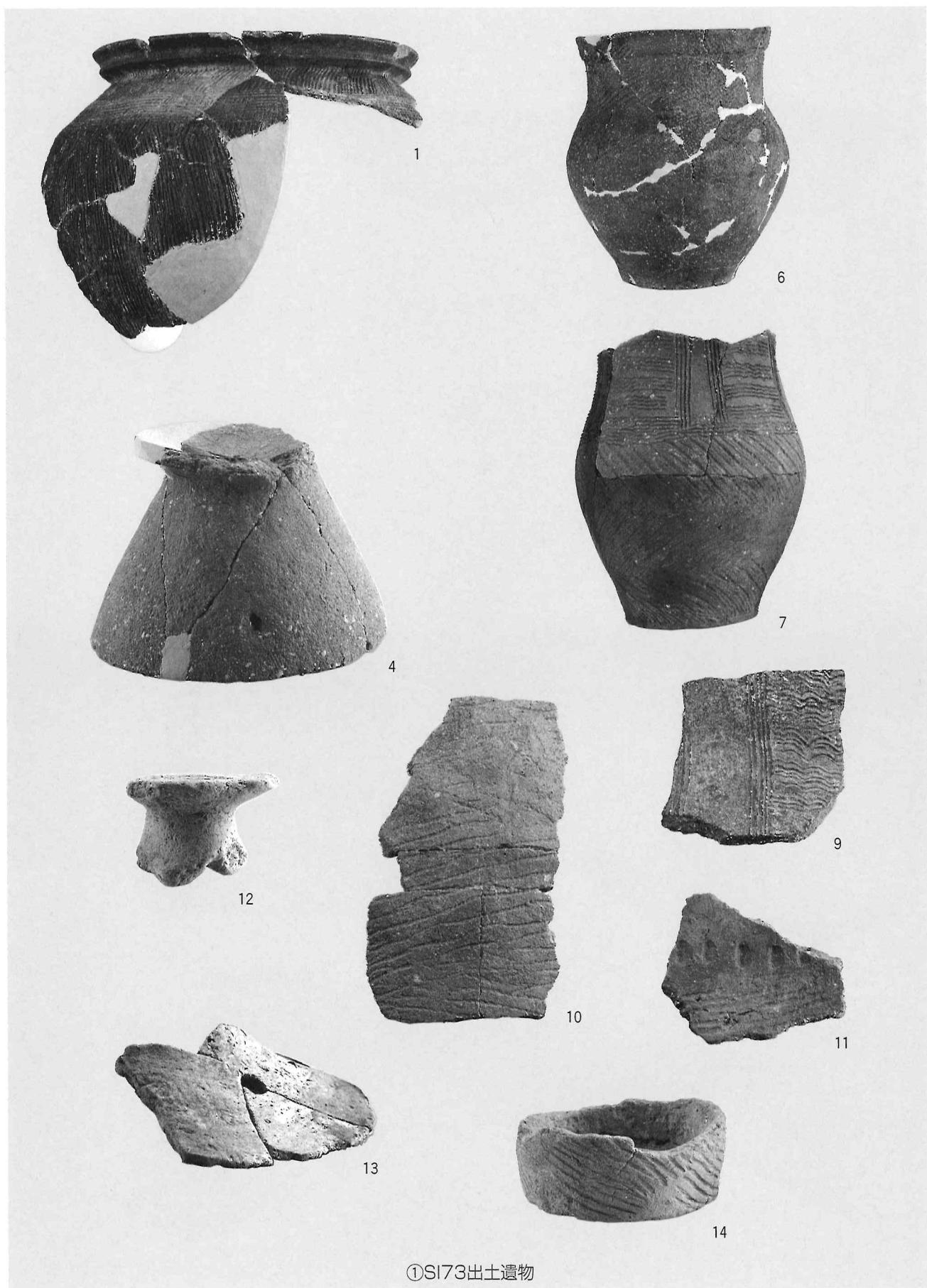
①SI68出土遺物 (2)



②SI69出土遺物



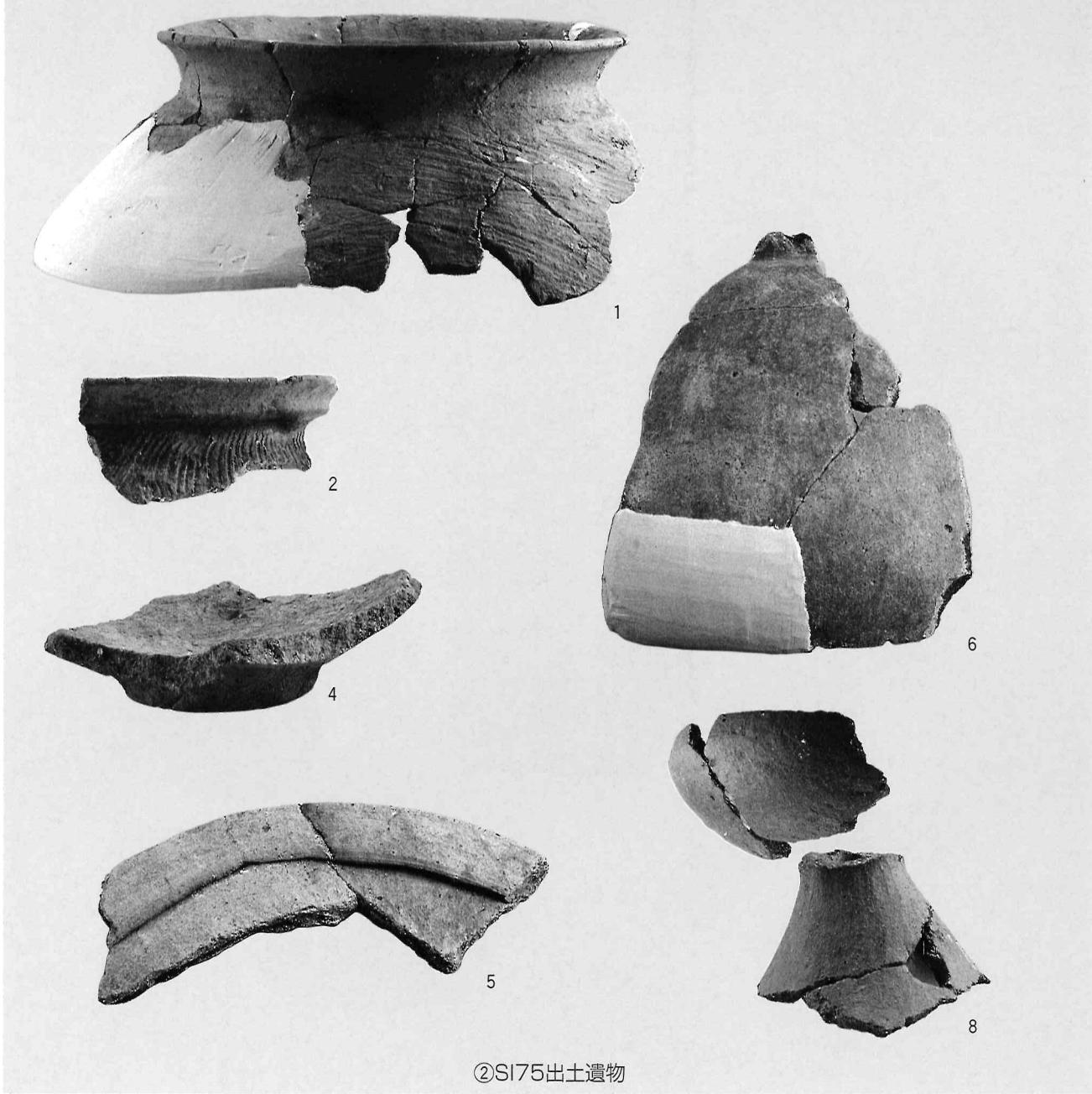
③SI70出土遺物



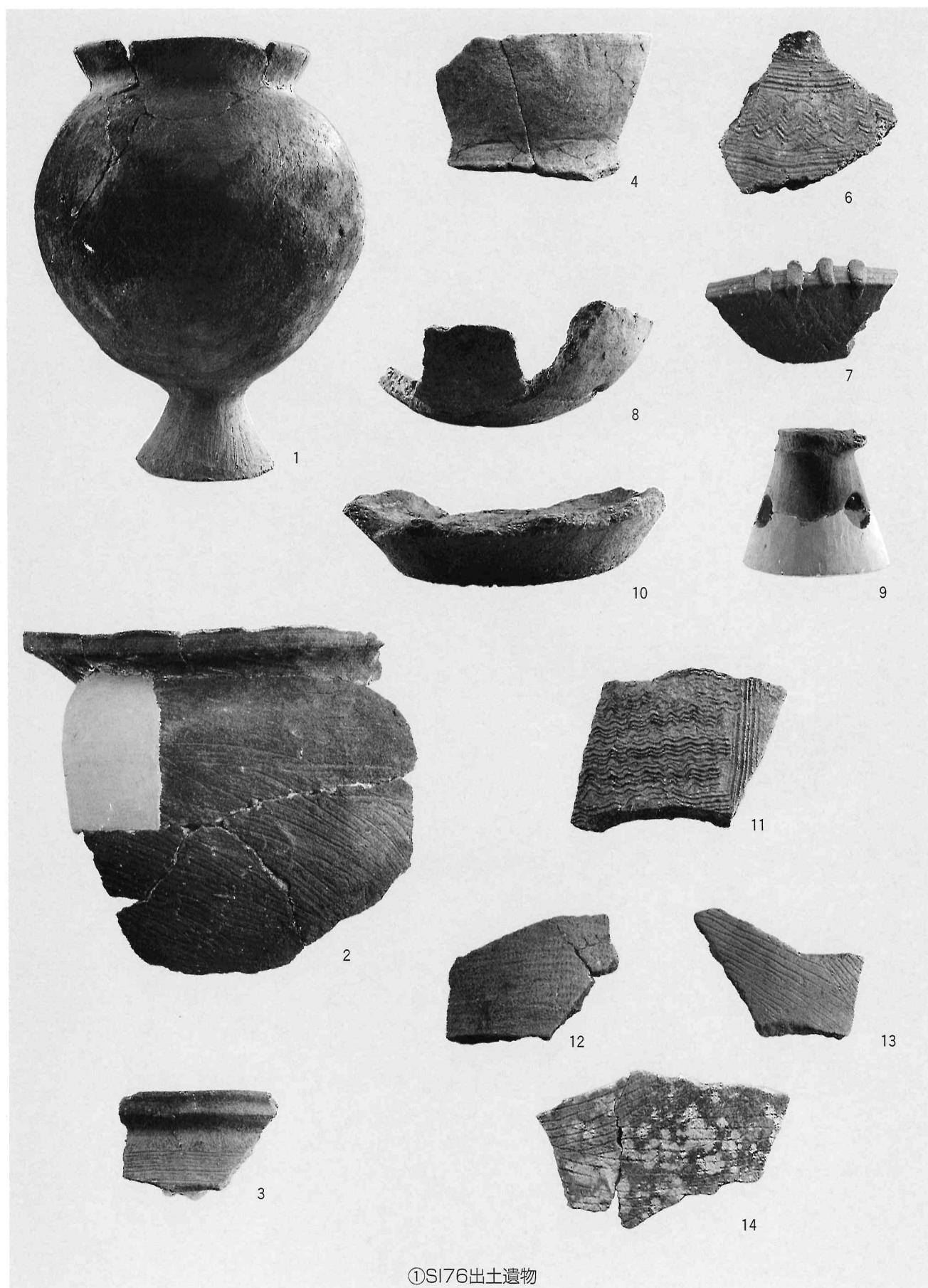
① SI73出土遺物



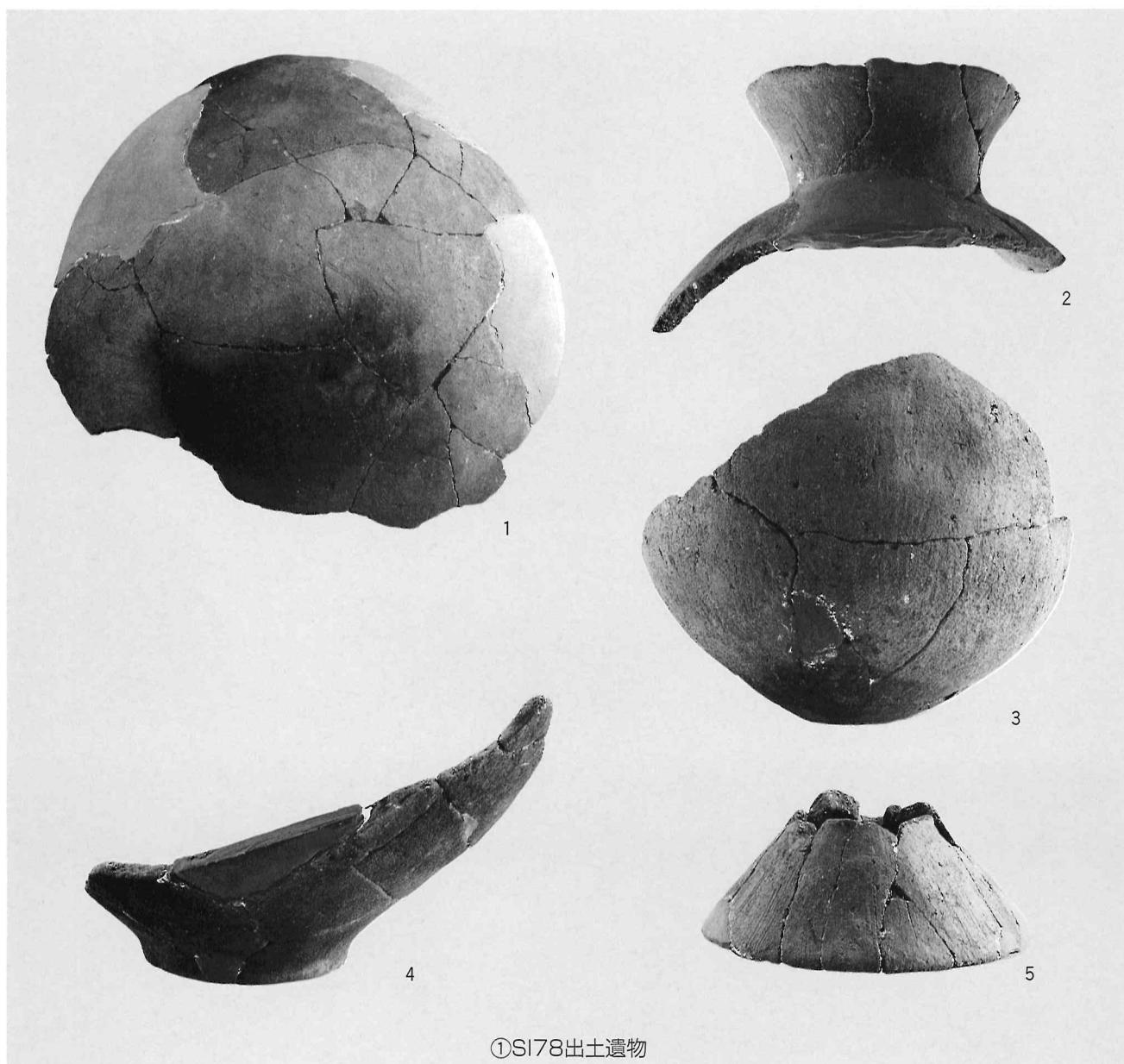
①SI74出土遺物



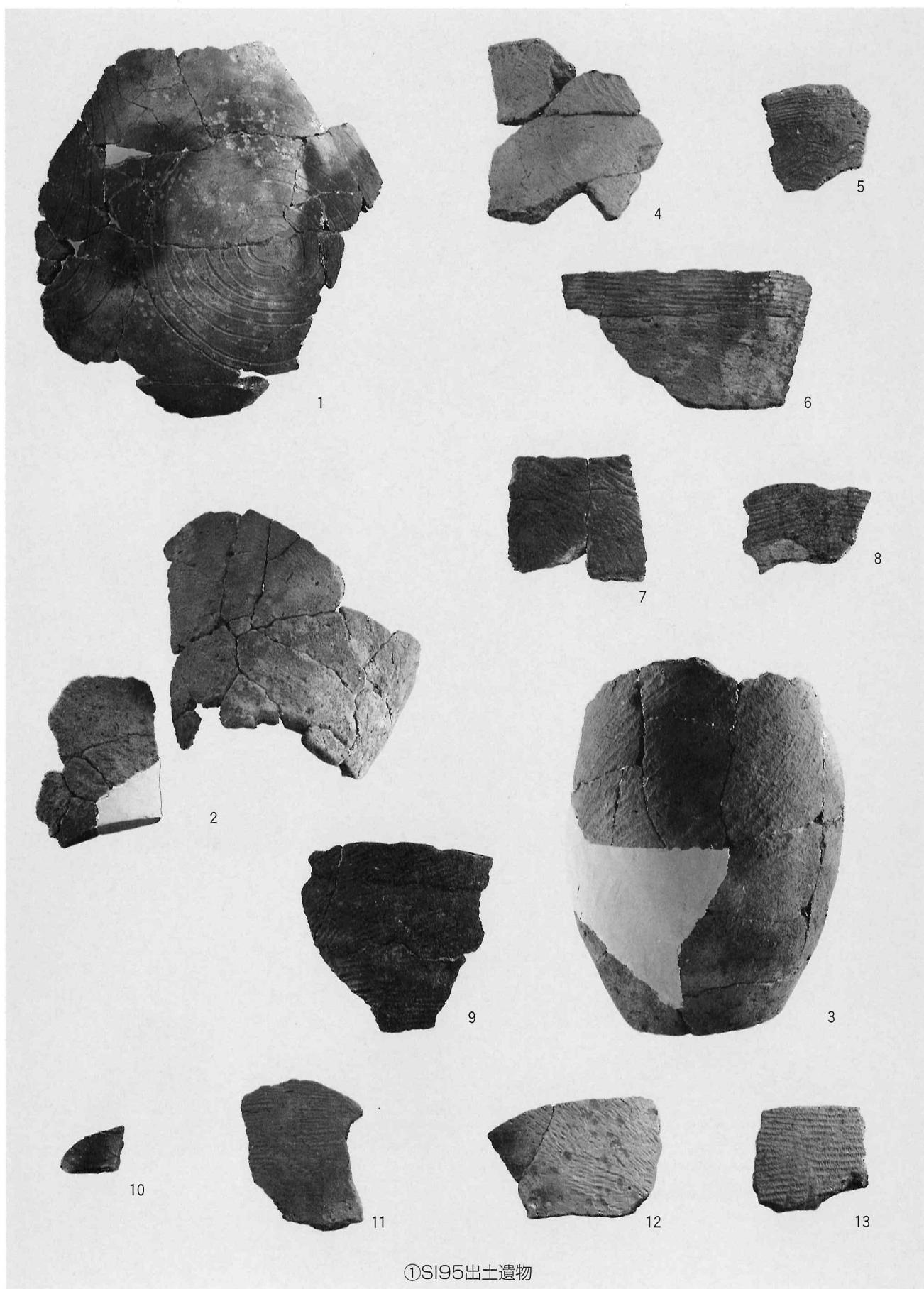
②SI75出土遺物



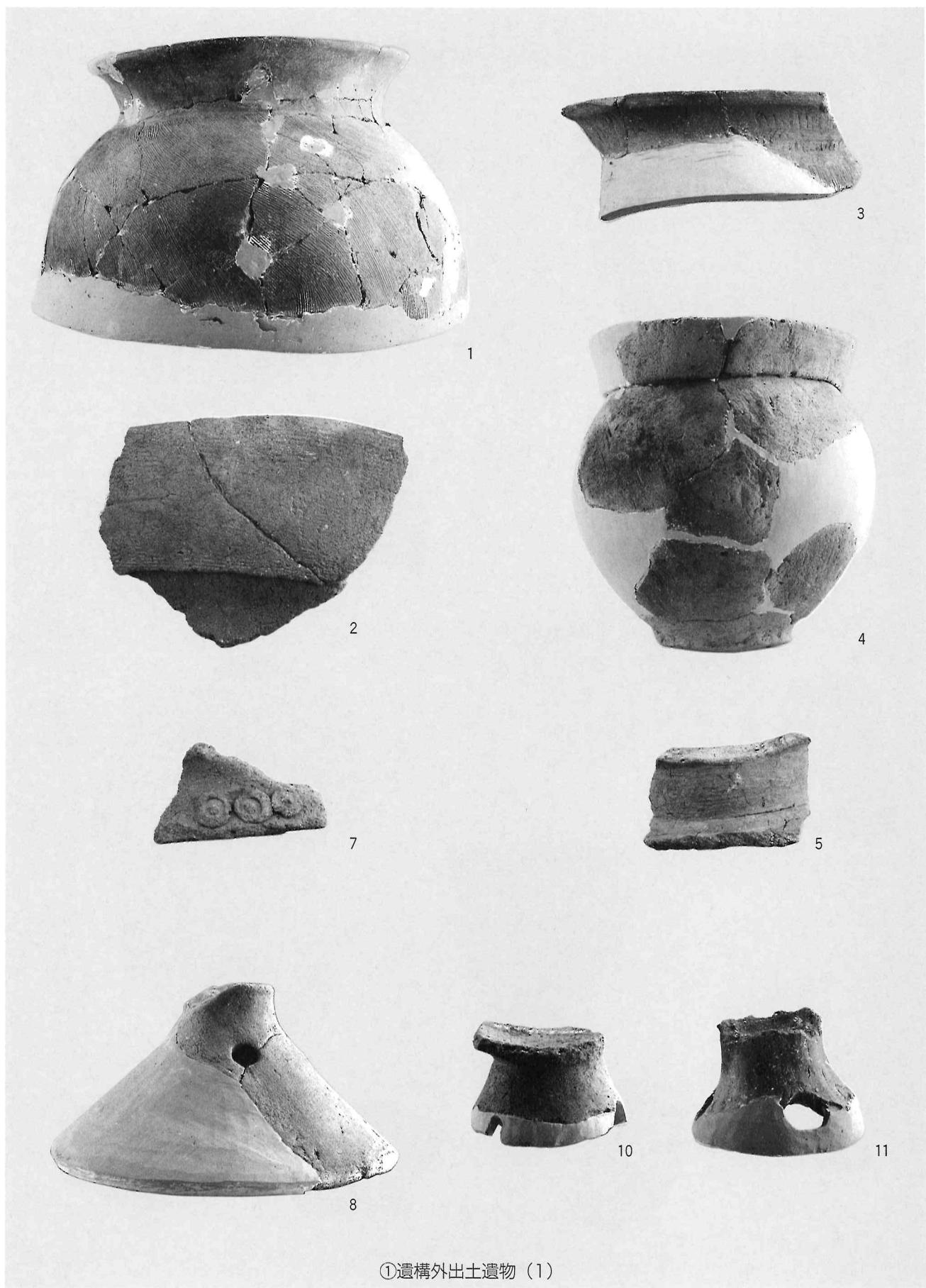
① SI76出土遺物

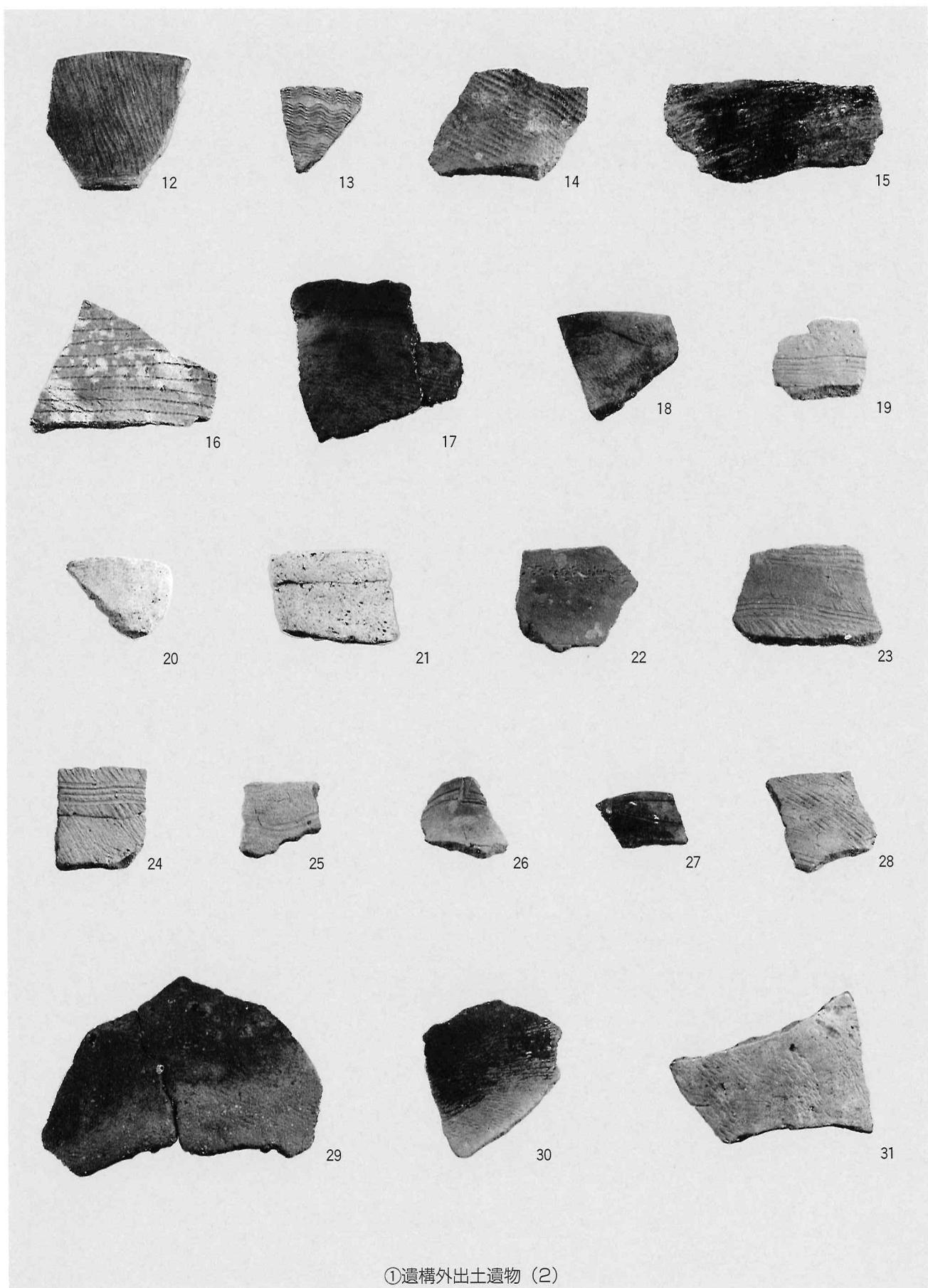


①SI78出土遺物



①SI95出土遺物





報 告 書 抄 錄

ふりがな	にししもやたいせき
書名	西下谷田遺跡 一弥生・古墳時代前期編一
副書名	
卷次	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第56集
編著者名	今平利幸
編集機関	宇都宮市教育委員会
所在地	宇都宮市旭1丁目1番5号 TEL 028-632-2764
発行年月日	西暦 2006年(平成18年)3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にししも や た 西下谷田遺跡	う つのみやし 宇都宮市 も ばらまち 茂原町	09201	467	36度 27分 46秒	139度 52分 39秒	19961210 ～ 19991114	59,200	清掃工場 建設に伴 う発掘調 査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西下谷田遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代	竪穴住居跡 1軒 土坑 1基 竪穴住居跡 12軒 掘立柱建物跡 1棟	弥生土器 土師器	

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第56集

西下谷田遺跡

—弥生・古墳時代前期編—

平成18年3月発行

発行 宇都宮市教育委員会文化課

(宇都宮市旭1-1-5)

TEL (028)632-2764

印刷 (株)松井ピ・テ・オ・印刷

(宇都宮市陽東5丁目9番21号)

TEL (028)662-2511



古紙配合率100%再生紙を使用しています。